

転生者が仮面ライダーになってヴィランしてるからちょっと殺して
くる

日本人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

木場さんの姿で転生したオリ主が転生特典の仮面ライダーヴァイランの能力使って敵ヴァイランしてる転生者達をボコるお話。

2018年8月5日

タグ追加。今後もあるかも。

目次

プロローグ	1
自覚はあんまり無いけどヒーロー大好きな木場っちゃん	17
入学試験の日、バレた	30
クソネズミ（校長）をぶん殴りたい木場っちゃん。テストはアリアの 独壇場	48
戦闘訓練だよ！自重？なにそれおいしいの？	66
備える為にサボったら天罰食らった木場っちゃん	82
USJ——初めてのクソ転生者	95
VS偽カブト1 そして王は目覚める	107
VS偽カブト2 赤き閃光再び	123
ヒーローとしての覚悟とは	139
ドキッ☆拳だらけの猛特訓！〜（命が）ポロリもあるよ！〜	159
動き出すSMART BRAIN 体育祭への仕込み	173
開幕！雄英体育祭！！	183
障害物競走でIT'S SHOWTIME！！	193
木場戦？いや、騎馬戦！	207

プロローグ

やあ、こんにちは。俺の名前は木場勇治。仮面ライダー555と型月大好きな転生者である。えっ？ 痛い妄想も大概にしる？ 本名じゃないだろ？

HHHHA！ 生憎と妄想じゃない上に本名なんだわ。見た目も木場さんそっくりだし。オルフェノクにはなれないけど。死んだ記憶ない上に事故った記憶もない。転生特典なんてもなものない。見た目が木場さんなだけだ。

??どうせならオルフェノク化+オーガギアを付けてくれればいいものを。神はクソ野郎らしい。存在Xくたばっちまえ。俺まだ17(童貞)だったんだぞ。

おっと、話がそれてしまった。それで俺が前世の——つまりは前の俺の記憶を思い出したのは約3歳の頃。なんかこう、ポツ、と頭に浮かんでくる感じで色々思い出したわけよ。それで今世の世界がどんな所かも理解した。

—— あ、ここヒロアカの世界やん。

テレビを見れば『ヒーロー』だの『敵』^{ツイン}だの『個性』だのと言ってんだから間違いない。てかオールマイティだから間違いないわ。

いやもうパニックよ。「俺も個性使えんのか!!」と興奮しまくった。ちなみに俺の今の父母の個性はそれぞれ『大翼』と『射出』。姉貴が1人いて個性は両親2人の複合型。羽を弾丸にしてブツパしまくれるらしい。かつけえ。

これは俺も期待出来る！ とか思いながら個性診断を病院で受けたのだが??、

「??お子さんはどうやら『無個性』の様です」

フアツ!?

いやそりゃねえよ神様よお??。

ヒロアカ転生して無個性て??。頑張つてオールマイティからワン・フォー・オール貰うか? いや、それだと緑谷が悲惨だ。なるべく原作改変はしたくないタチだし。

そこからは悲惨だった。両親2人からは「出来損ない」と言われ、学校に行けば無個性だからとイジメを受けた。ぶっちゃけ精神年齢ずっと大人だったから平気なだったけど。

唯一の味方は姉貴だけだった。俺に何かあれば心配してくれたし両親にも俺の為に反抗してくれた。オマケに美少女。血が繋がってなかったら惚れてた。

が、そんな生活が続けばひねくれても仕方ないと思う。俺は学校にも行かずに遊び歩く様になっていた。一昔前の不良かよと自分でも思ったよ。

転機が訪れたのは10歳の頃、唐突に雄英高校にはサポート科というヒーロー達の支援用にアイテムを制作している人達がいるのを思い出した。

「あ、無いなら作ればいいじゃん」

そうだよ（確信）。なんで気が付かなかったんだ。

マリー・アントワネット方式だよ！「個性がないなら作ればいいじゃない」だ！

さらにここで俺の前世のオタ知識が覚醒。「個性を作る」という事に置いて一番簡単と思える物を必死に脳内フォルダから探し出す。で、結論。

「ライダーズギアだ?！」

そう、仮面ライダー555に登場する5つのベルト（ライオトルーパーは知らん）。ぶっちゃけ一番科学的に造られてるからこの世界でも製作が可能かもしれない。

英霊召喚という案もあるがそもそも俺程度に御しきれとは思えない。ギルとかオジマン召喚してみる。この世界滅びるぞ冗談抜きで。

まあ正直な所ライダーズギア以外にするつもりはなかった。全ライダーシリーズの中で一番好きだし、正直平成2期ライダーは好きにはなれないのだ。

だってドライブなんかライダーじゃなくてドライバーじゃん!?エグゼイドなんて今までのライダー達のデザインから一番かけ離れて

ギア1号ことデルタギア。デメリットを除いて完全に原作を再現出来てる。多分。きつと。

本当に大丈夫なのかって？ 言うな。俺も不安なのをテンション上げて誤魔化してるんだから。

取り敢えずは出来た経緯を説明しよう。あの日から俺はとにかく光に関する論文を調べまくった。暇さえあれば地域の図書館に入り浸り、他県に大きな資料館があると聞けば歩いてでも行った。

アホみたい知識を詰め込んだ結果、大気中に微量のフォトンブラッドが含まれていることを発見。方法？ そっちの想像に任せる。説明なんぞめんどくさい。

で、まあそこからは早かった。ヒーロー向けのサポートアイテムをバラして組み立て、ライダーズギアの原型に当たるものを製作、そこから色々な実験を繰り返してきた結果がこのデルタギアだ。今んとこシミュレーション上なら変身できる様になってる。

「よし、早速使ってみようか??」

「???しまった。確かライダーズギアってオルフェノクの因子持たないって変身出来なかった気が??。いやでもデルタギアは別なんだっただか?でも完全に原作通りじゃないしな??。」

「とりま試しにやってみるか??」

俺はデルタギアを装着、顔の横にデルタフォンを持つてくる。他のライダーズギアと違ってこいつは音声入力式なのだ。

「変身」

『Standing by』

例のイカした音声が響くと共に俺はデルタフォンをデルタムーバーに接続。その瞬間、ベルトから白いフォトンブラッドの光が広がり始めた。

『Complete』

「おおっ！」

「なんだよ出来るじゃ——」

「マジかよクソっ」

マジで変身出来ないなんてな???これは完全にしくじったか？
使うにしてもオルフェノクにならないとダメってことか？

「確かオルフェノク化の方法は??」

死んでからオルフェノクとして復活するんだっけか。他には同じ
オルフェノクに使徒再生してもらうか。

どうする？ オルフェノク化するのを信じてワンチャンダイブ？
それとも他のオルフェノク探して頼むか？

??ベツトするのは今後の人生とかリスクデカすぎだろこの賭け。
てか後者に至ってはそもそもこの世界にオルフェノクいるのか？

「???仕方ない、方法を探そう」

流石に落胆を隠せない。だってそうだろ？ 憧れのライダーに変
身できると思っただらこの仕打ちだぜ？ どれだけ神様は俺の事嫌い
なんだよ。紐神様連れてこいや。

が、それで諦めるほど俺の555愛は温くない。絶対に変身する方
法を見つけてやるさ。

「???帰るか」

万が一盗まれたら困るのでデルタギアは持って帰ろうか。俺はデ
ルタギアを専用のアタッシュケースに収め、ラボを出す。そして俺は
そのまま帰路についた

帰り道。これまた俺は神に嫌われてるらしい。とんでもないモ

ンに遭遇しちまった。

それは俺が人気のない住宅街を家に向かってトボトボと歩いている時の事。薄暗い路地裏から、そいつは姿を現した。

「——ん？」

「あつ??？」

1目見てわかった。敵だ。^{ヴィラン}全身を覆う金属のような光沢、そして鋭く伸びた爪——と言うより剣からは血が滴ってる。異形型の個性だろうか。てか明らかに人を殺ってるヤベえ。

その敵の男は俺を見てニヤリといやらしく嗤った。^{ヴィラン}

「ははっ今日は運がいいねえ！ また獲物がよって来るなんて！」

男が右腕を引き絞る。あ、これやばい。早く逃げろ俺。そう思った時には遅かった。

「っガア!？」

腹部に鋭い痛みが走る。恐る恐る見てみれば奴の爪が俺の腹に突き刺さっていた。あかん。めっちゃ痛い。

「が、ごほっ!？」

「ちっ、仕留め損ねちゃったよ」

男は勢い良く俺の腹から爪を引き抜く。それと同時に傷口から血が吹き出した。口からも血が溢れてくる。重要臓器をやられたらしい。不思議と俺の頭の中は冷静だった。

「ん??、連中嗅ぎつけたかな？」

男が俺から目を離す。どうも別の方向が騒がしい。ヒーロー達が来たのだろうか。てかはよ助けてや。何しとんねん。俺もう死にそうなんだけど。

「こりゃやばいな。さっさとトンスラしようかねつと」

男は最後に俺を一瞥して嗤う。

「じゃあねクソガキ。恨むんならこんな所を出歩いてた自分を恨みなよ」

男はそれだけ言って俺に背を向ける。それと同時に俺の視界が段々と暗くなり始めた。

オイ、嘘だろ? だってまだ何もして無いんだぜ? 必死に身体を

動かそうとするがピクリとも反応しない。

あ、ダメだこれ。俺――

――死んだわ。

「ふうー、次の獲物は何処だろうなあーつと」

いやー気分が良い。これだから敵は辞められない。僕は爪についた血を振り払いながら1人心地る。

だってそうでしょ？せつかくの個性があるのにそれを振るえないなんて馬鹿みたいじゃん。

僕の個性の『鉄人化』も喜んでるよ、思いっきり使ってもらって。今の社会は本当にクソだ。ヒーローなんて連中がいるから満足に個性も使えない。生まれ持った個性ちからを使うのに資格があるなんておかしいでしょ？

だから僕はこうやって力を振るうんだ。僕達は自由なんだって証明するために！」

おっと、声に出していたらしい。気をつけないとね。

「???それが、理由か」
「へ？」

後ろから声があった？僕が驚いて振り向くとそこにはさつき殺した筈のクソガキが立っている。クソガキはこちらを憤怒の形相で睨んでいた。

「あーら、生きてたの？もしかして再生系の個性？だとしたらラッキーー！また君を切れるんだから！」

「??ああ、本当、胸糞悪い」

クソガキはぶつぶつと何か言ってるが僕の耳には入らない。

「じゃ、切るね！」

僕は凶器とかした右腕を振りかぶった――

「うるせえから少し黙れ」

――が、クソガキに受け止められる。

「は？」

何とも間抜けな声が口から漏れる。なんでこのクソガキが僕の攻撃を止めれるんだよ？

「おい、テメエ」

「あ？　なんだ???よ??」

クソガキに呼びかけられ奴の顔を見た。

???なんなんだよこれ。コイツの顔全体に変な紋様が浮かび上がってる。

「死んでろ」

奴が拳を振りかぶると同時に奴が馬のような顔をもつ灰色の化け物に変化する。反射的に飛びのこうとするが奴に掴まれていて逃げられない。

「ま、待っ――」

「待つかボケ」

奴が突き出した拳が僕の顔面に叩き込まれる。全身が宙に浮くような感覚に包まれる。その感覚から数秒後、僕の意識は闇に閉ざされた。

うん。殺っちゃったぜ☆。ついブチ切れて本気でぶん殴ってしまった。デルタギアの件でイラついてたらとんでもなくくだらん理由で殺されたんだ。これぐらいはいいだろう？

てか俺???オルフェノクになってる!?

「しかもホースオルフェノクとか??」

マジで木場さんじゃねえか。これは俺にオーガになれという神の

啓示か!?

「???んなわけねえか。てかこの敵サイランどうしよ。放置するわけにもいかないしな??. いっその事殺っちゃう? 殺る? よし、殺ろう(確定)。」

「——おいおい! 何があつたんだよ!?!」

イラつきのあまり男の顔面を踏み潰そうと奴に向けて足を踏み出そうとしたらなんかまたいかにも敵サイランって奴が来たんですけど。こいつの仲間か?

「???ならばぶつ飛ばしても問題ないよな? 無いよね? よし、無いな(確定)。」

俺はアタツシケースを開き、オルフェノク化を解きながらデルタギアを装着する。

「おい、アンタ」

「ああ!?! てめえがこいつをやったのか!?!」

めんどいから無視する。

「てめえがライダーズギアの目撃者第1号だ。光栄に思いな」

「何訳のわかんねえ事言つて——」

「変身」

『Standing by』

『Complete』

デルタフォンをデルタムーバーに接続。ベルトから白いライン——
——フォトンストリームが全身に伸び、俺は白光に包まれる。

光が収まった時、そこには白いラインが走る黒い鎧を纏った俺——
——仮面ライダーデルタが、確かにそこに立っていた。

驚愕に顔を染めた目の前のクソ野郎に俺は言い放つ。

「——さあ、お前の罪を数えろ!!」

作品違う? 気にすんな。

「クソっ、クソっクソおっ!？」

ふざけんなよ!?! ヒーロー共を撒いて漸く好き勝手出来ると思ってたのにな?なんで仮面ライダーがいるんだよ!?!奴はよく分からないことを言った後、首をコキリと鳴らしながら近付いてくる。

「畜生が!?! やられてたまるかよオ!!」

先手必勝、俺は個性の『岩石』を掌から射出する。直径1m弱の大岩は寸分たがわず奴の顔面に飛んで行った。

奴は軽く腕を振り、岩のど真ん中に拳を叩き込んだ。結果、あつさり岩は砕け散った。

「ハア!」

「はあ!?!」

奴と俺の口から発せられた言葉。同じ音でもそこには明確な違いが現れている。奴は軽く気合を入れただけ。

俺は攻撃がいつも簡単に防がれた事への驚愕。

奴はプラプラと軽く手を振り握ったり開いたりして感触を確かめている。

「しっかりと機能してるな。第1段階はクリアってところか」

余裕綽々なその態度が癪に障る。怒りに任せてそのまま何発も奴に岩石を放つが、

「————ハアアアアアッ!!」

岩石を掴まれ、投げ返されて相殺され、アッパーで粉々に吹き飛ばされる。俺の個性が全く通用しない!?!

「身体にも馴染む??!第2段階もOKだ。さて、」

奴は腰のベルトから無線機のようなものを引き抜き、それと一緒にメモリをベルト中央から取り外した。

「第3段階だ。死ぬなよ?」

『Ready』

機械音声が響くと同時に銃身が伸び、無線機が銃になった。

『Check』

『ExceedCharge』

奴の全身に張り巡らされた白いラインを同色の発光体が伝う。そ

れが奴の左手にたどり着いた時、甲高い電子音を響かせながら銃から白い馬鹿でかい角錐が俺に向かって射出され突き刺さった。とは言え特にダメージがある訳じゃない。が、

「う、動けねえ!？」

まるで全身に鉛がまとわりついているかのように身体が動かない。俺がもがいているうちに奴は銃を腰に収め、その場で飛び上がっていた。俺がその事に気づいて上を見あげた時には既に遅かった。

「ルシファーズ、ハンマアアアアアアア!!！」

奴から放たれた蹴りが俺の胸に突き刺さる。薄れゆく意識の中、俺の目の前に浮かんだ△^{デルタ}の文字を俺は一生忘れることが出来ないだろう。崩れ落ちながら、俺はそんな事を思っていた。

「第3段階???クリアだ」

きっかり必殺技も発動してるしオルフェノクじゃない敵^{ライアン}の奴も灰化していない。デルタギアは本当の意味で完成したのだ。

「いよっしっ! なら次はカイザだな」

カイザギア——仮面ライダー界屈指のド外道(と勝手に思ってる)草加雅人が変身する、仮面ライダー555における2号ライダー。普通の人間が使用すれば即死亡という別名『呪いのベルト』である。確かこいつはデルタの後に造られたやつだったか。帝王のベルトという手もあるが今の俺がアレを再現しようとすればデルタギアをバラして作り直す必要がある。それは避けたい???ならばカイザギアしかないだろう。

そのままデルタの状態で色々と考え込んでいると突如声がかかる。

「き、貴様っ!？」

「あん？」

あー??なんだっけかコイツ。原作でのヒーロー陣営にこんなのが居た気が??。

「貴様も仮面ライダーだな!? ここで捕らえる!!」

「へ？」

いや待てや。なんで仮面ライダーを知ってる? てかも? まさか他にも転生者が? そもそも捕らえるって何よ? 俺がパニックしてる間ヒーローらしき人は攻撃してこなかった。こちらを警戒しているのかかなり顔が強ばっている。

「くっ、せめて他に誰か居れば??」

「—— H A H A H A ! もう大丈夫! 何故かって?」

「え？」

「あ、貴方はっ!？」

え、まってなんでアンタがそんなおもくそ拳を引き絞って、

「—— 私が来た!! DETROIT SMASH!!」

「待——」

ドゴオオオオオオオオオオオオ!!! と爆音を立てて俺の胸に彼——
—— オールマイトの拳が突き刺さる。

俺は声も出せずに吹っ飛んだ。全身を浮遊感が襲う。そのまま吹き飛び続け少し離れた山に着弾してようやく止まった。

なんでそんな事がわかったのかって? だって俺がいたはずの場所を強化されたライダーアイでみたらめっちゃ離れてるもん。周りも森だし。なぜぶん殴られたのかはわからんがさっさと逃げようと思いついた場所を後にしたら山の中だったんだよ。オールマイトマジバケモン。

??あ、アタツシケースほったらかしだ。高かったんだけどなアレ。

まあ過ぎた事は仕方ない。取り敢えずここからならラボの方が近いので一旦そつちに避難するか。

で、仕方なしにラボに戻った俺を迎えたのは？、

「おかえり」

「??取り敢えず聞きたい事がいくつかある。まず第一に鍵かけてたのにどうやって入った？ 第2になんでテーブルの上に料理がある？」

第3、持ち込んだ覚えのないテレビとかの家電があるんだが？」

黒髪ロングのスレンダー無表情系美少女が何故か居る。テーブルの上にはめちやくちや美味そうな料理が並べられている。てかそもそもここキッチンなんて無いんだけど??。

「愛の力」

「??まあ万歩譲って良しとする。でもな??」

俺はビシツと指を突きつけた。

「なんで裸エプロンなんだよ!!?」

何故か裸エプロンのこの美少女、名を木場翼という。お察しの通り俺の姉だ。姉貴は??天然というかなんとというか??ちよつと行動が読めない。現に、ほら——

「ふみゆ??ちゆ、チュパッ、じゆる」

「——つて指を舐めるな!?!」

突き出した指をそりやあもう丁寧にペロペロと舐めてくる。この姉、自分で言うのもなんだけど俺の事が大好きすぎる。両親が俺を嫌ってる反動で俺の事好き好き大好きになっちゃった残姉なのだ。俺が指を翼の口から引き抜くと唾液がツーーと糸を引く。ヤベえめっちゃエロい。

「ダメ?」

「ダメに決まってるだろ??」

こんなんでも成績は常にトップクラス。良個性と整ったルックスもあって学校の人気者。でも家だと残姉ちゃん。どうしてこうなった？

「てかこのテレビどした?どう見ても最新のモデルだろ?」

俺は基本テレビを見ない。研究が忙しくてそんな暇なんぞ無かったのだ。つーわけでここんこの社会情勢なんでも全くわからん。

「頼んだら、買ってくれた」

「??ちなみになんて?」

「パパ、買って? って上目遣いで言ったら買ってくれた」

「親父エ??」

娘にいい様に使われてんじゃねえかオイ。

「テレビ見ながら、一緒に食べよ?」

「あーわかった。わかったから服を着ろ。OK?」

「おーけー」

サムズアップしながら俺の前にも関わらずエプロンを脱ぎだす翼。もうちょい恥じらいを持つとや??。

『今日夕方未明、〇〇市で新たな『仮面ライダー』が発見されました』
「ん?」

テレビから流れてきた言葉に食事の手を止める。テレビを見れば若いアナウンサーと歳食った解説っぽい男が話していた。

『また新たな仮面ライダーが現れましたね』

『その様ですね。確か今回の奴は通りすがりの敵を2人倒した後にヒーローと交戦。オールマイトに吹っ飛ばされて姿を消したと聞いています』

「???どういうこった?」

あのヒーローもそうだが明らかにこの世界の人間は仮面ライダーを知っている。存在する筈の無い彼らをだ。しかも口振りからしてあまりいい印象を持っていないらしい。

『そもそも仮面ライダーとは何なのですか?』

『そうですね??彼らが初めて出現したのは25年程前の事です。突如現れた彼らは摩訶不思議な道具を使い敵、^{サイラン}ヒーロー、一般市民を次々

と殺害。そこから各地に仮面ライダーを名乗る男達が出現。殆どがオールマイトに倒されてますがクロノスの様にオールマイトクラスの実力者もおり討伐は困難を極めています。オマケに彼らの目的も謎。彼らが現れてから灰色の怪物が出現し始めたとの報告もあり――』

途中から解説のおっさんの話が全く頭に入ってこなかった。おい待て、するてーとあれか？ 俺以外の転生者共は全員仮面ライダー^{サイラン}で敵やってたど？ しかも今現在絶賛敵^{サイラン}プレイ中の奴らがいると。

――ほお??。成程な、俺がやるべき事はよーよーくわかった。俺は残りのメシを一気にかき込んだ。

「翼」

「ん」

「メシ、ありがとな。美味かった」

「ん、お粗末様」

翼の言葉を聞きながら俺はラボの奥の研究室へ行く。今の俺の顔はとんでもないことになってるだろう。自分でもわかるくらいに目と歯を剥き出しにしてキレてるもん。

(転生者共??! テメエらは俺を怒らせた)

皆のヒーローたる仮面ライダー^{サイラン}で敵やるなんざ俺に、いや、前世含むライダーファン達に喧嘩を売る行為だと言うことを理解させてやる。

「ようやくこの世界で俺がやる事が決まったぜ??」

ありがとよ神様。今ならアンタがヨボヨボの婆さんだろうがむさ苦しいおっさんだろうが喜んでキスしてやるよ。

――俺、転生者共が仮面ライダー^{サイラン}になって敵してるからちよつと殺してくるわ。

「一匹残らず根絶やしにしてやらア??!」

俺は燃えたぎる憤怒に身を焦がしながら次なるギアの制作に取り掛かる。

——全ては、クソ転生者共をぶち殺す為に。

自覚はあんまり無いけどヒーロー大好きな木場ちゃん

——俺がオールマイトにぶっ飛ばされ、他の転生者達の存在を知ってから2年。俺は来年に受験を控えた中学3年生になった。いきなり時間が飛んだのでこれまでの事をいくつか説明しようと思う。

第1に、俺は原作で緑谷出久と爆豪勝己が通っていた市立折寺中学に入学している。家から近かったのもあるが早めに原作勢と合流しておきたかったのもある。クラスが同じだったのもあり緑谷——いや、出久とは『無個性』同士仲良くしている。反対に爆豪とは仲が悪い。俺が『無個性』で、緑谷とつるんでいるのが気に入らないらしく何かと突つかかって来るのだ。まあ一回ボコボコにしてやっただけど。オルフェノクになったおかげで素のスペックも多少上昇してるらしい。割と瞬殺だった。ついでに言えばこの世界他にもオルフェノクが居るらしい。大体がオールマイトに叩き潰されていくらしいけど。扱いとしては異形化個性の集まりで「こいつら敵だから見かけたら即通報」という扱いらしい。つーわけでオルフェノク化については秘密にしている。

「——ねえねえ木場くん？」

「ん？どしたアリア」

「何かボーツとしてるみたいだったからね。どうかしたの？」

「ん、悪い。ちよつと考え事をな」

第2に俺に話しかけてきたこの金髪の???早い話がアルトリア顔。こいつはアリア・ペンドラゴン。俺と同じ転生者である。こいつは俺と違って転生する際に神に会っているらしく、その際に色々転生特典を貰ったらしい。確かアルトリアの肉体と『個性』として発現した『召喚』だったか。個性名からわかる通り、英霊やその他色々なものを召喚出来るらしい。が、召喚したモノのスペックは本人の技量に左右される様で、英霊で言えば現時点で本来の10%位しか力を発揮できないらしい。それでも俺程度なら瞬殺だけど。

このアリア。1年の頃に留学という形でこの学校に来たのだが1発で転生者とわかった。だってアルトリア顔なんてリアルにいるわけねえじゃん。すぐ様人気のない場所に呼び出して敵対の意思が無いかの確認、ついでに協力体制を取り付けた。俺がこれから他の転生者達を始末する際に他の転生者に邪魔されたら困る。ならば協力者を作ればいいという事でこいつの存在はまさにうってつけだった。今では中々友好的な関係を築けていると思う。

で、第3なのだが??これは後で説明しよう。丁度今、第1話のあのシーンが始まる所だ。

「えー、君たちも3年、受験生という事でだ！そろそろ本格的に進路を考えて行く時期なんだが——」

先生はそこで言葉を区切って持っていた進路希望調査の紙を投げ捨てる。

「ま、皆大体ヒーロー科志望だよな」

教師の言葉と共に一斉に個性を発動させながら手を挙げる他の生徒一同。生徒の視点から見るとあっちこっちがしつちやかめつちやかしていて中々面白い。俺？だって無個性だし。オルフェノク化はそもそも個性じゃないし。アリアは個性使用に色々制約があるから発動してないがしつちかりと手を挙げている。出久は原作通り縮こまりながらも手を挙げている。

「おーいい個性だなみんな！でも原則個性は使用禁止だから取り敢えず止めようか！」

「せんせー！俺をこんな『没個性』共と一緒にすんなよ！」

あー来たよめんどいのが。ご丁寧に机に足乗つけて不良アピール付きのツンツン頭——爆豪が声を上げる。

「俺はこんな底辺共と仲良く行ったりしねーっての」

「おいおいそりやねーぞカツキ!!」

「うっせーモブ共黙ってろ！」

うるせえ??。精神年齢30越えの俺としてはこんなガキ臭い騒ぎなんぞめんどくさいだけだ。悪いとは言わないがもう少し静かにし

てほしい。

「そーいや爆豪は雄英志望だったな」

教師のその一言でざわつ、とクラス内にざわめきが広がる。まだ続くのかこの騒ぎ。

「雄英!?!偏差値79のあの!?!」

「倍率もとんでもないんだろ!?!」

「ハッ! テメエらモブ共と一緒にすんな!! 俺はオールマイトを超えてトップヒーローになんだからな!!」

「あ、そーいや緑谷と木場、ペンドラゴンも雄英志望だったか?」

オイコラ余計な事言ってるじゃねーよクソ教師イ! 頭の毛全部むしり取ってやろうかア!?

教師の言葉に固まったクラスメイト達。次の瞬間一斉に吹き出した。

「はあ!?! ペンドラゴンさんはともかく『無個性』の緑谷と木場だあ!?!」

「無理に決まってんじゃない! 勉強だけでヒーロー科入れるほど甘くねーぞー!」

「ッ!」

出久が立ち上がって反論しようとするが、

「オイコラデクウ!」

「とわっ!?!」

爆豪の『個性』で机ごと吹っ飛ばされた。てか破片がこっちまで来てんだけど。

『『無個性』のテメエがヒーロー科? 夢見てんじゃないやねえぞコラ!』

「ま、待ってよかっちゃん。別にそんなつもりは??!」

「本気だったか? 尚悪いわアホ!」

口悪いなあホント。さすが糞を下水で煮込んだような性格。

「テメエもだぞ馬野郎!!」

「木場だつってんだろーがボンバーマン!!」

「大して変わんねえよタコ!!」

「大間違いだクソボケ!!」

「ああ!?やんのかコラア!」

「殺れるもんならやつてみるや!!無個性の俺にボコられたクセして随分と自信満々だなあオイ!」

「昔の話だろうが!!蒸し返すんじゃない!!」

「???まあこの通り俺と爆豪の中はクソみたいに悪い。初めてボコつた時の「ププツ、個性持ちつてこの程度なの?ワロスワロスwww程面白かったから後悔はしていないけど。」

「ハッ、どうせ無個性のお前らがヒーロー科なんかに入れるワケ「何勘違いしてんだ」あ?」

「俺はヒーロー科じゃなくて『サポート科』志望だアホ。俺が研究者なのはテメエも知ってたんだろが」

勘違いを指摘すると周りから納得したような声が聞こえてきた。

「あーそーういやなんか色々と作ってたな」

「昼休みとかよくヒーロー向けのサポートアイテム取り扱ってる会社について調べてたもんな」

「サポート科なら納得だな」

え?なんでヒーロー科じゃないのかって?だってサポート科の方がギアの整備費用とか安くすみそうじゃん?色々とあつてそこそこ稼いでる俺だが??この事については後で説明しよう。ま、とにかく費用削減できるなら出来るだけしときたいからな。卒業した後ヴィジランテにでもなりやイヤイさ。

「??チツ」

爆豪は周りの反応に舌打ちを1つ、イラついた様子で緑谷に向かつてゆく。あ、これは不味い。

「将来の為のヒーロー分析??ねえ」

出久の代名詞とも言えるヒーローノートを手に取り、有無を言わず爆破する。

「なっ!?何するんだよかっちゃん!」

「うるせえぞクソナード!テメエみたいな奴がヒーローになれるワケねーんだよ!さっさと諦めろ糞が!」

「そ、そんなのやってみないと」

「わからないってか? 『無個性』で! 大して強い訳でもないお前に! 何
が出来るってんだ! あア!？」

オイオイ、一応原作だとノート爆破は放課後のはずだったんだが???
俺が居るせいで色々とズレてんのか?

出久は完全に萎縮してしまっている。まあ爆豪が言ってることは
ある意味正論だ。『力』が無いのに『力』を必要とするヒーローになり
たいだなんて馬鹿げている。正直俺もそう思う。が、

「爆豪」

「あ? なんだ馬野郎」

「木場っちゃん??」

こいつは大前提からして間違ってるんだよ。

「ヒーローになる為の条件って、なんだと思う?」

「あ? そんなもんヒーロー免許に決まって?」

「はい不正解」

「あア!? テメエ何が言いてえんだ!」

『ヒーロー』の何たるかを知らねえテメエが『ヒーロー』語ってんじや
ねえつつつてんだカスが」

毎度毎度胸糞悪い。高々14のガキが『ヒーロー』を、彼らを知つ
た気になっているのが酷く不快だ。正直ステインの気持ちかわから
んでもない。

「テメエ?」

爆豪の掌が爆ぜる。ほお、個性使ってやろうってか?

「いいぜ、相手してやるよ?」

バキリと拳を鳴らし臨戦態勢をとる。丁度いい此処でテメエには
退場して、

「そこまでだ! 爆豪! 個性の使用は校内では禁止! 木場も! 爆豪を煽
るんじゃない!」

「チツ?」

「へいへい了解つと」

ま、今はこれで良しとしますか。

あ、そうそうここ数年で起こった事の続きがまだだったな。

第3にスマートブレイン、設立しちゃいました。いや、社長社員含め俺一人だけけどね?とあるヒーロー専門のサポートアイテムを、取り扱ってる会社??MAXIMUM・SUPPORT・COMPANYことMSCだったっけ?そこに自作のサポートアイテム売り込んだら1発採用されちゃってな?今じゃ会社の株を7割ほど持つてるし『開発主任:スマートブレイン様』って感じになってるし。ぶっちゃけ俺の発言力が社長よりも上になってんだよね。ま、当然だけど俺は素顔は晒してない。ボイスチェンジャーを使って電話越しにMSCの人達とは話してる。名前は村上峽児を使ってる。だってスマートブレインついたら村上社長じゃん?少なくとも今社会に顔を晒すつもりは無いしな。晒すならもっとデカイ機会??雄英体育祭辺りが狙い目だと思ってる。

え?そもそも受かるのかって?舐めんな。1度した勉強は余裕だしあとは高校の応用だけだ。モーマンタイだぜ。

で、ラスト第4。ライダーズギア製作についての事。端的に言えど出来ちゃったよ。カイザギアとファイズギア。ぶっちゃけデルタギアがあつたからそこまでの苦労は無かつた。2つ合わせて1年かからなかつた位だ。気になるスペックの方だが3つとも大体オリジナルの7、8割程。初期の頃が4割ちよいだったので十分な進歩だろう。オートバジンやサイドバツシャも完成してるしほぼ再現出来たと言つていい。気になるのがフォトンブラッドの毒性だが、これについても何とか改善した。

いや〜大変だったよ。出力落とさずに毒性のみを抑制するって。それでも多少スペックは落ちてしまった。完成度が7、8割と言うのもここが原因らしい。流石に寿命には代えられないからしやあない

けど。

今現在は帝王のベルトことサイガギアとオーガギアの製作に取り掛かっているが、完成はまだまだ先になりそうだ。

さて、一段落着いたところで今の俺について説明しよう。現在、俺はサイドバツシャーにアリアを乗つけて街中を疾駆している。何故かって？例のヘドロサイラン敵の事件に居合わせるためだよ。原作での出来事はなるべく見逃したくないしな。

「???」

「~~風~~でなんて言ってるか聞こえねえ！もつと大きな声で喋れ!!」

「免許!!持ってるのに!!バイク乗って!平気なの!」

「こいつはバイクじゃねえ!サポートロボだ!!」

『マスター。流石に無理があるかと』

「うっせえ黙ってるサディー!!」

今喋ったのは俺がサイドバツシャーに搭載したAI通称『サディー』。どうせなら喋れたらなーとか思いながら作ってたらまたまサディーが出来たから搭載してみたんだけどコイツ、中々めんどいのだ。一応俺はサイドバツシャーだけでなくオートバジンの方——当然だけどころかもAI搭載——にも乗るんだけどこいつは俺が他のバイクに乗ると『浮気者。私とは遊びだったんですね』とか言ってる。臍を曲げやがるから機嫌をとるのが大変なのだ。ホント、どうしてこくなったのやら?!

「つと、さうこう言ってるうちに着いたみたいだぞ」

キキイツと音を立てながらバツシャーを停める。

おーやつてるやつてるヘドロサイラン敵に取り憑かれた爆豪がそこら中を爆破してやがるわ。

おーおーいい感じに苦しんでやがるな。普段の行いの結果だヴァカめ。まあ辛抱してな。もう少しでオールマイトに助けてもらえるから。

「放っておいていいの?助けた方が?」

「今出たつたら余計面倒になるだけだ。出久とオールマイトに任せときゃ良いんだよ」

『流石マスター。相変わらずのゲスっぷりですね』

「だから黙ってろつってんだろサディー」

あまり介入して出久のワンフオーオール継承に支障をきたしたくないんだよ。こういうのは見てるのが一番さ。

「お、出久が来たぞ」

「あ、ホントだ」

出久は制止するヒーロー達の言葉も聞かずにヘドロ敵サイランに飛びつく。あいつ素人のはずなんだが中々いい動きしてんなあ?。

「クソ? ナード! 何で??? テメエが!」

「わかんないよ!! けど!」

「君が! 助けを求める顔をしてたから!」

「来た!」

「あの名シーン?!」

おう、流石アニオタアリア。こいつ俺でも知らないようなマニアックなアニメとか網羅してんだよな。当然ヒロアカも読み込んでこようというのは大好物だそうさ。

当然俺もこのシーンは大好きだ。チート無双系では見る事の出来ない、自らが傷つく事を厭わないヒーローらしい行動。誰かの為に命を懸けて戦えるなんてカッコよすぎるぜ。

ま、本物になろうとは思わないが。

さて、あとはオールマイトを待つばかりだな。
ん?

「あれ?」

「来ない??? だど?」

待て待て待て待て待て待て。オイオールマイト何してんの? 早く

しねえと出久が?!?

「邪魔なんだよクソガキ!!」

「つやべえ?!」

へドロ 敵が暴れ出しやがった!?このままじゃ出久が!?

「死?!」

「つちい!」

アリアが不吉な1文字を呟いた瞬間に俺はバツシャーに駆け寄っていた。サイドカー内に入れて置いたアタッシュケースを開き、中のカイザギアを腰に装着する。

「アリア!お前はここにいろ!俺が行く!」

「え!?で、でも!」

「お前の『個性』じや時間が掛かりすぎる!リスクはでけえが出久が死ぬよりマシだ!サデイーは待機!何かあったらすぐに駆けつけられるようにしとけ!」

『Yes, Master』

アリアに叫び、サデイーに命令し、出久達の元へ走りながら変身コードを入力する。

『913 Enter』

『standing by』

「変身!」

『complete』

デルタとは違い重低音な機会音声が響き、俺の体をフォトンストリームと黄色の光が覆う。俺は野次馬とヒーロー達を飛び越えてへドロ 敵に、向かって走る。

「お、おいアレ!」

「か、仮面ライダーだ!」

「ちくしょう!?なんだってこんな時に!」

後ろでゴチャゴチャ言ってるがそんな暇なんぞねえんだ口閉じてろ!腰のカイザブレイガンにミッションメモリを挿入。ブレイガンをソードモードへ変更する。

「悪いがさっさとケリをつける!」

『Exceedcharge』

フォトンストリームを光点が伝い、右腕からブレイガンにフォトンブラッドを供給する。撃鉄を引き、拘束弾をヘドロサイラン敵に向けてつばなす。

「があっ!?う、動けっ?!」

「出久!どけえええええええええ!!」

「え、うわあああああああ!!!」

走ってくる俺の姿にパニック!になってヘドロサイラン敵から離れる出久。仮面ライダーは世間じや敵扱サイランいだから仕方ないとはいえ堪えるなこれ。

んじやま、そのまま大人しくしてろよ爆豪オ!

「カイザ——スリアアアアアツシユ!!」

高速でX字にヘドロサイラン敵を切り裂く。俺がヘドロサイラン敵背後に降り立つと同時にXカイの文字がヘドロサイラン敵の目の前に浮かび上がる。同時にヘドロサイラン敵は崩れ落ち、開放された爆豪がストーンと尻もちをついた。

「え??は??」

「な、何が??」

ぶつつけ本番だけどなんとか成功か。いやー外側だけ斬るって中々難しいな。危うく爆豪事殺っちまうとこだった。アリアに剣士の英霊呼び出してもらって稽古つけてもらった甲斐があったな。

「無事か?」

「あ、ああ??」

「な、なんとか??」

爆豪がやけに大人しい!?明日は槍でも降るのか?。いやいい事なんだけどね?違和感が凄いというか?。てかなんか周りが騒がしいな?。つて。

「??」

oh……プロヒーロー達がジリジリ近寄ってきてやがる。倒せなくはないけどやったらやっただで面倒なんだよなあ?。よし、こういう時はコミュニケーションの基本!対話でなんとか??なるといいなあ。

「何のつもりだ、ヒーロー」

「なんのつもりだと？^{サイラン} 敵である貴様にする事など一つだけだろう！」
「然り。この場で捕えさせて貰うぞ邪悪の権化よ」

「確か??デステゴロとシンリンカムイだったか?この状況でよくそんなこと言えるなオイ？」

「邪悪?俺がしたのは敵を叩き潰し被害者の少年を救っただけだぞ?賞賛こそされど非難される言われ等ない」

「フン、貴様の仲間達がしでかした事を忘れたか?悲しみを振りまき、罪無き一般市民を多く殺めた事を知らぬとでも?」

「仲間??」

「はははは??知らねえとはいえ流石に許容出来ねえぞそりや。」

「あのゴミクズ共と俺を一緒にするな不快極まりない。『仮面ライダー』の名の重みを知らん愚者なんぞと仲間?ふざけるなよ阿呆が」
転生者共への怒りが殺気となって溢れ出し周囲に充満する。ヒーロー達は後ずさり、野次馬の中には失禁したり気絶したりする奴らも居るくらいだ。それ程までに俺は怒っていた。

「————まで!そこまでにしてもおうか!!」

「??随分と遅い登場だなオールマイト」

「お、オールマイト!」

「もう大丈夫!私が来た!!」

「来た!じゃねえんだよこの筋肉ダルマア!」

一々その台詞をほざく目の前のクソゴリラに腹が立つ。居るんならさっさと爆豪助けろってんだボケが。

オールマイトは俺の罵倒に反応を返すことなく構えをとる。問答無用って訳かい?思ったよりつまらん男だな。期待外れもいいたこだ。

「相変わらず人の話を聞かない奴だな。おかげでいい迷惑だ」

「??以前会った事があるのかい?生憎と初めてみるタイプだけどね」

「2年前、テメエがぶっ飛ばした黒い仮面ライダーを覚えてるか?」

「ああ、勿論??まさか!」

「そうだよ。アレが俺だ。つたく、^{サイラン} 敵に襲われたから返り討ちにした

「ただだったのに」

「ヤレヤレと愚痴る俺の反応に汗をかき始めるオールマイト。そして恐る恐る口を開く。」

「???えっと、もしかして私の早とちり?」

「そうだったつってんだろバカ。脳味噌まで筋肉で出来てんのかゴリラーマン」

「流石にあそこまでタラコ唇じゃ無いよ!」

「知ってんのかよ??」

「意外??じゃなくて、だ。」

「つー訳で今回も似たようなもんだ。たまたま見かけて、ヒーロー共が何も出来ないでいたから救けた。何か問題でもあるか?」

「いやしかし??個性の不正使用は?」

「こいつは個性なんてちやちなもんじゃねーよ。その気になりや誰でも造れる機械みたいなもんだ」

「そんなものが???君は、一体???」

「俺はその問に答えずに無言で背を向ける。ぶつちやけこれ以上いたらボロが出そうだからさっさと退散したいんだよ。」

「待ってくれ!君は何者なんだ!」

「??仮面ライダーさ——彼らの名を汚す紛い物共を始末する為に俺は居る」

「紛い物???どういう事だ?仮面ライダーとは敵ライアンじゃないのか?」

「仮面ライダーは真の意味で『ヒーロー』だよ。そこいらの世俗にまみれた紛い物と違ってな」

「それだけ言っただけ俺は彼らの元を去る。少し言いすぎたかも知れないが必要経費だ。いずれ俺の正体がバレるのは避けられない。それまでに少しでも仮面ライダーに対する印象を良くしておく必要がある。その為に必要な布石を??予想外だったとは言え打っておけたのは僥倖だろう。」

「??それにしてもオールマイトは何故遅れた?アレ程のヒーローが遅れるなんぞ考えにくいが??。」

「?考えても仕方ないか」

路地裏に入ったところで変身解除。ついでにバツシヤーを呼び寄せる。サイドカーには相変わらずアリアが乗っていた。

「木場くん大丈夫？バレちゃったんじや??」

「ま、いずれバレル事さ。気にしても仕方ないよ。それより送ってくよ。家、ここから遠いだろう？」

「うん、ありがと。でも気をつけてね？いつつも無茶するんだから？」

「姉貴にも散々言われてるよ」

そのままバツシヤーのエンジンを吹かし、ヘルメットを被って発進する。

さて、10ヶ月後の雄英入試まで、俺も仕上げますかねえ。

入学試験の日、バレた

へドロ口^{サイラン} 敵の一件から10ヶ月が過ぎた。相変わらず爆豪は俺に突っかかって来るし、出久はワン・フォー・オール継承の為にトレーニングで忙しくしている。

俺？俺はアリアと一緒に雄英受験の為に勉強三昧だよ。それに加えて俺はサポート科の試験に持ち込むサポートアイテムの整理、アリアは英霊の方々に鍛えられながら戦闘訓練と、休む暇なく過ごしていた。

そして今日——待ちに待った雄英受験日である。俺はアリア、出久と共に雄英の試験会場へと来ている。にしても、なあ???

「デカすぎじゃね？」

「わかってはいたけどやっぱり大きいねえ？」

「仮にも雄英だしこれくらいは普通だと思うけど?！」

上から俺、アリア、出久である。1人だけあんまり驚いてなかったのはそういう訳か。唯、一つだけ言わせてもらおうけどな？

「試験項目に『戦闘』が含まれるとか絶対に普通じゃないだろ」

「確かに?！」

「オールマイトの母校だしこんなものだと思うけど?！」

「ああ、成程」

不思議と納得してしまった。確かにあんなバケモン排出してんだからこれくらい普通だわな。寧ろこの程度で大丈夫なのか心配になるくらいだ。

俺達がのんびりと雄英の馬鹿でかい試験会場の入口を眺めていると後ろから聞きたくもないクソ野郎の声が聞こえてきた。

「どけ！邪魔だテメェら!!」

「??ああ？朝からウザってえ騒音がすんなア?！」

「ちよ！木場っちゃん抑えて!！」

「ど、どうぞー爆豪くん」

「??チッ!」

舌打ちしたいのはこっちだボンバーファツキューめ。朝から嫌な

もん見ちまったぜ糞が。

「??本当、爆豪くんと仲悪いね木場くん」

「寧ろあんな奴と仲良く出来る奴なんてそうそう居ねえよ。出久もよくあんな奴と幼馴染やってるよな」

「??えつと、かつちゃんもかつちゃんて優しい所はあるよ?」

「二ないない絶対無い」

「そこまで言うっ!?!」

だって爆豪が誰かに優しくするなんて天地がひっくり返ってもある訳ないだろ。そんな時が来たらそれこそ世界の終わりだ。

「つと、こんな所にずっと突っ立つとくのもアレだ。そろそろ俺達も行くこうぜ」

「そうだね。それじゃ、試験終わりにまたね」

「おう。アリア達も頑張れよ」

「うん。木場つちゃんも頑張ってるね」

「ま、精々サポート科1位を狙って頑張ってくらあ」

そう言つて俺は出久達と別れ、サポート科の試験会場へと向かった。

尚、出久と麗日との出会いを見る事が出来ない事に気づいて地味にショックだった。後でアリアに詳細教えて貰おう。

『今日は俺のライブにようこそそーそーそー!!!!!!』

エヴィバディセイハイハイ!!!!!!』

———シン。

沈黙が、痛過ぎる??。てか何故にプレゼント・マイク?ヒーロー科の方の説明担当じゃ無かったのか?向こうの説明が終わったからこっちでもやってんのか?

『コイツはシヴィー!!!!受験生のリスナー共!』

今からサポート科実技試験の概要をサクッとプレゼンして行くぜ
!!アニューレディ?』

『YEAHHHHHHHHHHHHHHHH!!!』

シ————ン。

いやもう良いから。これ以上沈黙が続いても痛々しいだけだから
早く進めてくれ頼むから。

面倒な前置きから始まり、漸く概要を説明しだすプレゼント・マイ
ク。

『内容は入試要項通り!サポート科志望のリスナー達にはこの後!!持
ち込んだ自慢のアイテム達と共に模擬市街地演習を行ってもらおうぜ
!!!

演習場には1、2、3のPtが割り振られた仮想敵サイランが配置されてる
から自慢のアイテム達でジャンジャンぶっ倒してくれ!!本来ならお
邪魔敵ギミックの0Pt敵サイランもいるんだが??残念ながらサポート科の試験で
はカットだ!!

演習後にはサポート科の教師に自分の作品をプレゼンして貰うぜ
!!演習で実用性を示し、その後のプレゼンでそれを売り込む!!全ては
リスナー達の腕に掛かってるって訳だ!!!』

サポート科志望の受験生に戦闘させる意味ある?てかこれある意
味ヒーロー科より難易度高いじゃねーか。戦闘はそもそも荒事を想
定してない連中からしたらだいたいぶキツイぞ。売り込みも、口下手な奴
は厳しいだろうな。流石雄英。早速ふるいにかけてきやがったか。

『俺からは以上だ!では最後にリスナーへ我が雄英の校訓をプレゼン
トしよう!!

かの英雄ナポレオン・ボナパルトはこう言った!

「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と!!

Plus ult'ra!!!

『それでは皆良い受難を!!!』

『?無茶苦茶だなあ。けど、』

「雄英らしいっちゃらしいのか」

「思わずポツリと眩き、俺は持ち込んだアタツシユケースを持ち上げて試験会場へと向かった。」

——試験会場。例の例のだった広い街である。周りには多種多様なアイテムを抱えたサポート科の受験生達。『個性』の影響もあるのか奇つ怪な姿をしている者も居る。

——そんな連中が皆俺を見ていた。

「???」

『フッフーン!いやーやっぱりわかる人にはわかるんですねーこの魅惑のアイアンボディが放つオーラが!!マスターももつと可愛がつてくれてもつあ痛ったあ!!?なんでフレームを殴るんですかマスター!?!』

このクソうるせえバイクが原因だよド畜生め。思わずフロントフレームをぶん殴つちまった。

「うるせえから少し黙ってる『マリー』。気が散る」

『ぶーぶー!折角マスターの緊張をほぐして差し上げようとしたのにー!殴るなんてあんまあだだだだだ!!?ボディをグリグリするのやめて地味に痛いっ!?!』

このバイクの名称は『オートバジン』。仮面ライダー555の専用バイクで通常のバイク状態から人型ロボットへと変わるバトルモードを備えたビツクリマシンだ。

で、このペチャクチャとよく喋るのがオートバジンに俺が搭載したバカの『マリー』だ。

こいつが出来た頃はもうちつとサディーみたいな物静かだったんだが???なんでこうなったやら。

『——はいスターター!』

「?????
ん?」

『どうしたどうしたあ!? 実戦にカウントなんざねえんだよ走れ走れえ
!!!』

「賽は投げられてんぞお?!!」

「バカやってる場合じゃねえ! 行くぞマリー!!」

『はいはい! マリーちゃん頑張っちゃいますよー!!』

プレゼント・マイクの声が響き、すぐ様バジンに跨り、発進する。他の受験生が慌てている中、俺は先頭で市街地へと躍り出た。

『目標発見ブッコロス!!』

早速出てきやがったぜ仮想敵。^{サイラン} 確かコイツは1Ptの奴だったか。ソイツは俺の真正面に飛び出し、道を塞いでいる。

『マスター! このままじゃぶつかりますよー!?!』

「構わん轢き殺せ!!」

『ブッコロス!! ブッコロ—— ⊠ドグシャツ ⊠!!』

鈍い音を立ててバジンに踏み潰される仮想敵。^{サイラン} これですまは1Pt、か。

『うううう。マスター後でしつかり整備してくださいよお? これ痛いんですからあゝ』

「わかったわかった。じゃ、さっさと殲滅するか」

『Ready』

バジンから降りて左ハンドルにミッションメモリーを装填して引き抜く。頭になったのは赤い刀身。ファイズの武器の1つであるファイズエツジだ。

『103 Enter』

『Single Mode』

更にファイズフォンをフオンブラスター形態に変更。ベルトは付けているだけで変身はしていないが充分戦える状態だ。

「マリー。バトルモードだ」

『Battle Mode』

『りよーかいです! 連中を蜂の巣にしてやります!!』

「他の受験生巻き込むなよ?」

『失礼な!そんな事しませんよ!?!』

オリジナルのバジンは何度もファイズを巻き込んで攻撃してるんだよなあ??.

『目標補足!ブツブス!!』

「潰されるのはお前だタコ」

近寄ってきた仮想敵サイランの関節部にフォトンブラッドの弾丸を叩き込んで破壊、即座にファイズエッジで真つ二つにする。

『さてさてさーて!マリーちゃんもいきますよー!!』

——バラララララララララララララ!!!

空中に飛び上がって仮想敵サイランに弾丸の雨をばら撒くバジン。宣言通り蜂の巣だなありや。

「んじや、精々俺らの糧になってくれや」

俺は獰猛な笑みを張り付かせながら仮想敵サイラン共に言い放った。

——雄英入試試験会場

モニター室

「どうだ今年は?」

「いやー中々の豊作だな!全体的に動きが良い」

「特にこの爆発の『個性』の受験生。敵Ptサイランは他の追隨を許さない勢いだ」

試験会場のモニター室に響く複数人の声。彼らはいずれもプロヒーローである雄英の教師陣である。いくつかの理由もありこうして集まって受験生の様子を見ているのだ。

「そう言えば、サポート科の方は——どうした?パワーローダー」

1人の教師が困惑の声を上げる。周りの教師が名指しされたヒーロー——パワーローダーを見れば、否、サポート科担当の教師達

が、なんとというか、困惑というか、呆れというか、とにかく変な表情をしている。

「どうした？何か問題でもあったのか？」

「いや??この受験生なんだが」

「んん？受験番号0555の??木場勇治？この受験生がどうかしたのか？」

「??見てみる」

それだけ言っただけで端の方にあるモニターを顎で示すパワーローダー。最初に言った教師がそれを見、つられて何人かが同じモニターを見る。

——数秒後、彼らは一様にサポート科担当の教師達と同じ顔をしていた。

——左手の光る剣で仮想敵^{サイラン}を切り裂き、右手の銃で撃ち抜く受験生。

——空を飛びながら弾丸をバラ撒き、仮想敵^{サイラン}を殲滅していく人型ロボット。

「なんじゃこりゃ?！」

1人が思わず零した呟きに引かれ、他の教師達も次々と同じモニターに引かれ、一様に同じ顔をする。しまいには殆どの教師が同じモニターと同じ顔という状態だった。

「この受験生随分といい動きだな？これでサポート科志望なのか??」

「てかこのロボットなんだ？仮想敵^{サイラン}破壊しまくってるが？」

「その受験生が持ち込んだサポートアイテムだよ。しかもAI搭載と来た。これは決定だな」

「ん？この受験生2年の木場翼の弟じゃないか」

「本当だ。それに??『無個性』？」

「おいおい『無個性』でこんな動きされたら俺らの立つ瀬がねーぞ」
概ね好評価の木場。ヒーロー科でも無いのにここまで注目されるというのはある意味偉業である。

やがて、ヒーロー科の受験会場から響いた轟音に教師達は引き戻された。

「お、OP t 敵が動き出したか」

「相変わらずでけえなあホント」

「頑張れよ受験生。真価が問われるのは——」

——ここからだ。

「——ふつ、と。これで??何P tだったか」

『これで102P t!まだまだいきますよー!!』

「??やり過ぎたか」

やっべ、バジンがいるとはいえ、ついつい俺もはっちゃけ過ぎたなこりゃ。原作でも3桁行つた奴なんて居なかった筈だろうに。

「仕方ねえ。これ以上やったら他の連中の邪魔になるな??。マリー！もう良いから戻れ！」

『えー!?せつかく良いとこだったのにー!』

「つべこべ抜かすな!!さっさと元に——」

——ズシン

「——あ?」

地震?にしちやあ短いが??。

——ズシン

『マスター。ちよつと良いですか?』

「??何だ?」

——ズシン

『私、モーレッツに嫌な予感がするんですけど』
『そうか??そりや奇遇だな』

——ドガアアアアアアアアアン!!!

「俺もだよド畜生オオオオオオオオ!!」
『どひやああああ!!』

ウツソだろお前。ビル群ぶち破つてOPt 敵がサイランこんにちはしてきやがったよ。ヒーロー科の方からこっちに来たのか?もしかして寂しかったりして。ハツハツハ??笑ってる場合じゃねえええええええ!!!

「マリー!他の受験生逃がせ!このままじゃ死人が出るぞ!!」
『ええええええええ!!マリーちゃんも逃げたいー!!』

「ごちやごちや言ってる暇があったら急げポンコツ!!スクラップにしてやろうか!」

『ひいひいひいひい!!わかりましたよ!やればいいんでしょやれば!!』

他の受験生を抱え、退避していくバジン。その間もOPt 敵は暴れ回って??オイオイオイオイ、嘘だろオイ。

OPt 敵の足元、瓦礫に身体を挟まれて動けない女子が居た。
「マジかよクソがつ!」

あのままじゃ潰されちまうぞ!?!雄英側も見てんだろ!?!なんで止めやがらねえ!?

『マスター!避難完了です!私達も逃げましょう!?!』

「マリー!あのデカブツの目を引け!」

『なんでそんなこと言うの!? もう逃げましようよ!』

「奴の足元に逃げ遅れた奴が居る! 救出すんぞ!」

言うやいなや全力で走り出す。瓦礫が飛んでくるがフォンブラスターで破壊し、ファイズエッジで細かい破片を切り落としながら進む。

『ああもう!? 死んだら恨みますよマスター!』

後方で射撃音が聞こえる。O P t サイラン 敵はそちらに気を取られたのか動きを止めた。

その隙に奴の足元へ潜り込み、瓦礫に挟まれた女子の元へ辿り着く。

「オイ! 無事か!」

「な、なんとか??」

俺の問いかけに力無く、それでもハッキリ答えるサイドテールの女子。どうやら最悪の事態は避けられたようだ。

一息つきたいところだがそうもいかない。さっさと救出して逃げちまおうか。

「ふんっ! ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ?? らあっ!!」

力技で無理矢理瓦礫を退かす。クソ重いがオルフェノク化の影響で上がっている身体能力のお陰で難なく退かす事が出来た。

「立てるか?」

「っ?? 痛つつくく?? ごめん、痛くて力が入らない」

「チイツ?? しゃあねえ、ちよつと持ってる」

サイドテールにファイズフォンとファイズエッジを渡して抱え上げる。所謂お姫様抱っこと言う奴だ。

「ちよ!? なんでこんなっ??!」

「悪いが文句は受け付けねえぞ。これが一番負担がかからねえんだからな。」

—— マリー! 来い! ——

『やっとですかマスター! っつてマリーちゃんが命懸けで時間稼いでたのに何ラブってコメってるんですかっ!』

「アホな事抜かしてないで逃げるぞ!!」

『Vehicle Mode』

バジンをバトルモードからビークルモードに変更、サイドテールを抱えたまま跨る。後はコイツが勝手に運転してくれるので俺はサイドテールを抱えて落ちないように捕まっとくだけだ。

『逃げるったって何処に!?!』

「デカブツが出てきたヒーロー科の試験会場に向かえ!!サポート科の連中よりやまともな動きが出来んだろー!」

『わかりました!んじゃさっさと逃げましょう!!』

言うやいなやトップスピードで駆けるバジン。無茶苦茶なスピードだがこれでも配慮している方だ。コイツが本気なら振り落とされる。唯でさえデカブツのお陰で荒れまくった道を走ってるんだ。なりふり構わず言ったら耐えきれずに振り落とされてるだろう。

「オイ、サイドテール!」

「それって私の事か!?!」

「お前だお前!渡した剣にメモリースティックみたいなのが刺さってるんだらうからそれ抜け!」

「こ、これか?」

上手いことミッションメモリーを引き抜いたのか赤い刀身が消えていく。忘れてたが抜き身のままで持たせたら危ないから消して正解だったな。

そのまま柄を受け取り、バジンの左ハンドルに接続する。次にミッションメモリーをフォンブラスター状態のファイズフォンに戻させて受け取る。

さて、デカブツは???ってよそ見してやがる!?!

「こっち向けやデカブツウ!!」

『106 Enter』

『Burst Mode』

フォンブラスターをバーストモードにして撃ちまくる。無茶苦茶に撃ってるので大して当たらないが、何発かは当たって奴の装甲に凹みを付ける。奴は俺を認識したのか、複眼をこっちに向け、ゆっくりと迫ってきた。

よし、上手いことこつち向いたな。

「マリー！このまま引き付けろ！」

『ああもうAI使いの荒い!?注文多すぎです!?!』

「おい！引き付けて、それからどうすんの!?!」

「んなもんぶつ壊すしかねえだろが!!」

「そんな事出来るの!?!」

「俺が知るか!!」

「なんなんだよそれえ!?!」

ああもう耳元で騒ぐなよ!?!暫く走り続けていると、前の方に人影がいくつか見える。恐らく他の受験生だろう。どうやら逃げている途中のようで、他の受験生を抱えている者も見られた。

奴らの横を通って追い越し、連中の目の前に停止する。驚いた様な顔をしているが生憎とくつちやべっている暇はない。

「オイ！そこの??目付きの悪いヤンキーっばい奴!!」

「お、俺か!?!」

どつかで見た事のあるヤンキーが前に出る。俺はヤンキーにサイドテールを渡した。

「コイツ連れて早く逃げろ！例のデカブツが来てんぞ!!」

行ってる間にも轟音が聞こえてくる。見れば既に300m程の距離にまでデカブツが迫ってきていた。

「逃げ!!」

「わ、わかったがお前は どうするんだ!?!」

「どうするか?んなもん——」

『555 Enter』

『Standing by』

ファイズフォンにコードを入力、そのまま頭上に掲げ、勢いよくベルトに挿入する。

「——ぶっ飛ばすに決まってるだろうが！」

変身!!」

『Complete』

機械音声が響き、ベルトから赤いフォトンストリームが全身に延び

る。赤い輝きに包まれた俺は、1拍置いて仮面ライダー555へと変身した。

「か、仮面ライダーだと!？」

「驚いてる暇があるならさっさと逃げろ! 敵は待ってくれねえぞ!!」
「っ???すまん!!」

そう言つて背を向けるヤンキー。やつと行ったかと思つたら今度は馬鹿でかい掌にガシツと捕まれる。何事かと思えば例のサイドテールが手を巨大化させて俺を掴んでいた。

「ま、待てつて!?!お前も一緒に?!?!」

「??気持ちがありがてえが答えはNoだ」

「で、でもあんな奴を無理して倒す必要なんて?!」

「??良い奴だなサイドテール。この状況で他人の心配出来るんだから。でもな?」

「お前らヒーロー目指して雄英こごに来たんだろ? なら覚えとけ」

「——ヒーローは、どんな事があるうと逃げちやいけねえんだよ」

そうだ、彼らは——仮面ライダー達は決して逃げなかつた。どんな理不尽があろうと、敵が強大だろうと、決して!

仮にもそんな彼らの力を使つてんだ! そんな俺が逃げてたまるかよ!!

「マリー!! やるぞ!! 奴の気を引け!」

「ええい、こうなりやヤケです!!?」

『Battle Mode』

再びバトルモードになつて空中へと舞い上がるバジン。

俺はその間に腰のファイズポインターにミッシュンメモリーを装

「——さて、それじゃあキミについて話してもらっても良いかな？」

あの後、教師陣に囲まれた俺は目の前で変身を解除し、戦闘の意思が無いことを証明するとこのネズミ——じゃ無かった。確か雄英高校の校長の根津??だったっけ?の所に連れてこられた。バジンとファイズギアは回収され、俺の周りに待機しているヒーロー達の一人在る。

「話すってのは具体的には何を？」

「そうだね??色々あるけど、とりあえずはキミの目的、そしてこのアイテムについて。後は??正体、かな？」

目的にギアについて、それと正体ねえ??。

「目的は雄英サポート科の受験。そっちは自作のサポートアイテム。正体って言われても??プロフィールはそっちに行ってるはずだが?」

「そう、あくまで表向きのね。バイクの方はまだしもキミは仮面ライダーだ。そんな人物が唯の受験生?いくらなんでも無理があるよ。」

裏の顔、あるんだろう?」

???やっぱ唯のネズミじゃねえや。こりや隠し通すのは無理かね。

そう思った俺はオールマイトへと目を向ける。

「っ訳で説明頼める?オールマイト」

「???やっぱり君だったか」

「おや、オールマイト。彼とは知り合いかい?」

「はい。3年前、そして昨年私が遭遇した仮面ライダー。その正体が

「——俺、って訳で」

「へえ??それがキミの裏の顔、って訳かい」

もう1つ別の顔があるんだが別に言うことでもないので黙っておく。

「で、俺が持ち込んだあのベルトがライダーズギア3号のファイズギア。

俺が発見した新エネルギー、流体光子エネルギーフォトンブラッドをエネルギーとする対敵用^{サイラン}パワードスーツだ」

「新エネルギー???そして3号という事は?」

「3年前の奴がプロトタイプの1号のデルタギア。

ヘドロの時のが2号のカイザギアだ」

「まさか学生の身でそこまでの???」

「信じ難いな??」

周囲の教師達から声が漏れる。正直超人だらけのヒロアカ世界じゃそんな驚くような事でも無い気がするけど。

「ふむ???では何故あの姿なんだい?」

あの姿——仮面ライダーの姿の事を言っているのだろう。

「そりゃあれがコピーだからさ。オリジナルの姿を真似た、限りなく本物に近い劣化版、とでも言おうか?」

「??その口振りだとオリジナルは元からあの姿をしているのかい?」

「ああ。ちなみに言うが、世間を騒がせている仮面ライダー共も同じだ。スーツのスペックは知らんが、中身は偽物だよ」

「??本物は彼らの様な人物ではない、と?」

(来たー!)

その質問を待ってたゼズミさんよ。俺はここぞとばかりにまくし立てる。

「たりめーだ。そもそも『仮面ライダー』ってのはヒーローの原点とも言っていい存在だ。誰かの為に戦い、傷つき、そして救う。化物と罵られようが蔑まれようが決して己の信念を曲げずに貫き通す漢達。

それが仮面ライダーだ。間違っても自分の欲望のままに好き勝手してる連中とは一緒にすんな」

「???そんな話は聞いたことがないがね?」

そりゃそうだ。特撮番組の中の話なんだから。しかも異世界の。

だけどな、彼らが抱いていた信念は本物だ。それを『聞いたことがない』の一言でスッパリと切り捨てさせるつもりは無い。

「そりゃそうだ。彼らはいずれも大半が、仮面ライダーになった事が原因で命を落としているからな」

——ある者は身体を改造され、代償として寿命の大半を失った。

——またある者は守るべきもののために、己の存在が消え去る事を承知で仮面ライダーとして戦った。

その生涯は、まさに壮絶。俺如きでは憧れることすらおこがましい生き様。彼等の事を『男が惚れる漢』と言うのだろう。

彼らの生死は、この場においては真実ではなく、かと言って嘘でもない。というか正直関係無い。が、こうやって彼らがいかにも存在したように言えばコイツらの中では、

『仮面ライダーとは、人知れず敵と戦い、散っていったヒーロー達の名。世間を騒がせているのは見た目だけ同じの偽物』

となってくれる。これが今の俺に出来る最適解だ。

話し終え、一息着いてみれば部屋は静寂に包まれている。この時ばかりは、常日頃から笑顔を絶やささないオールマイトですら神妙な顔つきだった。

しばらくして、沈黙していたネ??根津が口を開いた。

「??キミは、サポート科に入ってどうするつもりだったのかな」

「まだいくつか再現しきれないものがあるんでね。製作費用の削減と『雄英入学者』と言うハクを付けたかったのが本音。卒業したらヴィジランテにでもなって偽ライダー共を狩るつもりだった」

あ、余計な事言っちゃまった。何か言われるかと思っただが根津は黙って考え込んでしまった。何を悩んでるか知らんけどさつきと帰らせたいのが本音だ。

「校長」

帰っていい?と続けそうになるが自重。話しかけたのは、オールマイトだった。

そのまま根津の耳に口を寄せ、何かを囁く。ん？根津がこつちを見

た
た
そのままオールマイト達は二言、三言話すと唐突に笑顔で向き直つ
た。なんかもう嫌な予感しかしないんですけど？

「木場勇治くん。我々雄英はキミを歓迎しよう！」

唐突な合格通知。いやまあ早い事に越したことはないん

だが、

「ヒーロー科として!!!」

なんて？

クソネズミ（校長）をぶん殴りたい木場っちゃん。テ
ストはアリアの独壇場

——さて、あのクソネズミどうしてくれようか。

あの後、そりやもちろん必死に抵抗したさ。俺はサポート科を受けたのであってヒーロー志望では無いのだから。

が、クソネズミと来たら「キミをサポート科にしておくのは惜しい」だの「何かあったらヒーロー科にいてくれた方が対処しやすい」だのこつちの話なんざ聞きやあしない。腹が立ったので特性トリモチ爆弾を投げつけてやった。全身がトリモチに埋まっていた気もするが構いやしない。だってドブネズミだし（暴論）。

流石に向こうも無茶苦茶なのは自覚していたらしい。頑なにヒーロー科入りを拒む俺に代用案を出してきた。

それが『ヒーロー科とサポート科の兼科』である。普段はヒーロー科の生徒として行動し、任意でサポート科の授業や設備を使わせてもらえるそうだ。

授業なんぞはどうでもよかったので設備だけ使わせてもらうことにした。流石雄英。米国防総省^{ペンタゴン}クラスのコンピューター設備とか凄すぎたろ。

まあこんな訳で今日は雄英高校への入学初日。かねてから中の悪かったクソ両親に絶縁状を叩きつけ、ラボでの一人暮らしになった俺は意気揚々と雄英に登校しようとしていたのだが？、

「翼。何でここにいやがる？」

「ん、ゆーじと一緒に行きかけたから」

ビックリしたよ、イヤホント。朝起きたらベッドの中に入り込んでるんだもん。

しかも全裸で。

マジで危なかった。血が繋がってなかったら襲ってたかもしれない。翼って俺の好みどストライクな美少女だから尚更。おかげで俺の約束^{エック}された勝利^{スカー}の剣^パがフオイヤーしてしまう所だった。

「別にゆるじなら??いいよ?」

「駄目に決まってるんだろが実の姉弟だぞっ!!」

コテン、と首を傾げながらサラツととんでもない事を言う翼に全力のツツコミを入れる。やべ、朝の翼の裸思い出しちまつて俺の約束された勝利の剣がああああああアッアッアッアッアッアッ!!!?

「てめ、何で俺の股間に手を伸ばす!!」

「ん、苦しそうだったから。抜い——」

「言わせねえよ!!マジで落ち着け!すぐ収まるから!!」

「??手がダメなら口で」

「な悪いわああああああああ!!!」

待って待って待って?ホントにやめよう?おい、ズボンのベルトに手をかけるなシャツを脱がせようとするなパンツをずり下ろそうとするなあ!!

「こうなったら、実力行使」

「つばっ?!?やめ、んむぐうっ!!」

き、ききききききききキスウ!!?っ、翼の顔が目の前に???あ、ちよっ、舌を入れるな!!ま、ホントやめ——

アッ
!!!!!!

「朝からどつと疲れた???'」

「あ、あははは???'」

「なんと言うか???'ご愁傷様」

あの後全力で翼から逃げてからの登校。校門近くで出久やアリアと合流し、今は俺達の所属クラスの1-Aの教室へと向かっている最中だ。

疲労困憊の俺、苦笑いの出久、ニヤつきながらこちらを見ているアリアと朝っぱらからここまで独特なトリオだと自分でも思う。

てかアリアテメエコノヤロウ何ニヤついてんだコラ。

よし、後でマルタの姐さんに鉄拳聖裁してもらおうからな。

「ギャー!?!?」という悲鳴を無視しつつ廊下を歩いていくと『1-A』と記された教室を発見した。にしても、扉がデカイ。

「うわ、でっかいドアだなあ???'」

「異形型個性の奴とかもいるから配慮してんだろ」

「あ、なるほどね」

「あの試験を潜り抜けたエリート達か???'」

怖い人達じゃないといいなあ???'」

残念だが出久や、その願いは叶わないぞ。あのクソボマーがいるからな。

俺自身あのボンバーマン爆豪と関わりたくないのだがここまで来たら仕方ない、腹を括ろうか。

扉を開き、教室の中に入る。で、だ。

「机に足をかけるんじゃない!!先輩方や製作者の方々に申し訳ないとは思わないのかね!?!?」

「思わねーよ!!テメーどこ中だよ端役が!!」

「ボ???'俺は私立聡明中学出身の飯田天哉だ」

「聡明だくく!!クソエリートじゃねえか!ぶつ殺し甲斐がありそうだなあ!!」

「ブッコロシガイだ?!?君は本当にヒーロー志望か!?!?」

ほらいたよボンバーファツキューとメガネ委員長飯田天哉。初日から元気

のいいこった。

しばらく言い合ってるうちに飯田の方が俺達に気づいたらしくこちらに近寄ってきた。

「俺は私立聡明中学出身の——」

「き、聞いてたよ！僕は緑谷出久でこっちの2人が、」

「アリア・ペンドラゴンだよ！よろしくね」

「木場勇治だ」

「そうか！よろしく頼むよ！で、緑谷くん??」

「ずずいつと飯田が出久に詰め寄る。剣呑な雰囲気ではないので放っておいていいだろう。俺は——」

「テメエが何でヒーロー科こいやがる馬野郎!!」

「木場だって何度言ったらわかりやがる○マイン!!」

「どうでもいいんだよんなことはよオ!!いいからさっさと答えろやカスが!!」

「んなもんあのドブネズミに聞きやがれ汚物製造機が!!俺だって元々はヒーロー科に来るつもりなんぞ無かったつーの!!!」

「じゃあさっさと失せろや馬刺し野郎が!!」

「出来たら苦労しないんだよウニヘツド!!」

額をカチ合わせて罵倒し合う俺と爆豪。周りは啞然としてるし出久はオロオロしている。で、アリアは相変わらずニヤついてやがる。

お前マジで源流グレンデルバスター闘争喰らわしてやろうか。

「き、君達！止めないか！」

「ああ!?!」

仲裁に入る飯田を思わず睨みつけたら爆豪と被りやがった。畜生何でこんな奴と?!

一瞬狼狽えた飯田だがすぐに持ち直す。クイツと眼鏡を上げ、ピシリと俺達を指さした。

「君達はヒーロー志望なのだろう?ならばヒーローに相応しい言葉遣いと態度を心掛けてだな——」

「るせえぞクソメガネ!!黙ってる!!」

「クイツと意見が被るのは癩だが右に同じだ。てか俺そもそもヒー

ロー志望じゃねえぞ」

「な、何だつて!?!」

さつきも言ったじゃん聞いとけよ。俺の言葉に軽くザワつく教室。まあヒーロー科に居るのにヒーロー志望じゃないとかナメてんのかつて話だしな。

「それじゃあ君は何故ヒーロー科に来たんだ!?!」

「さつきも言ったがここの校長のクソネズミに入れられたんだよ。あんのクソネズミめ足元見やがって???」

「く、クソネズミ!?!」

思い出したら腹たつてきたから今度校長室にマタタビ大量に送り付けてやろうと思う。

てかよく見たら出久とアリア達普通に麗日と話してんじゃねえか羨ましい。俺だつてもつと原作勢と絡みたいのに畜生め。

「——お友達ごっこがしたいのなら他所に行け」
「え?」

入口付近にいた出久が振り返る。そこには寝袋にくるまつてミノムシみたいになっている無精髭の男がいた。

そう、1-Aの担任のレイザーヘッドこと相澤消太である。てか生で見ると唯の不審者だなこの人??。

そのままコロコロと転がりながら教室に入って来た相澤先生はゆっくりと寝袋から出て立ち上がる。

「ハイ、君達が静かになるまで8秒かかりました。君達はどうも合理性に欠けるようだ」

(((いや誰だよ!!!)?))

この時、俺とアリアを除く全員の心が一つになった気がするのはい気のせいじゃないと思う。

「初めまして。担任の相澤消太だ。よろしくね」

「たっ、担任!?この人が!?!」

知 っ て た。

再びザワつく教室。まあこんな小汚いオッサンが教師とか誰も信じないだろう。前情報が無かったら俺もそうだ。迷わずに110番

通報してた自信がある。

「早速だがコレに着替えてグラウンドに出てもらおう」

そうして取り出したのは体操服。受け取ってみると妙に生暖かい???。オッサンの懐で温められた体操服とか嬉しくねえ???。

「さっさとしろ。時間は限られてるんだからな」

「???出久、行こうぜ」

「あ、うん。それじゃあ麗日さんまた後でね」

「うん、また後でね!」

目の前でラブコメるな甘ったるい。腹いせに軽くからかってやろうか。

「じゃあ出久。ついでにナンパの成果を聞かせろや」

「へ!?!べ、別にそんなことして無いよ!?!」

「とぼけんなよ。さっきの子と随分親しげだったじゃないか」

「麗日さんには試験の時助けて貰ったから??」

しどろもどろになる出久。反応が素直だからついからかってしま

う。??別に女子と話してたのが羨ましかったからとかじゃないからな? 本当に違うからな?」

「——個性把握テストオ!!?!」

グラウンドに出て唐突に告げられて誰かが叫ぶ。こんな理不尽なカリキュラムなので当然ちや当然なんだが。

「入学式は!?!ガイダンスは!?!」

「ヒーローになるならそんな事をやってる暇は無いよ」

麗日の問いをバツサリと切り捨てる相澤先生。

俺としては有難い。あのクソネズミの顔を見て冷静にいられる自信が微塵もないからな！反射的に4000万Vの新型スタンロッドをケツに叩き込んでしまっただろうと思う。

「雄英の校風は『自由』が売り文句。それは教師側もまた然りだ」

「様に？を頭の上に展開するクラスメイト一同。だからなんなんだ、といった風だ。」

「これから行うのは『個性』アリの体力テストだ。ソフトボール投げを筆頭とする8種の種目、まずはコレで自分の最大限を知る。それこそがヒーローの素地を形成する合理的手段」

「そこで言葉を区切り、俺に顔を向けた。」

「本場。中学の頃のソフトボール投げの記録は？」

「382m」

「すまん、もう一度言ってみてくれ」

「いやだから382m」

「個性は使ってないのか？」

「生憎と俺は無個性でしてね。元々サポート科志望でしたし。」

「それをあのドブネズミが???'」

「??'取り敢えず投げてみる」

「了解しました、っと」

円の中に入り、グルグルと肩を回す。さて、あれから結構鍛えたがどんなもんになってるかねえ。

「んじやまあ——オッラアツ!!!!」

全力で、思いつきりソフトボールをぶん投げる。普通ソフトボール投げは曲線を描くように飛ぶモノ。が、そこはオルフェノククオリティだ。俺の場合ストレートでぶん投げた方が良く飛ぶ。

『442m』

「うしっ、こんなもんか」

「??'まあこうやって自分自身の限界を測るわけだ」

と、そこでクラスメイト達がザワザワと騒ぎだした。

「何だコレ！すげー面白そう!!」

「個性思いつきり使えるのか!!流石ヒーロー科!!」

「てか無個性で442mて??ホントに人間?」

オイコラその仏陀風耳たぶ女???確か耳郎響香だったか?たしかにオルフェノクだけどキチンと俺は人間だつての失礼な。

「面白そう??か。ヒーローになる為の3年間をそんな腹積もりで過ごす気なのか?」

クラスメイトの面白そうという発言に相澤先生の空気が変わる。そこには得体の知れないオッサンの姿は無く確かに、プロとしての風格を感じさせた。

「よし、トータル成績が最下位の者は見込み無しとみなし、除籍処分としようか」

「は、ハアアアアアアッ!」

「そんな無茶苦茶な?!」

「生徒の如何は俺達教師の自由。ようこそ、だ。これが雄英高校ヒーロー科だ」

まさに理不尽。が、理不尽を覆して行くのがヒーローと言う存在だ。望んで来た訳じゃ無いが生憎と除籍されるつもりも無い。

「久々に本気、出しますか、つと」

第一種目：50m走

「——つて、アリアと走るのか」

「ありや、嫌かな?」

嫌ってわけじゃ無いんだがな????

「誰で行くんのだ?」

「うーん??今日は兄貴の気分!」

「??先生。巻き込まれたくないので俺とアリアを別にしてください」

「駄目に決まってるだろう非合理的な」

「ですよねー」

俺が相澤先生と交渉し、撃沈してる間に既にアリアは召喚を開始し

ている。

『——来たれ、光の御子よ。』

呪いの朱槍を携えし最速の大英雄。

汝が御名は克蘭の猛犬、大いなる神の血を継ぎし太陽の末裔也
!!』

「来て、クー・フリーン!!」

その名を唱えた瞬間、彼女を中心として赤い光が周囲に放たれる。が、それも一瞬のことで、光が晴れた先にはそれまで居なかつたはずの男が立っていた。

——青タイトに紅の槍を携えた蒼髪の男。その瞳は紅く輝いている。

どう見ても槍ニキですありがとうございます。

「——ようマスター！久々だな」

「兄貴——！おひさ——!!」

頼もしげな笑みを浮かべた兄貴に笑顔で抱きつくアリア。取り敢えず周りが固まってるみたいなので説明する事にする。

「アレはアリアの『個性』の『召喚』によって呼び出されたモノです。こちらが敵対行動を取らない限り無害なので安心してください」

「??内容は？」

「いわゆるオカルトの権化ですね。いくつかの制約はありますが仮令死人だろうと空想上の怪物だろうと好き勝手に呼び出す事が出来ません」

「とするとあの男もその類か？」

「名前くらいは聞いた事があるでしょう？」

「ケルト神話の大英雄クー・フリーン」

「本人だと？」

「正確には本人の名を冠するに相応しい存在です」

まさか本人ですと言う訳にも行かないので適当にでっち上げる。

「神話上の英雄達を呼び出す場合、名を冠するに相応しい実在の人物

が呼び出される事になっています」

「?英雄本人に最も近い人物、という訳か」

「といってもスペックは10%前後まで落ち込んでますけどね」
どつちにしろバケモンスペックなんだけどね。

「??まあいい。走れ」

「結局一緒なのか??」

「おいおい坊主、そんなに嫌うなよ?」

「アンタと一緒に俺が吹き飛ばされかねないんだよ??」

「安心しな、手加減はしてやるよ」

「安心出来ねえ??」

「位置につけ。始めるぞ」

相澤先生から催促されたので俺はクラウドニングスタートの体勢に、
兄貴は槍をしまつてアリアを抱える。

「位置について???始め!」

「ッ!」

「——つと」

『0:00』

「「「は?」」」」

『4:21』

兄貴から4秒遅れで俺もゴール。周りは兄貴の驚異的な記録に目が点。相澤先生ですら信じられないといった表情をしているから面白。

「よつと、終わったぜマスター」

「やっぱ兄貴は速いねー。流石最速の英霊」

「ハッ、当然だろ?」

そこ、呑気に会話してないでこの状況何とかしてくれ。進まないから。

『7:02』

やはり出久はワンフォーオールを使わない。いや、使えない。強大すぎるパワーに肉体が耐えきれないせいと体を壊してしまうと

『82m』

「マスター 行こう」

「よっし!? ☒ちゃんGOー!!」

『∞』

「????」

第四種目：反復横跳び

「フッ!フッ!フッ!」

『217回』

「マーリンバフお願い!!」

「お任せを。夢の様に片付けよう」

「よっし、それじゃとわばア!!?」

「うわ、足滑らせたと思ったら木に頭から??」

「???」

第五種目：ソフトボール投げ

「いや自重しろよマジで!!!」

「えー」

何で呼び出してるのが揃いも揃って神代の英霊ばっかなんだよ!?
マーリンは違うけどどつちにしろグランドじゃねーか!!

今ならマジでこいつ一人某A国落とせると思う。これで10%つ
てんだから笑えない。

「なあなあ!お前らスゲーな!」

「お?」

「えっと、君は??」

「俺は切島鋭児郎!よろしくな!」

「俺は木場勇治。こつちがアリア・ペンドラゴンだ」

「よろしく!」

ツンツン髪こと切島が話しかけてきた。断じてマイクチェックを
する方ではない。

「なあ、木場って無個性なんだろ?」

「ああ」

「何でそんなに身体能力高いんだ？強化系の個性って言われた方が納得出来るんだが？」

「無個性の俺を『出来損ない』とかぬかしたクソ両親を見返したかったのと憧れてる人に近づきたかったから、だな」

「お、おう。なんかすまん。聞いちゃいけない事聞いちゃったな？」

「気にすんな。今じゃもう他人だからな」

「なんたつて顔面に手切れ金の500万と一緒に絶縁状叩きつけてやったしな。」

「??+で言えば翼から貞操を死守するためと言うのもあるが。」

その後も上鳴や芦戸などのメンツが話しかけてきたので互いに自己紹介する。耳郎にはさりげなく人を人外扱いした恨みがあるので耳たぶを思いつきり弄ってやった。時折艶めかし声が聞こえてドキリとしたのは内緒である。

「そういう言ってるうちに出久の番か??」

「あ、ホントだ」

「??マズイな、表情に余裕が無い。完全に追い詰められて思考の袋小路に陥ってる時の顔だなありや。周りもマズイと思ってるのか、麗日や飯田も不安気な顔だ。」

「緑谷くんこのままではマズイな??」

「たりめーだろが。無個性の雑魚だぞアイツは！」

「無個性だ?!?彼が入試時に何をしたのか知らんのか君は!?!」

ボンバーファツキユーが何か言ってるが無視。飯田も律儀に答えんで良いのに。

そして出久がボールを投げる。結果は――

『46m』

「な!?!今確かに使おうと?!?!」

「個性を消した」

動揺する出久に告げる相澤先生。出たなヒーローとしての顔が??!
「消した???そうか！視るだけで他人の個性を消す『個性』!!」

抹消ヒーロー『イレイザー・ヘッド』!!」

説明どうも。クラスメイトの大半は知らないようなので有難いだろう。

そして相澤先生による出久への説教。そして決定的な言葉を放った。

「——緑谷出久、お前はヒーローにはなれないよ」

さて、ここからどうする出久???

出久side

相澤先生に言われた事は、悔しいけれど正しい事だった。僕は所詮オールマイトの力を手に入れただけの無能。勇気と蛮勇は違うという事を改めて見せつけられた。

——オールマイトは勇気を持ったヒーロー。僕は蛮勇を振りかざす事しか出来ない約立たず。

分かってはいた。それでも直視したくなくて目を背けていた事実
に、僕は押しつぶされそうだった。

「ボール投げは2回だ。早く済ませろ」

(どうする?どうするどうするどうする!?)

力の制御なんて出来ない。かといってこのままでは何も結果を残せない。

完全な詰み、諦めろ。と心の中で誰かが言う。

お前には無理だ。と誰かが罵る。

お前はヒーローにはなれない。と告げられる。

(僕は???ヒーローに、なれない?)
いやだ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ!!

『君は、ヒーローになれる』

(オールマイトが!そう言ってくれた!!)

だからこそ僕はこんな所で終われない。終わる事が出来るはずがない。

ふと、僕の夢を応援してくれた親友の言葉が思い浮かんだ。

『オールマイトに?あんまりオススメは出来ねえけど???でもまあ――

――』

『――夢を語るお前は、すげえカッコイイと思うよ』

「ツツツツ!!」

全身に力がみなぎるような感覚。錯覚だったのは分かっている。でも、確かに木場っちゃんの言葉に後押しされた。

『入れるなら、2Lのペットボトルにだ』

あの言葉の意味も、ようやく理解出来た。

僕はこれまで一部分にのみワンフォーオールを発動させてきた。それも100%の力を。それを僕の腕が耐えきれはすもなくバッキバキに折れるのみだった。

要するにキャパシティオーバー。容器に収まりきれなかった。

(なら、容器を大きくすればいい!!)

右腕のみではなく、全身。赤いラインが全身に広がり、今度こそ全身に力がみなぎってきた。名付けるなら“フルカウル”といった所だろうか。

「S――MASHっ!!!」

『1472m』

全身が痛い。でも骨が折れてるわけでも筋繊維が断裂している訳

でもない。まだ、立ってる。

「先生???まだ、やれます!!」

「コイツ???!」

見れば木場っちゃんが満足そうな笑みを浮かべてこちらを見ている。僕は無言のサムズアップ。木場っちゃんも返してくれた。

「どういう事だテメエ訳を言えやデクコラア!!」

「うわっ!」

唐突にブチ切れたかつちゃんが襲いかかってきた。

が、相澤先生の包帯に絡め取られ、拘束される。

「んだこれ?っ!固えっ?!」

「つたく、何度も個性を使せるな??」

俺はドライアイなんだよ」

(((凄いい個性なのにもつたいたい!!))))

多分この時は全員の心がひとつになっていたと、僕は思う。

side out

「これにて一件落着つてな」

どうやら上手い事行ったらしい。出久サムズアップしてきたので俺も笑顔で返しておく。

爆豪?勝手にキレて勝手に拘束された馬鹿なんぞ知るか。今はあんな奴の事なんぞ忘れて出久のフルカウル習得を祝う事にする。

で、結局長座体前屈は普通で上体起こしは94回とまあまああの結果だった。アリアもこればかりはどうしようも無いので素直に受けていた。

ラストの持久走で、またやらかしやがったよアリアのアホ。

兄貴を再び呼び出して1:00とかアホみたいな記録をたたき出し

やがった。俺は15:20。やりすぎどころじゃねえだろオイ。

そんなこんなでテスト終了後、結果発表なのだが?、

「ちなみに除籍は嘘な」

「はーーーーー!!!?!」

数人、主に出久がスゲー顔してた。もうお前お化け屋敷やれよというレベルでスゲー顔。

ハアツと溜息を着いたのは八百万だった。

「あんなの嘘に決まってますわ???少し考えれば分かることでしょう?」

リアルお嬢様言葉キターー!!!おっとゲフンゲフン平静を保たねば。

呆れた様に言う八百万だが残念ながら本気どころかもつとヤバかったんだよな俺ら。

「確かあの人去年1クラス丸々を1人除いて除籍にしてるぞ」

俺の一言に固まる一同。と同時に顔を青ざめる者もいる。自分達が相当ヤバかったのを理解したようだ。

ちなみに当然ながら除籍されなかった1人は翼である。ウチのねーちゃんマジTUEEEE。

放課後、全ての授業を終えた俺たちは帰路についていた。メンツは俺、アリア、出久、飯田、麗日だ。自己紹介も済ませるので話はスムーズだった。

「デクくん凄かったよね!こう??バビューン、て!」

「あ、うん?えつと」

「麗日。デクじゃなくて出久だ」

「え?でもあの爆豪て人がデクって言ってたけど」

「デクってのは出久の読みを爆豪くんがバカにして読んでるだけであ
だ名って訳でもないよ?」

「つまりは蔑称か」

「っーわけさ胸糞悪い」

「うーん?でも私は好きかな。ほら「頑張れ!」って感じがして」

「デクです」

「「緑谷(出久)くん!!!?」」

それでいいのをお前は???

戦闘訓練だよ！自重？なにそれおいしいの？

——翌日、翼からの襲撃を躲し、クラスメイトと親睦を深め、のんびりと授業を消化して行く。

昼飯は学生食堂で食った。クックヒーロー ランチラッシユの料理が食えるとの事で、俺も食ったがすげえ美味かった。

てか戦う料理人て??? トリコ世界の住人かな？グルメ細胞持ってたりにして。

いやーそれにしても楽しい。なんつーか、青春って感じがいいわ。中学ではクラスメイト連中の殆どが無個性を馬鹿にしてくるような奴ばかりだったので偏見無しに接してくれるクラスメイト連中はホントに有難い。

「なあ、そういや木場ってホントにヒーロー科志望じゃなかったのか？」

「たまたま一緒に飯食ってた切島からそんな質問が飛び出す。

「そういやそんな事言ってたな」

「差し支えないならば教えて貰っても構わないか？」

同じように飯食ってた上鳴や障子からも聞かれた。恐らく皆薄々気になってはいたのだろう。別に知られて困るような事じゃないので話すことにする。

「入試の時のOPt ^{サイラン} 敵覚えてるか？」

「ああ、あのバケモンロボットか」

「そりや覚えてるって。忘れられねえよあんなの」

「あの時は対抗手段がなくて逃げ惑うしかなかったからな??ヒーロー科の人間としては情けなく思ったよ」

「お、障子それは個人的に好感が持てるぞ。ヒーロー的には高Ptだぜ！」

「で、あれがどうかしたのか？」

「俺サポート科受験したんだけどアレブツ壊したらこっちに叩き込まれた」

「はあっ!?!」

「???すまん、どういう事だ?」

俺が仮面ライダーだから——なんてこんな人が多い所では言えないので適当に言っておく。

「さあな。向こうとしては使える人材を確保しておきたかったって所じゃないか?」

そう言い、ついでに学校側と交渉してサポート科と兼科させてもらっていることを言うと、皆不思議に思いながらも納得してくれたようだ。

ま、この後バレるんだが。

昼食後、お待ちかねのあの時間がやって来る。

ヒーロー科がヒーロー科である所以の専門科目。その名も——

「わーたーしーがー!!」

普通にドアから来た!!」

——ヒーロー基礎学。文字通りヒーローとしての基礎を学ぶ科目でありヒーロー科の醍醐味といっても過言では無い。

教壇に立つのはNO.1ヒーローのオールマイト。

あのオールマイトから直接教えて貰えるとあって、皆興奮を隠せていない。

「すげえ?!マジでオールマイトが先生やってるんだな!!」

「しかも銀時代のコスチューム?!」

「やばっ、画風違い過ぎて鳥肌立ってきた?!」

湧き立つ一同。かく言う俺もめちやくちや興奮している。ようやくおっぴらに動けるからと言うのもあるが何より自分の実力がどの程度なのか試したくて仕方が無い。

バトルジャンキー?何言ってるんだ、俺は唯合法的にボンバーファツキキューをぶん殴れるかもしれないから少し興奮してるだけだ。

「早速だが今日はコレ! 『戦闘訓練』だ!!」

「戦闘?!?!」

「訓練?!?!」

「そして?!?! コチラだ!!」

クラスの壁がスライドし、中から番号の記されたボックスが迫り出てきた。

「各要望に添えた戦闘服だ!!」
コスチューム

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

「着替えたらグラウンドβに集合だ!」

形から入るってのも大事な事だぜ少年少女!!

自覚するんだ! 今日、今から自分は——

——ヒーローなんだと!!!!」

そう言つて彼が出ていく際にチラリと目が合った。俺は安心しなと軽く笑いかける。心無しか不安そうな表情になってオールマイトは出ていった。なんでや。

「木場つちゃん? 行かないの?」

「おっと、今行くぜ」

ま、気にしたら負けか。せいぜい頑張るとしますかね。

「お、木場と?? 緑谷だっけか」

「うん、確か切島くんだよな?」

「おう! よろしくな!」

グラウンドに出たら早速切島が話し掛けてくる。持ち前のコミュ

力で引つ込み思案の出久ともすぐに打ち解けたようだ。

「にしても緑谷、もしかしてそのマスクのツノみたいなものって?? オールマイトのアレか?」

「あ?? やっぱり分かる?」

「いやわかりやすいくらいだぞ?」

あつさりとツノの由来を看破された。まあすげえ分かりやすいしな。

「に比べて木場は?? マファイア?」

「言うな。自分でも分かっただろ」

切島の言う通り俺の戦闘服は黒スーツに黒のロングコート、黒ハットに白いマフラーとどっからどう見ても完全にマファイアである。

?? いやカツコイイ感じのやつ考えたらこうなっちゃったんだよ。コートに関しては耐熱性抜群の高硬度絶縁体を素材にしてるから防御力もバッチリだしコート裏には大量のサポートアイテム仕込めるし。

ちなみに今回はカイザギア持ってきた。デルタは帝王シリーズ作る為のサンプルだから今んとこ使えないしファイズギアは追加武装の調整の為に同じく使えない。

つーわけでカイザギア。ちなみにサディーは流石に無理なので留守番。

あのやろ何が『マスターに捨てられました』だ。

そんな訳でこのコートは高性能で便利なスーパーコスチュームなのだ。決してマファイア服では無いぞ?」

だから一部の女子がこちらを見て怯えた様子なのは気のせいだと思いたい。

「うんうん!! 皆なかなか?? ?? ?? ?? かい良い戦闘服じゃないか!! カツコイイぜ!」

オイオールマイトでめえ。何で俺の姿見た瞬間言葉に詰まりやがった? シバくぞ。

怖気を感じたのかブルリと身体を震わせたオールマイトだが、気を取り直して説明を始める。

「さて! 始めようか有精卵共!!」

今回行うのは屋内での対人戦闘訓練だ！」

対人、と聞いて皆の表情が引き締まる。まさかいきなり人間を相手にするとは思ってもしなかったようだ。

「主に敵 退治は屋外などでよく見られる??が！凶悪 敵 発生率自体は屋内の方が圧倒的に多いんだ!!」

オールマイトの言葉に納得したように頷くクラスメイト達。

俺？内容知ってるから聞き流してるよ。

「と、言うわけで君らにはこれから敵組とヒーロー組に分かれて2対2の屋内戦闘を行ってもらおう!!」

「基礎訓練も無しに行うのかしら?」

「その基礎を知るための実践さー！」

ただし、今回はぶっ壊せばOKなロボじゃないのがミソだぜー！」

カエルっぽい少女、蛙吹梅雨の疑問をきっかけに皆から質問が噴き出してきた。

「勝敗のシステムはどうなっていますか?」

「?ブツ潰してもイイんすか」

「また除籍とかあるんですか?」

「分かれるとはどの様に分ればよろしいでしょうか!」

「このマントヤバくない?」

「んんんん！聖徳太子イ！」

ペラリとメモを取り出すオールマイト。新人とはいえそれぐらい覚えとけよ?。

((((カンペ?!)))))

ほら皆の心の声が聞こえてんじゃねえか。

「いいかい?状況は敵が核兵器を持ってアジトに立てこもっていてヒーローはそれを奪取、または敵を捕縛し無力化を狙っている!」

((((設定アメリカンだ!!)))))

「敵組の目的は制限時間まで核を守るかヒーローを捕縛すること!」

ヒーロー組は核の回収、または敵組の捕縛だ!

そしてコンビ及び対戦相手は??くじで決めるぞ!」

「適当に決めるのですか!」

「現場だと急造でチーム組むことも少なくないらしいし、そういう事じゃないかな?」

「成程!失礼しました!」

「このクラス22人いるけどそこはどうするんスか?」

「そこは1組だけ3対3で戦ってもらおう!こういうのも体験さ!」
という訳でくじを引いた結果――

A : 出久 麗日

B : 轟 障子

C : 八百万 峰田

D : 爆豪 飯田

E : 青山 芦戸

F : 砂藤 口田

G : 俺 上鳴 耳郎

H : 蛙吹 常闇

I : 葉隠 尾白

J : 切島 瀬呂 アリア

「マジかよ?」

よりにもよってアリアか??手持ちのアイテムでなんとかなるか?でもパワー型の英霊呼び出されたら勝ち目ねえしな??核の近くで戦闘すれば大規模な攻撃を防げるか?だとすると早急に索敵する必要が??」

「木場、ストップストップ!」

「ん、あ、悪い」

ついつい思考の海に潜り込んでしまっていたようだ。気づいたら既に上鳴と耳郎が近くにいた。

「考え事か?取り敢えず自己紹介しようぜ!」

「それもそうか。」

じゃ改めて、木場勇治だ。知つての通り無個性で戦闘スタイルとしては幾つかのアイテムを駆使した索敵やサポート、もしくはは正面切つての肉弾戦とこだ」

「いやそれなんでも出来るんじゃないかよ??」

つと、俺は上鳴電気だ。個性は『帯電』、一応索敵とかもできるぜ！」「ウチは耳郎響香。個性は『イヤホンジャック』つつつてこの耳のやつ？」

シウルシウルと耳のプラグを伸ばしてプラプラさせる耳郎。おいやめろ、触りたくなるじゃないか。

「このプラグを相手に刺して音の衝撃を伝えたり??」

まあ2人と同じように索敵にも使えるよ」

それぞれの個性の情報を交換し合う俺たち。にしても正直これは??、

「かなり強い（微妙だ）な」

「ん？」

「え、これ強いのかかなり偏ってるように思えるけど」

あ、そうかこいつらアリアの個性について詳しく知らないんだっとな。

「対アリアとしてはバツチりなんだよこの3人が」

「対ペンドラゴン?え、何アイツそんなにヤバいのか?」

「アイツの『召喚』で昔のガチ暗殺者呼び出されてみる。気づいた時は首が落ちてた、なんて事も有り得るぞ」

「うわあ?」

ドン引きの2人。だって俺がアイツならそれぐらいはするぞ?・

アサ子さん喚んで半数で索敵、残り半数で奇襲を繰り返して相手を疲弊させてから呪腕先生とか爺でトドメ、とか普通にやるもん。

が、当然俺一人でも何とかなるように対策はしてる。それにこの2人がいるなら完璧だ。爺クラスでない限り何とかなるだろう。

「んじやま、やるとしますかねえ?!」

俺は静かに燃えていた。

「――てな具合に向こうは考えてると思う」

「うわあ?！」

やあやあどうも、アリアだよ。なんか色々あつて転生して過ごしてくうちに木場さんの相棒ポジに収まつてるかと思つたら今の今まで影が薄いアリアちゃんだよ。べ、別に寂しいとか思つてないんだからねっ!?

??コホン、一人芝居はこの辺にしてと。

今は切島さんと瀬呂さんに木場くんが考えてるであろう作戦を説明してたところだよ。木場くんって私のこと單純つて思つてるかもしれないけどこれでも頭はいいんだよ?この位はお見通しなのだー!・
にしてもなんかアサ子さんの下りで既にドン引きだったよ二人とも。んー、別にこれくらいまだ優しい方だと思うけどなあ?ケイローン先生の『THE・命懸け!君も英雄になろう講座くく実践編』よりはまともだよ?あの人東方もビックリの弾幕ぶちかましてくるんだから。

「と、言うわけで奇襲を仕掛けます!」

「何が、『と、言うわけ』なんだよ!?!向こうに読まれてるんだろ?何で奇襲なんか?」

「瀬呂の言う通りだぜ。それに奇襲なんて男らしくない真似しなくても俺が正面から行って取り抑えればいいじゃねえか」

「だからこそ、だよ」

「?。」

「わざわざ出迎える準備してくれてるんだし、少し派手に登場してやろうと思つてね」

木場くんには悪いけど、本気でやっちゃうからね?

「―――次の組み合わせ！GチームがヒーローでJチームが敵だ！」

授業が進んでしばらくしてようやく俺たちの番になった。爆豪は出久にしてやられ、ほかのメンツもほぼ原作通りの内容だった。爆豪ざまあ。

ヴァイラン
敵 チームがビルの中に入ってから10分程、ようやくスタートの合図がかかった。

『訓練開始！』

「？始まったか。よし、耳郎は音で敵の位置を把握、上鳴は電気張って近づいてくるやつをチェックしといてくれ」

「もうやってる??ん、音的に4、5階の辺りに全員いるみたい。動きてる様子は??瀬呂のテープの音が聞こえるくらいで他に何も無いよ」

「こつちも特に何も感じないぜ。奇襲の予兆も無いな」

「妙だな??動きが小さ過ぎる。何か仕込んでやがるのか？」

「ならコイツの出番だな」

コートの内側に仕込んでいたモノを取り出す。

取り出したのは携帯端末。それを軽く操作すると、コート内から小さな人型が飛び出し始める。

「何コレ??プラモか何か？」

「惜しいが外れだ。」

こいつはLittle Battler experience
とって通称LBX。俺が開発した小型のロボットだ。

「索敵・強襲・暗殺なんでも出来るぞ」

「いや暗殺て?」

「だって作中で使われてんだもん。」

「あ?何でLBXなんてもん作ったのかって?そんなの俺がロボット物好きだからに決まってるだろ。」

「今回使うのはみんな大好き単眼量産機のデクー。やっぱり単眼は口マンだな！」

「??ん?」

——そこで気付いた。俺達の周囲を霧が囲っている。しかも既に数メートル先すら見えないぐらいに深い霧だ。

「なんだこれ???霧?」

「何でこんな所に霧なんかが??」

——反射的に傍らの耳郎を抱き寄せてコートで覆う。

「へっ!」

「上鳴!!全方位に放電!!」

「え、ちよ、なんで」

「いいから急げ!!全滅するぞ!!」

「りよ、了解!」

——バリバリバリバリバリ!!!

上鳴から放たれた電撃が辺りを覆い尽くす。

俺は瞬時にデクーを操作してマシンガンを乱射し、数秒後にデクーが破壊された事を端末は知らせてくれた。

やがて、上鳴の電撃が収まる。俺は恐る恐るコートから顔を出した。

「???凌げた、か?」

霧は既に霧散していた。上鳴はアホ面を晒しているが無事、こちらの被害はデクー一機で済んだようだ。

「あ、あのー???そろそろ離してもらえないかなーと思うんだけど??」

「ん?ああ、悪い」

抱えていた耳郎を解放する。若干顔が赤いが、まあ、不可抗力なので許して欲しい。

「にしてもまさかジャックで来るかよ?」

完全に予想外だった。よく良く考えればジャックも奇襲に特化していることを失念していた。完全に俺のミスだ。

「あの、まだウチら説明して貰ってないんだけど」

「ん、まあ平たく言うと奇襲を受けた」

「あ?、もしかしてさっき上鳴に放電させたのって」

「接近を防ぐためにな。まさか早速デクーを破壊されるとは思わなかったが」

「あの霧は?」

「奇襲した奴の能力だよ。たしか☒^{ザ・ミスト}暗黒霧都☒だったか? 本来の力は使えないみたいだがそれでも厄介な能力だよ」

「能力って?」

「硫酸を含んでるんだよ、あの霧は。今じゃ精々塩酸程度だが全盛期の奴なら数分と掛からずに殺られてたな」

オルフェノクの俺はその限りではないが上鳴と耳郎は危なかった。個性持ちと言えど所詮は人間、異形型でもない限り抵抗は厳しいだろう。

が、と言って何も考えていない訳じゃない。

「耳郎、奴らの動きは?」

「あ、ちよつと待って???うん、動いてないみたい。3??ううん、4人分の鼓動が聴こえてる」???

「てことはジャックも奴らといるのか?」

ならば好都合だ。俺はすっかり忘れられていたウェイモードの上鳴を肩に担ぐ。

「よつと??上鳴、少し我慢してくれよ?」

「ウエ、ウエイ?」

「んで、どうすんの?」

「ンなもん決まってるだろーが」

このまままぐつについてもジリ貧、かと言って絡め手を仕掛ける時間もない。ならば――

「――真正面からの突撃だ」

得意分野おれなでやらせてもらおうか?

「――ごめんなさいおかーさん??失敗しちゃった??」

「んーん、全然気にしてないからへーきへーき」

目の前でしょんぼりするジャックちゃんを抱きしめる。あゝあゝ
~~~~癒されるんじやあ~~~~。

「ふみゆ??おかーさん、ちよつと苦しいよ?」

「んん~~~~もう少しこのまま???」

「???いやおかしいだろ!!」

切島?と瀬呂くんからツツコミが入る。でも気にしな~い!このままジャックちゃんを愛でるのだ~!

あ~~~~癒しじや~~~~。

「だ　か　ら!!!今訓練中だよな!?何でお前そんなにのんびりしてんの!?もつと緊張感持てよ!!」

「いやてかその幼女だれだよ!?なんか突然どつか行つたと思つたら戻つた来てるし!!なんなの!?!」

「私　この子　愛で中　うるさいから　黙れ」

「せめてしつかり喋ってくれよ?」

え~~~~めんどい。でもまあ私は優しいので説明してあげる事にする。

「この子は私が喚んだ子で名前はジャック・ザ・リッパ。おけ?」

「いや端的過ぎるわ!てかジャック・ザ・リッパで何百年も前の殺人鬼だろ!?なんてもん呼び出してんだよ!?!」

「だいじょーぶだいじょーぶ、本人じゃないし」

「そういう問題か?」

型月世界の住人に突っ込んだら負け。おーけー?

そのまま和んでいると急にジャックちゃんの顔付きが変わる。そこに幼い少女の姿はなく、冷酷な殺人鬼としての顔を、彼女は出していた。

「?だれかきてるね」

「霧に引つかかったの?」

「うん、数は??3人かな?1人は抱えられてるみたい」

抱えられてる??あ、ウエイモードの上鳴くんか。あの状態の彼は役立たずだから抱えてるのかな?

「どうした?誰か来たのか?」



「ん、木場くん達が来たみたい。ジャックちゃん、どんな感じ?」  
「??まっすぐこつちに向かってきてる。たぶん、場所がばれてる」  
むう??やっぱり弱まった暗黒霧都<sup>ザ・ミスト</sup>じゃ上手く妨害出来ないかー。  
「どうすんだ?このまま待つてる訳にも行かないぞ?」

「よし、部屋の前で迎撃しようか。瀬呂くんは核に張り付いといて、切島くと私たちで木場くん達を迎え撃とう。あ、切島くんは前衛お願いね?」

「おっしや、任された!」

「真正面からの戦闘か???男らしくて燃えてくるなあ!」

おおーテンションアゲアゲだね。

「おかーさんはどうするの?」

「ん?私も出るよ?」

岸波白野や藤丸立香みたいな的確な指示は出せないけど、ね。

「私だってマスターなんだよ」

特典の恩恵である右手の令呪が、紅く輝いた——

「——見つけた!正面の扉、もう展開してる!!」

「ちっ、流石にバレるか!」

「ウェイ?」

ビルの5階、連中の場所を特定した俺達は奇襲を仕掛けるために霧の中奴らの部屋まで走っていた。が、既に奴らは動き出しているという。恐らくジャックに感知されたのだろう。

「っ?、見えた!」

霧が晴れたその先、目標の扉の前には既に切島、アリア、ジャックの姿が見える。瀬呂の姿が見えないが、恐らく部屋で待機しているのだろう。

好都合だ！

「耳郎！」

「了解！」

「ウエイ!？」

耳郎に抱えていた上鳴を投げ渡す。俺はすぐさまコートに腕を突っ込む。

「さて——」

奴らが動き出すが既に俺の手は目的のものを掴んでいる。

「——やろうか？」

「んなあ!？」

俺がコートの中から引きずり出したのは第二次世界大戦中、ドイツ軍が使用した対戦車擲弾発射装置☒パンツァーフアウスト☒。いまとなつちやあ骨董品に過ぎないが?、

「壁破るにや充分だ!ぶちかましたア!!」

「そ、総員退避——!!」

発射された弾頭がアリア達に迫る。必死の形相で回避するアリア達。遮るものなくなつた弾頭はそのまま壁に吸い込まれて行った。

——ドガアアアアアアアン!!!!

「???は?」

崩れた壁の向こうに呆然とする瀬呂の姿が見えた。間髪入れず傍らの上鳴を瀬呂にぶん投げる。

「上鳴、人間スタンガン!」

「ウエ、ウエエエエエイ!?!」

放電しながら突っ込んでいく上鳴。それにぶち当たる瀬呂。

「あばばばばびびびびぶぶぶぶべべべべ!!?」

黒焦げになって崩れ落ちる瀬呂。俺は残されたパンツァーフアウストの発射台を投げ捨て、腰にカイザギアを装着する。

『Code 913 Enter』

『standingby』

「変身!」

『complete』

閃光と共にカイザに変身する。そのまま呆然とする切島を殴り飛ばした。

「らあっ!」

「ぐほおっ!」

「っ、ジャックちゃん!」

「うん、解体するよ」

アリアは思ったより早くたて直した。すぐさまジャックに指示を出し、自身は後方に下がる。指揮官として、正しい判断だろう。

が、今回ばかりは悪手である。

「耳郎!」

「おっけもうやってる!」

耳のコードを伸ばしてアリアの足に引っ掛け、すっ転ばせる。

「たわばっ!」

「悪いけど、逃がさない!」

「あべしっ!」

そのまま馬乗りになり、首元に俺が渡したナイフを突きつける。

「おかーさんっ!」

「よそ見してる暇があるのか?」

『Exceed charge』

「グランツ、インツ、パクトオ!!」

「かっはっ!」

マスターがやられて動揺した所で腹に思いつきりグランインパクトを叩き込んだ。

体をくの字に曲げ、吹き飛んで行くジャック。壁に叩きつけられ、<sup>カイ</sup>の文字が霧散すると同時に前のめりに倒れ込んだ。

「てめっ——」

「おっと、動くなよ切島ア!こいつがどうなってもいいのか?」

起き上がってきた切島がかかってこようとするが耳郎に目配せしてナイフをチラつかせる。それだけで切島は動けなくなってしまった。

「てめえ??卑怯だぞ!!」

「フハハハハ!!卑怯汚いは敗者の戯言!

勝てばよかろうなのだアーーーーー!!!!」

「うわあ??」

(味方にまでドン引きされてる??これじゃもうどっちが敵<sup>サイラン</sup>かわかんないよ木場くん??)

完全に引かれてるがそんなこと知ったこつちや無いね!

クツクツクツ??さあてどう料理して『<sup>サイラン</sup>敵チームWIIIIIIII

IIIIIIIIIN!!!』???What?

備える為にサボったら天罰食らった木場つちちゃん

「ハア~~~~~~~~?!!?」

「おお、朝から凄い溜息だね。大丈夫?」

「これが大丈夫に見えんなら眼科行つた方がいいぞ」

ん?俺が落ち込んでる理由。そんなの戦闘訓練の結果の事で色々言われたからに決まってるんだろ理解れよ(暴論)。

あの後八百万からそりやもうボロクソに言われたよ。やれゴリ押しだの、仲間を投げるなんてありえないだの、子供を殴るなんてだの。

最後のは敵だからしょうがない?俺悪くなくない?

何よりもシヨックだったのが皆に口を揃えられて「もはやお前が敵サイランにしか見えなかった」と言われたことだ。

酷くね?確かに格好マフィアだけどそこまで言うかよ!?

当然だが俺が仮面ライダーになった事についても根掘り葉掘り聞かれた。マツクで。取り敢えずクラスメイト達全員(ボンバー除く)にクソネズミ達に言ったことと同じ内容を説明しといた。あるものは驚愕し(主に女子陣)、あるものは感嘆する(切島とか常闇、障子らへん)。そしてまたあるものはその生き様に号泣する(多分何となくわかると思う)などみんな多種多様な反応を見せてくれた。たのしい。

中でも出久は別格だった。いやもう見事すぎる顔芸披露してくれたよ。何あれもはや別の作品じゃん。

爆豪?90。過ぎて150。位のツリ目で俺を睨んでからさっさと帰っていった。ねえどんな気持ち「NDK?馬鹿にしてた無個性に助けられてねえどんな気持ちNDK?」してやりたかったんだが流石にアリアに止められた。死体蹴りはやめろ?お前どつちかつつたら嬉嬉として死体蹴りするタイプじゃねーかよ。

クソネズミ達にも呼び出された。まあ正体晒すって言ってなかったしな。面倒いから適当に理由付けしてさっさと帰った。相澤先生が面倒だったがいいい猫カフェ知ってますよ」と取引持ちかけたら

あつさり堕ちた。やったぜ。

で、今は八百万にボロクソ言われた事を思い出して落ち込み中。訓練だったとは言え幼女殴ってるから言い訳出来ねえんだよなあ??。

「ま、まあでも訓練だったんだし！しようがないんじゃないかな?」

出久、フオローはありがたいんだがな??、

「あの絵ツラ『幼女をいたぶって楽しむ全身鎧の変質者』にしか見えねーんだよなあ?」

V? 見せられたよ完全にヤベー奴だった俺。100人に聞いたら全員が俺が敵だサイランというレベル。

??ああ、女子達からの視線が痛い。完全に引かれてる通り越して攻撃対象になってんじゃねーかってレベルで睨まれてる、主に八百万とか麗日から。

? 自重しよう。そう固く誓う俺だった。

「お前ら席付け。HR始めるぞ」

バツ!と皆が一斉に席に着く。相澤先生効果ホントすげえよなマジで。静かになるまでコンマー1秒かかっているかも怪しいぞこれ。

「昨日の戦闘訓練お疲れ様。Vと成績は見させてもらった。爆豪」

相澤先生が爆豪の名前を呼ぶ。

「お前はもうガキみてえなマネするな。能力あるんだからな」

「??わかってる」

「で、今日の本題なんだが?」

ざわ、と色めく教室。あ、今日はこれか。

「学級委員長を決めてもらう」

「二「学校つばいの来たー!」!!!」

「うおっ」

「うへえ??わかっていても騒がしいねえ」

辟易する俺達を他所に教室内は盛り上がっていく。

「ハイハイハイ!!俺やりたいっス!」

「リーダーやるやるー!!」

「オイラのマニフェストは女子全員スカート膝上30cm!!」

ん?俺は拳げないのかって?やだよ面倒い。俺は現場で動く人間

なんだ。アリアも右に同じ、面倒い事はなるべく避けたいんだとき。  
「静粛にしたまえ!!」

(お前が1番うるせーよ)  
「多を牽引する責任重大な仕事だ、やりたい者がやれるようなモノではないだろう！」

周囲からの信頼あつてこそその聖務！民主主義に則り、これは投票で決めるべき事だろう!!」

そう言う飯田の右手は垂直にビシリと伸ばされている。

「そびえ立ってんじやねーか!!なぜ発案した!!?」

うん、まあ、やりたかつたんだろ?

「まだ出会って日も浅いのに信頼もクソもないわ飯田ちゃん」

「だからこそ!ここで複数票とつた者が相応しいという事になるだろう!!?」

ん、まあ一理あるわな。相澤先生は?

「時間内に決まるならなんでもいいよ」

とまあこんな感じなので結局多数決で決めることになった。それで結果は、

「僕五票ーーーー!!?!?」

とまあこの通り出欠。追加の2票は当然俺とアリア。だって他の連中に任せるくらいなら常識人+気心の知れてる出欠に任せた方がいいだろ?

??結局は飯田になるんだがな。

そんなこんなでHRが終わり、相澤先生も出て行った。

さて、俺も行くとしますかね。

「ん?どしたんだ木場。荷物なんかまとめて」

「帰る」

「は?」

俺の答えに素っ頓狂な声を上げる上鳴。

「いや、帰るって??」

「この後用事があつてな。それじゃ」

「お、おいつ!」

そんな訳でスタスタと教室を後にする。なんか後ろで聞こえた気がしたが知らん。

こっちはUSJ襲撃に備えなきゃなんねえんだからな。俺やアリアというイレギュラーがいる以上向こうが強化されている可能性も否定出来ない。

??死人を出さない為にも悪いが今日はサボらせてもらう。HRの相澤先生が厄介だから出席はしたがそれ以降は無視だ。

俺はそのまま雄英を後にした――。

学校を出て駅へ向かう途中の事、何でこうも俺はついていないのか。また敵が湧きやがった。しかもすんげえ見覚えのある奴。

「へいへいへい!!どうしたヒーロー共!?攻撃してみろや!!」

「誰か助けてえええ!!」

「ママア!!こわいよお!!」

「連続強盗殺人犯×僧坊ヘッドギア×!!くっ、人質なんぞ取りやがって??!」

「オマケに無駄に強い?!これじゃ手出しが出来ない?!」

????いやマジかよオイ。No.13に出てきた敵の僧坊ヘッドギアじゃねーか。奴と相対するヒーロー達もデステゴロやMt.レディなどの見覚えのあるメンツ。

お前登場明日だろーが!?はえーよ!?こちとら襲撃に備えなきゃなんないのに何目の前に登場してくれてんの!?

いやイレギュラー起こるのは予想してたよ?でもお前噛ませじゃん!本編関係無いじゃん!?出てくんよマジで!

「??無視してさっさと帰ろう」

俺は群がる野次馬の間をすり抜けながら歩く。周りの人たちは幸い、と言つていいのか分らんが敵に夢中で俺に気付いてない。雄英



の生徒だとバレたら面倒なのでさっさと抜けることにする。

——が、どうも神は俺をこの1件に関わらせたいらしい。

「へっ、見せしめだア！このガキの頭捻り潰したらア!!」

僧坊ヘッドギアが抱えていた家族の内、未だ10に満たないだろう少女の頭を掴んだ。そのまま見える様に持ち上げる。奴が、ゆつくりと力を込めていくのが分かった。

「い??痛い??!痛いよう?!!」

「やめてえ!!?私はどうなってもいいからその子だけはあ!!?」

「ウルセエ！恨むんなら役たたずのヒーロー共を恨みなア!!」

そのまま奴がグツ、と拳を握り込み——

「——巫山戯んなよゴミクズが」

「あ?」

気付けば、俺の右手にはホースオルフェノクの剣が握られている。そして俺自身もオルフェノク体へと変身していた。

そして俺の腕の中、そこには僧坊ヘッドギアに今にも殺されようとしていた少女が抱えられてる。

「お馬さん???」

少女のか細い、されど生命力を感じさせる声が聞こえた。どうやら命に別状は無いようだ。

——プツリ。後ろから、音がした。

次の瞬間、僧坊ヘッドギアの左腕が付け根から落ち、傷口から勢いよく血が噴き出し始めた。

「ぎっ、ぎゃあああああああああ!!!!?」

「??チツ、やっちまったか」

関わらないでスルーするつもりだったのについてないな。

僧坊ヘッドギアは痛みあまり残っていた人質夫婦を手放している。ゴロゴロと転がる僧坊ヘッドギアを蹴り飛ばし腰を抜かしている夫婦に少女を差し出す。

「ほら、さっさと連れて逃げな」

「ひ、ひいいいいいい!!?」

夫だろ男性は俺から少女をひったくって女性と共に逃げて行く。

??今の俺の姿は化け物だ。仕方ないとはいえ今の反応は堪える。

「彼らもこんな気持ちだったのかねえ??」

っと、思いを馳せてる場合じゃないな。僧坊ヘッドギアは残った右手で傷口を抑えながらこちらを睨んでいる。

「て、てめえ☒灰色の怪物☒か!?何で同じ敵の癖して俺を攻撃すんだよオ!!」

「??風評被害だっつーの」

別にオルフェノク全員が敵サイランと言う訳では無い。ただ力に溺れたオルフェノク達が☒灰色の怪物☒として世間から敵サイランとして認知されるだけだ。平和に暮らしてる連中からしたらいい迷惑だぜホント。

「てめえが気に入らねえからぶっ飛ばす。それだけだ」

「く、くそがアあ!!」

激昂しながら殴り掛かってくる僧坊ヘッドギア。俺はその腕を躲し、腹に拳を叩き込む。

「おっ、ごおえ!!」

「おっ、らあっ!!」

「ぎぶえ、え!!」

そのまま前蹴りを食らわし、吹き飛ばす。僧坊ヘッドギアは奇声を上げながら吹っ飛び、地面を擦りながら5mほど進んでようやく止まった。

「さて、このまま??っ!」

奴にトドメを刺そうと近付こうとしたら背中に強い衝撃が走る。反射的に前に飛んで勢いを殺した。振り返ると、数人のヒーロー達がこちらに敵意を向けながら睨んでいた。そのうちの一人——バスターヒーロー エアジェットの銃口から煙が立ち上っている。どうやら奴に撃たれた様だ。

「?なんか前にも見た光景だな。

「?なんのつもりだヒーロー」

これも前に言った気がする。で、連中の反応も見たようなもんだっ  
た。

「お前☒灰色の怪物☒だろ?だったら確保一択だろうがよ」

「化け物が?! 敵 同士何仲間割れしてんのか知らねえがここですぐでも捕まえてやるよ!」

「??? 良くもまあペラペラペラペラ口が回るなあオイ?」

ズシリ、と空気が重くなる。もちろん原因は俺。ここまで好き勝手言われりや聖人でもキレるだろうよ。

「テメエらのはあのガキが殺されようとしている時何やってた?」

「何を——— 「質問に答えろ」

「2度は言わねえぞ??? テメエらは、何を、やっていた?」

「それは???」

1人のヒーローが悔しげに顔を俯かせた。

「そうだ、ただ見ていただけだ」

そこで言葉を区切る。俺が言いたいのはこれだけだ。

「ヒーローの癖して何やってんだテメエらはア!!!」

ビリビリと空気が震える。俺の冷静な部分は「俺こんなに大声出たんだなー」とか呑気な事考えてる。

が、俺のブチ切れた部分はヒーローどもをボロクソにこき下ろしていた。

「テメエらはヒーローだよなア!!!それが人質が殺されようとしてるのを黙って見てるだア?」

——— 巫山戯んじゃねえぞオ!!!」

「そ、それは他にも人質が居たから」

「テメエらのその脳味噌は飾りかア!? 高所からエアジェットが奇襲を仕掛けて陽動、パワー型のデステゴロやMt.レディが押さえ込んで



ア  
!!!!

——手の付けられない化け物になる。

僧坊ヘツドギア——の成れの果て——は巨大化しそのサイズは5m近い。パワーも比べ物にならないだろう。さらに理性を失っている。

状況は、最悪だ。

「テメエら逃げろおおおおお!!!」

「アッアッアッアッ!!!」

「二二「うわああああああああ!!!」二二」

僧坊ヘツドギアは辺りにやたらめったら拳を振り下ろし始める。アスファルトが砕け、逃げ惑う市民の上に降り注ぐ。

「テメエ?! 止めろやア!!」

剣を両手で握り、飛び上がって思いっきり奴の肩に振り下ろすが、

「斬れねえ?!?!」

肥大化した奴の分厚い筋肉に阻まれて受け止められた。チラリと奴の顔を見れば目が合った。

——ニタリ、と笑ったような気がした。

「しま——」

次の瞬間、俺は殴り飛ばされてビルに叩きつけられていた。

「があああああ!!!」

俺はそのままビルを突き破り、人気のない裏路地に転がり落ちた。

「痛つてえ?? あんの野郎?!?!」

ヤクまで持ってたのは予想外だった。原作ではどうか知らんがあのままでは確実に不味い。

他のヒーロー達は戦力としては数えられない。人質がいたとはいえ素の状態ですら手も足も出ないのだから足でまといになるだけだろう。

??ならやるしかない、か。

俺は懐からカイザフォンを取り出す。ダイヤルを入力、サディーへと繋ぐ。ピピツ、と電子音がなりサディーの声が聞こえてきた。

『マスター、なんの御用でしょうか。今は授業中の筈ですが』

「無駄口を叩いてるヒマは無い。今から状況だけ説明する。」

敵がヤク取り込んで暴走しててヒーロー共は戦力に数えられない。  
座標送るからカイザギア持ってきてくれ。今回はお前も戦力として  
数えるからな」

『オールマイト達に任せておけばいいのでは?』

「??もう一般市民に被害が出始めてる。連中待ってたら死人が出ちま  
う」

『???了解しました。今すぐ急行します』

「助かる」

——それからもものの5分でサディーは俺の元に辿り着く。俺  
はサイドカー内のケースからベルトを取り出し、腰に装着する。

『Code 913 Enter』

『standing by』

『マスター、本当によろしいので?』

「たりめーだ。今更後に引けるかよ。それに——」

「——ここで逃げたら、俺は二度と仮面ライダーの名を背負えな  
くなっちゃう」

今の俺は、紛い物と言えど仮面ライダーだ。それが逃げる?それこ  
そ彼らへの冒涇だ。

だから俺は逃げない。絶対に。

『??Yes. Master. あなたの御心の仮に』

「そりゃどーも???変身!」

『complete』

『了解しました。戦闘形態へ移行します』

『Battle mode』

俺はバツシャーに跨り、それと同時にバツシャーはバトルモードへと変形する。

「行くぞサディー??殲滅する!」

『Yes. Sir』

俺達は、空へと飛び上がった。

「ゲゲゲゲゲゲ!!」

「うわああああああああああ!!!」

「逃げろおおおおお!!!」

敵——僧坊へツドギアの成れの果ては上機嫌だった。既に何故自分がこんな所で暴れているのかもわからないほどに理性は摩耗している。が、敵としての本能とでも言うべきモノが彼を突き動かす。

——もつと悲鳴を、血を、快楽を、と。

自分の思うがままに力を奮い、誰かを傷つける快感を得たいが為に暴れる典型的な敵の姿がそこにはあった。

さて、次はどんなふう<sup>ヒーロー</sup>に殺してやろうか。そんな事を考えながら自分の邪魔をする蠅共<sup>ヒーロー</sup>をその剛腕で打ち払う。1人、また1人と殴り飛ばされて意識を失うヒーロー達。それを見て再び悲鳴が巻き起こされる。

心地いい、とその悲鳴は新たな快感を求める欲求へと変わる。彼は





「とつとと寝てるクソ敵」  
サイラン

—— 仮面ライダーがハンドルを右にきつたと同時に振るわれた機械の拳に吹き飛ばされる事で、その行き場を失った。

彼はそのまま地面に倒れ込み、意識を失ったのかそれ以上立ち上がる事は無かった。

仮面ライダーはそのまま機械に跨ったまま、大きく跳躍し、啞然とする市民やヒーロー達の前から姿を消した。

—— 尚、この事件については敵はヒーロー達に鎮圧された事になっており、まるで何処からか圧力でも掛かったかのようにあの仮面ライダーの情報が世に出回ることには無かった。

翌日、その仮面ライダーの正体たる少年がとあるネズミに説教を受けていたのは誰も知らない——

## USJ——初めてのクソ転生者

僧坊ヘッドギアというイレギュラーに遭遇し、クソネズミとスマー  
トブレイン社長村上峽児としてのツテを使って俺がいたことを揉み  
消した翌日。

???分かつてはいたけど戦ってばっかだなあヒロアカ世界。でも僧  
坊ヘッドギアのは仕方ないと声高に言わせて欲しい。オールマイト  
やエンデヴアーらトップヒーロー達は別の事件で手が離せなかつた  
らしい上、援軍が来る気配も無かつたんだからな。

さて、今日は待ちに待ったUSJ襲撃当日。今日の為にわざわざ学  
校サボって準備してきたので準備は万全である。

それにしてもUSJ???USA???ISOA???うっ、頭が??。

「今日のヒーロー基礎学は俺、オールマイトに加えもう1人の教師で  
見る事になった。」

行うのは人命救助訓練。災害時での市民の救助を想定した訓練だ」

「レスキューか??今回も大変そうだな」

「でもヒーローの本分だぜ?むしろ腕が鳴るぜ!」

「ケロ、水難なら私の独壇場ね」

教壇に立つ相澤先生がそう告げる。生徒達はそれぞれ不安を口に  
する者、やる気を見せる者など様々だ。

「今回はコスチュームの着用は自由だ。訓練所はバスに乗って行く。  
時間は有限だ、合理的にな。以上だ」

???俺に出来るのは死者を1人も出さない事、そして敵が強化されて  
ない事を祈るばかりである。

「こういうタイプだったかくそう!!」

「意味なかったねー」

飯田が無駄に気合いを出して空回りし、芦戸が無自覚に傷口を抉つてくバス内。ちなみに俺の隣は上鳴と最近影が薄いアリア。まあ普通だ。

「木場くん？なんか失礼な事考えてない？」

「??気の所為だろ」

何でこういう時、女って感じがいいんだろう。結構ドキツとするからやめて欲しい。

「貴方の個性、オールマイトに似てるわね」

「え、ええ!？」

あ、出久が蛙吹に話しかけられてる。モテるなああいつ。なんか無自覚に女何人か落としてそうなんだが（偏見）。

「そ、そうかな!？でも、その、僕のはえーとその」

「さてよ、オールマイトは怪我なんかしねえよ。似て非なるモンだろ」  
落ち着け出久動揺し過ぎだ。そんな態度じゃ何かありますって言うてるようなもんだぞ。そして切島ナイスフォワード。ボロが出る前で良かった。

「しっかしシンプルな増強型の個性はいいよな！派手で出来ることが多いし！」

俺の『硬化』は対人戦じゃ強えけどどうも地味なんだよな。特に応用法もねえし」

「応用???だったら木場ちゃんに聞いた方がいいよ。そういうの考えるの得意だし」

出久がそう言うのと俺に視線が集まった。え、ここで俺？

「木場、そうなのか？」

「いや?、別に得意ってわけでもないが」

「なんか思いつく事があるなら教えてくれねえか？俺そういうの考えるの苦手なんだよ」

硬化の応用法ねえ??。

「切島、とりあえず個性見せてくれ」

「?おう、いいぞ」

そう言って硬化した腕を差し出してくる。ん???これ皮膚が硬く

なってるわけじゃねえな。どっちかつつたら??鉄分か?てことは??あーそういう事か。

「切島、お前自分の個性についての程度把握してる?」

「把握??つっても硬くなるぐらいしかわかんねえな」

「ん、まあ普通分かるわけねえから仕方ねえか」

「どういう事だ?」

「お前の個性を詳細に言えば『体内の鉄分を使って身体に硬度や粘度を操作可能な金属を生み出す個性』だ。副次効果として体内に大量の鉄分を蓄積できる、ってところか」

「お、おお?」

「き、木場ちゃんそれって?」

本人はよく分かってないみたいだが出久はこの個性の凶悪さに気付いた様だ。

「そうだ、上手く扱えば刀剣類や鎧をほぼ無制限に生み出せる」

「しかも粘度を操作して打撃系統の攻撃を無効化できる?相手に向かって射出すれば拘束も?」

「鼻っから斬撃系統も効かないし敵の攻撃に合わせて体から金属の刃でも突き出しゃカウンターし放題だ」

「熱とかの絡め手には弱いけどそれを差し置いても強い??」

「早い話、物理攻撃が効かない盾役<sup>タンク</sup>。しかもカウンター付きだ。改めて言葉にすると大分エグイな」

詳細に説明してやったしこれなら切島でも理解出来るだろ。

「あー、つまり??どういう事だ?」

訂正、こいつなんも分かってねえ?!

「要するに切島の個性は体内の鉄分から金属を造れてそれを操れる、って事でしょ?」

「あ、ああ!成程な!芦戸サンキュー!分かりやすかったぜ!」

「おまつ!丁寧に説明してやったのにそれはねえだろ!」

「正直二人して何言ってるのか分からなかったわ」

「ひでえ??」

「そ、そんなに分かりにくいかな???」

ショックを受ける俺と出久。え、大分噛み砕いたよ？それで分かりにくいって俺つてもしかして教えるの下手？

「い、いやそんなハズは？」

「じゃあ馬鹿な上鳴くんでも分かるように上鳴くんの個性の応用法をどうぞー！」

「しれっとデイスられた!？」

上鳴か??うん、こいつなら大丈夫だろ。

「電撃系統の個性はやれる事が多いからな。電磁浮遊、プラズマ操作、超電磁砲<sup>レールガン</sup>?？」

「ぶ、ぶらず??れーるが?、何?」

「すまん、こいつが理解出来る単語が思いつかん」

「ごめん、そもそも馬鹿な上鳴くんが理解出来る訳ないよね」

「え、何、俺が悪いのか!？」

「おい、そろそろ着くぞ。いい加減にしとけ」

??うし、切り替えていきますか。

バスから降りて演習場内に入る。

「すっげー!!USJかよ!？」

「火事、水難、土砂災害その他諸々。あらゆる事故や災害を想定してつくられた演習場。」

その名もウソの災害や事故ルーム!

((((ホントにUSJだった!!!)))

宇宙服を着たヒーロー13号がここの担当教師だ。個性は『ブラックホール』。ぶつちやけ作中でもトップクラスにチートな能力である。

ん、なんかヒソヒソ話してるな??あ、オールマイトか。確か限界ギリギリまで活動して顔出せなかったんだった。

「えーでは始める前にお小言を1つ2つ??3つ4つ?」

((((増える??)))

「皆さんご存知だとは思いますが僕の個性は『ブラックホール』。どんなものだろうと吸い込んでチリにしています」

「それで災害から人を救い上げてるんですよね」

出久の言葉にすごい勢いで首を縦に降る麗日。ファンなんだっけか。その言葉に首肯する13号先生。「しかし」と続ける。

「二歩間違えば簡単に人を殺せる力です。皆さんの中にもそういった個性を持つ人がいるでしょう。」

今の社会、資格制度によって個性を管理していますがそれでも人を容易に殺せる行き過ぎた力を個々が有している事に変わりはありません」

知っている。が、思わず13号先生の言葉に聞き入る。

「オールマイト先生の授業で各々が自身の個性の危険性、そしてそれを他人に向ける危うさを理解したと思います。この授業では誰かを傷つけるのではなく、誰かを助ける為に個性を使い、どう活用するかを学んで欲しいと思っています」

彼のように自らの力の危険性を理解している者は希少だ。一般人、敵、<sup>ライオン</sup>そして一部のヒーロー達ですらそういった事を理解している者は少ないだろう。少なくとも彼は現代のヒーロー社会において尊敬出来る数少ない人物であろうことは想像にかたくない。

「以上、ご清聴ありがとうございます」

気付けば自然と拍手が漏れていた。現代のヒーローもなかなか捨てたもんじやない、と彼を見ていると思えてくる。

—— 視界に、異物が入り込んだ。

黒いモヤの様なモノ。ゆっくりと広がるそれから現れた——  
—— 途方もない悪意。

「全員一塊になって動くな!!13号!生徒達を守れ!!」

教師達、そして原作を知っている俺とアリア以外は状況を理解しておらず動けないでいた。

そんな中—— 俺は1人で前に出た。

「っ!?待て!木場!!」

待つてる訳には行かなくなった。手マンこと死柄木弔、これはい

い。ワープゲートの黒霧、これも問題無い。連中の切り札の脳無——  
——二体、居る。原作に出てきた奴に加えてもう一体、赤銅色の肌を  
持つ脳味噌丸出しの巨漢が。

(ここから来るかよイレギュラー!!)

だが、予想はしていた。だからこそ用意していた。俺はコートの中  
からソレを引きずり出す。

「は??」

ソレを見た死柄木から声が漏れた。そりやそうか。こんなモン見  
りや誰だつて驚く。

「くらいやがれクソ 敵共オ!!!」

M134 通称ミニガン。毎分2000発という脅威の連射力を  
誇る化け物。それが、二丁。

——バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ  
バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ  
バラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラバラ!!

弾丸は一応ゴムステン弾。それでも当たり所が悪ければ死ぬだろ  
う。が、脳無二体相手に加減なんぞしてる余裕は無い。下手すりや  
こっちが殺られるのだから。

??そのまま二、三分程打ち続けたらどうか。カラカラと銃身が空回  
りを始める。弾切れだ。

俺はそのままミニガンとマント内に仕込んでおいた弾倉を投げ捨  
てる。連中は——健在だった。

「??あつぶな。イキナリゲームオーバーなんて笑えない?」

敵共の7割程は倒した。残りの連中も少なくとも傷を負っている。  
が、死柄木、黒霧両名は健在。咄嗟に庇わせたらしく2人の前には脳  
無が立っている。

その目を見て——怖気が走った。原作の脳無では無い、赤銅色  
の脳無だ。アレは他の脳無の様な操り人形では無い。ヤツは俺を見  
て、笑った。嘲り等の感情は含まれていない、純粹な喜びの笑み。  
奴の目は、まるで自分と同じものを見ているかの様だった。

思わず後ろに後ずさる。それ程までに奴の視線が悍ましかった。

「??今は何も言わん。下がれ」

肩に手を置かれた。相澤先生だ。

「他の奴らには指示を出しておいた。お前も逃げろ」

「??駄目です。相澤先生の個性じゃ相性が悪過ぎる。せめて俺だけでも援護します」

「それこそ駄目に決まっている。お前は“子供”で、俺は“大人”だ。大人には子供を守る義務がある。分かったらさっさと行け」

なおも食い下がろうとするが後ろに引つ張られた。13号先生だった。個性で俺を引き付けたようだ。

「今は相澤先生に任せましょう。さあ皆さん避難を！」

「??クソっ!!」

不味い、このままでは確実に相澤先生は死ぬ。勝ち目なんぞある訳が無い。助けに行こうにも13号先生が邪魔をする。ここに来て味方に邪魔されると思わなかった。

「——させませんよ」

避難する13号先生達の進行方向に立ち塞がる黒いモヤ。黒霧だ。

「はじめまして雄英高校の皆さん。我々は敵<sup>ライバル</sup>連合。僭越ながらこの度お邪魔したのは——」

——平和の象徴に息絶えて頂きたいと思つての事でした。

平和の象徴、つまりはオールマイト。この国の最強のヒーローを、殺す。黒霧はそう言った。生徒達は驚愕に包まれる。

「しかし妙ですねえ??先日頂いたカリキュラムではここにオールマイトが居るはずなのですが??」

そんな生徒達を他所に呑気に喋る黒霧。そこに、いち早く立ち直つた切島と爆豪がせまる。

爆破と硬化した拳が迫る。黒霧は慌てる様子もなくそれを回避した。

「危ない危ない??そう、生徒と言えど優秀な金の卵、か。なら——  
散らして、捌り、殺す」



「ダメだ！二人とも退きなさい!!」

13号先生は射線に爆豪達が被っていて攻撃出来ない。かく言う俺も為す術が無い。

——黒の奔流に、俺達は何も出来ず呑み込まれた。

「う、おおお!?!」

霧が晴れると目の前には地面。咄嗟に受身を取って顔面ダイブだけは回避する。

「うわっ!?!」

「きやつ!?!」

「へブっ!?!」

他に飛ばされたのは耳郎、八百万、上鳴か??. 上鳴が顔面ダイブしてるのはいいとして、だ。

「キシシッ!お前らア!獲物が来たぞお!」

この敵共サイランを始末する事が先決だ。見れば既に上鳴達は戦闘態勢を取っている。これなら特に心配は無さそうだ。

俺はカイザフォンからサデイーに連絡を入れる。特に時間も掛からず繋がった。

『マスター、例の敵サイラン連合ですか?』

「察しが良くて助かる。お前はUSJ外サイランに敵が居ないか確認、その後他の生徒の救出に動いてくれ」

『マリーはどうします?』

「アイツはセントラル広場に向かわせろ。戦力不足でかなりピンチだ」

『了解しました。マスターは?』

「俺は山岳エリアに居る。余裕があるなら助けに来てくれ」

『任務了解。命令を遂行します』

「キシシッ。なんだ?家族への連絡でも済ませたのか?」

敵を無視してカイザギアを装着する。こんな奴の話に付き合う気は無い。

「上鳴、お前の個性で連絡着くか？」

「ダメだ、全く繋がらねえ」

「恐らくジャミング系統の個性持ちがいるのかと思われます」

「つまりはウチらだけで何とかするしかないと？」

「まあ何とかなるだろ」

「お、おいおいなんでそんなに余裕なんだよ!？」

「見た感じ三下のチンピラばかりだ。俺達なら充分倒せる」

「?どつちにしろ戦うしかありませんわ」

『Code 913 Enter』

『standingby』

「そういうこつた。変身!」

『Complete』

俺が変身するとザワリと敵サイラン共に動揺が広がる。その隙を逃す程俺は馬鹿じゃない。

「お前らは3人で背を向けあつて戦え。そうすりや隙も最低限で済む。八百万は2人のために武器創つてやれ。特に上鳴は長期戦に向かねえからな」

「分かりました!木場さんは!？」

「自前のモンで充分だ!」

言うやいなや俺は動揺している敵サイランのうちの1人に拳を叩き込む。

「ギャブウ!？」

あつさり<sup>サイラン</sup>と他を巻き込んで吹っ飛んでいったそいつから隣の大柄な異形型サイラン敵に標的を変更する。やつとこさ立ち直つたのか異形型サイラン敵は拳を突き出してきた。だが遅い。既に俺は奴の懐に入り込んでおり、そのまま後ろに回り込み腰を掴んでバックドロップを食らわす。

ふむ、他の連中を含め武器持ちが多いな。俺はミツシヨンメモリを引き抜いてブレイガンに挿入、ブレイガンをソードモードに変更する。「どうした?かかって来いよ」

「ナメてんのかガキイ!!」

ハンマー持ちがハンマーを振り下ろす。それを横に躲してフォト

ンブラッドの弾丸を叩き込み、後ろから近寄ってきた鳥ウイラン 敵を振り返って斬り捨てる。

「ハッ！隙だらけだ!!」

「お前がな」

態々声掛けてたら奇襲の意味がねえじゃねえか。ご丁寧にテンプレウイランな奇襲を仕掛けてくれたモヒカンゴリラに回し蹴りを叩き込んで敵 共に返品する。

うん、やつぱり大した事ねえな。ウイラン 敵と言えどもチンピラ同然の雑魚の集まりだ。見れば上鳴達も危なげなく敵を倒している。ウイラン

「このまま全員始末して早く救援に——」

——ビビビツと虫の羽音の様な音が後方で聞こえた。

「っ！」

反射的にその場にしゃがんで後ろからせまるナニカを回避する。それを好機と踏んだのか敵 共が迫って来るが足祓いをかけて転ばせ、一人一人弾丸をぶち込んで眠らせておく。

ナニカが向かった方向を見れば——羽音の正体らしきカブト虫型の機械を持った男が立っている。その腰には、見覚えのあるベルトが巻かれていた。

「おまっ?!えはー!」

「よオ兄弟。早速で悪いが——死んでもらうぜ」

男が、カブト虫——カブトゼクターをベルトにセットする。  
「変身」

『HENSIN』

鋼色の装甲が男を包む。間違いない。ああ、間違いないとも。こいつは俺が探していた者の一人——転生者だ。

男は更にゼクターを操作。その動作に見覚えのある俺は咄嗟に叫んだ。

「全員伏せろオ!!」

その言葉に反応出来たのは、上鳴達や数人の敵のみ。ウイラン その他は、容赦なくその身に鉄塊をくらった。

「キャストオフ」

『CAST OFF』

その言葉と共に奴の装甲が弾け飛ぶ用にパージされる。俺の叫びに反応出来なかった者達——全員が敵だが——の末路は様々だ。吹き飛ばされて気絶する者、奇跡的に当たらなかった者、そして——急所に受けて即死した者。

『CHANGE BEETLE』

「へえ、避けたのかよ。やるじゃん」

「そう言うお前は味方だろうと容赦無しかよ。ええ？」

「ハッ、こんなゴミ共が味方？んなわけねえだろ精々が捨て駒だつたの。つまんねえ冗談はよせよ兄弟」

「誰がテメエなんぞと兄弟だ？反吐が出るぜゴミ野郎が」

「オイオイツれないねえ」

おちやらけた態度に腹が立つがぐつと堪える。こいつには、聞かなければならない。

「1つ、聞かせろ」

「あん？」

これだけは、聞かなければならないのだ。

——正直、仮面ライダーの力を使って敵<sup>サイラン</sup>してるだなんて思いたく無かった。そうだったとしても、致し方ない理由があると、思いたかったんだ。

「お前は、なんで仮面ライダーの力を使っているにも関わらず敵<sup>サイラン</sup>なんぞになっっている？」

「??なんだよ、そんな事か」

誰もが「ヒーロー」としても仮面ライダーを愛している。そう思っていた、否、思いたかった俺の希望は——

「楽しいからに決まってるじゃん？」

——あつさりと打ち砕かれた。

「こんなすつげえ力があるんだぜ？そりゃ好き勝手に使いたいと思うだろ？てかあるんだから使わなきゃ損じゃん」

？人間、極限まで怒りが溜まると一周まわって冷静になるという事をこの時俺は学んだ。腸はとうの昔に煮えくり返っている。それで

も思考は不自然なくらいクリアだった。

「??お前の言いたい事はよく分かったよ。俺から言う事は一つだけだ」

「お、なにになに?なんか面白い事?」

冷静な心の奥底で、ドロドロとして怒りのマグマが噴火寸前まで煮えたぎって居る。俺はそれを――

「死に晒せクソ転生者」

――目の前のゴミに向けて一気に解き放った。

## V S 偽カブト1

そして王は目覚める

「死に晒せクソ転生者」

奴——偽カブトの言葉を聞き怒り心頭の俺は奴に向けてブレイガンを腰だめに構えて撃つ。西部劇などの抜き撃ち、その予備動作を極限まで無くした高速の射撃術。確実に当てるつもりで放つたそれは、しかし、奴が軽く首を捻る事によって躲された。

「おっと、危ねえ危ねえ。いきなりはないんじゃないか?」

「黙れカスが。これ以上テメエと問答するつもりは微塵もねえ。だからよ——」

地面を蹴って奴に迫る。

「とつとと死ねやあ!!」

「はっ、やなこと!」

首目がけて振り下ろされる黄の刀身をダガーで受け止める偽カブト。そのまま鏢迫り合いに持ち込むつもりなのかダガーに力を込める。

生憎とパワーで負けてる相手に馬鹿正直に向かって行くつもりは無いので奴の腹を蹴った反動で距離をとった。

「っ、とと。オイオイ少しは手加減してくれよ?」

「余裕で反応出来てた癖して何抜かしてやがる」

「あ、わかった?」

??認めたくはないが目の前の偽カブトのスペックは高い。カブトが、と言うのではなくカブトの中身がだ。

仮面ライダーカブトは昭和における仮面ライダーストロンガー、つまりは平成における「最強」を意識してデザインされたライダーだ。本体スペック自体はあまり高くない。オリジナルカイザとほぼ同じである。

が、コイツの恐ろしい部分はこちらではない。

まず仮面ライダーの必殺技として1番有名なライダーキック。食らえば最後、原子レベルで粉々にされる。

もう1つが『クロックアップ』。早い話が自身の高速化。

これが尋常じゃなく速い。ファイズのアクセルフォームなどを始めとする歴代高速フォーム、もしくはロボライダーやイクサなどの動体視力に優れたライダー達でもない限り対応は難しい。ただし体への負担はめちやくちや大きいが。

??多分1号とか3号なら余裕で対応出来るんだろうけど。

前置きが長くなったが手っ取り早く言うとかブト自体はかなりピーキーでノーマルスペックの一般人では扱いきれない代物だという事だ。つまり、中身もオリジナルの天道総司並のスペックを持っている可能性が高い。

ともかく、こちらがやる事は一つだけだ。早い話、

「何もさせないまま倒す!!」

ブレイガンによる射撃で奴が技を使う暇を与えない。そのまま接近するが奴もただ手をこまねいている訳では無い。奴はダガーを投擲してきた。

「あらよつとー!」

「つチー!」

間一髪弾き飛ばす。クルクルと空中で回るダガーを飛んでキヤツチし、奴はそのままこちらに振り下ろしてきた。ガキツと硬質な音を立てて刃はブレイガンの刀身に阻まれる。

「お、防いじゃう?ならもつといこうか!」

「ガツ、ハアツ!」

「ぎ、木場あ!」

偽カブトはそのまま空中でぐるりと回り、蹴りを放つ。ダガーに気を取られていた俺はその蹴りをモロに食らってしまった。俺は吹き飛ばされて地面に転がった。上鳴の心配したような声に答えてやりたいが生憎とそんな暇は無い。

「まだまだいくよんー!」

「クツ?!」

右の振り下ろしを躲して逆手で突きを放つもダガーに阻まれた。

「?シッ!」

「うおつちよあぶなあ!」

1度ブレイガンから手を離して裏拳を繰り出す。大袈裟に声を上げて仰け反りながらたたらを踏むそいつに足刀蹴りを叩き込む。しかし浅い。どうやら背後に飛んで威力を殺した様だ。

「おっほほーやるじゃんやるじゃん！もつと楽しもうぜ！」

「チツ、無駄にスペックの高い奴だ！」

「なんと言つても天道総司の肉体ですから！」

「聞いてねえよクソツタレが！」

思った通り奴の体は天道総司の物の様だ。天道自身生身で怪人と戦える化け物スペックの持ち主だ。さらに注意が必要だろう。

「今度はこつちからいくよん！」

「くおっ?!」

ボクシングのジャブ気味に放たれた拳をギリギリで躲す。俺の首の真横を通つて行つたそれを掴み、一本背負いの要領で投げようとするも、

「ところがぎつちよん！」

「ぐっ?!」

偽カブトは俺の首に腕を回してチョークスリーパーを掛けてくる。否、仮面ライダーのスペックでそんなものを食らえば確実に草加の様に首をへし折られる。

「させっ?!?るかっ?!」

「ぶへっ?!」

ブレイガンを俺の顔の後ろに向けてそこにあるであろう奴の顔面に叩き込む。奴も驚いた様で軽く後ずさった。

——好機！

「フッ！」

「わわっ?!」

袈裟斬り気味に振られた刀身はダガーで受け止められる。そこで一旦メモリを引き抜いた。

「おわわっ?!」

押し返そうとダガーに力を込めていたのであろう。奴はあっさりと体勢を崩した。その隙を逃さず奴に銃撃を撃ち込みまくる。



「う、おおおおお!!」

これには奴も余裕を崩し、声に焦りの色が混じり始めた。俺は更に奴を追撃する。

右のボディーブロー。奴が思わず蹲ると頭を抱えて右膝。それを何発も。ムエタイで言う “首相撲” の体勢だ。

奴はそれをクロスガードで防ぎ、何とか顔への一撃は阻止している。好都合。俺は奴と組んでそのまま、

「ブレーンバスターアアア!!」

「ぐおっ、ほおっ!!」

全力のブレーンバスター。無様な声を上げて地面に叩きつけられる奴にトドメを刺そうと拳を振りかぶる。

「っらあっ!!」

「がっ!!?」

顎に衝撃。目の前がチカチカする。たたらを踏んで後ずさり、膝をつく俺を偽カブトは悠然と見下ろしている。

「かあ~~~~!なんだよ、思ったより強えーじゃん!!聞いてないんですけど!!」

まるで餓鬼のような癩癩を起こす偽カブトを見ながら、俺は今何が起こったのか冷静に分析していた。

(いくらなんでも起き上がるまでが速すぎる?!クロックアップを使う動作も無かった???別の転生特典か?だとすると何だ?反射神経の強化?クソっ、分からねえ?!)

「ああもうくそっ!!おい!雑魚野郎!」

「?あ?」

偽カブトから声が掛かり、俺は思考の海から浮上する。奴は相当カッカしているようで、先程までの余裕そうな態度は微塵も見受けられなかった。

「遊びはお終いだ!!これでぶっ殺してやるよ!!」

『ONE TOW THREE』

そう言うとゼクターのボタンを押し始める。ケリを付けるつもり  
の様だ。

「?チイ、やるしかねえか」

『Ready』

ポインターにメモリを挿入し右脚に装着。カイザフォンを開いて  
Enterを押す。

『Exceed charge』

ギアから光点がポインターに流れ込み、それを確認して瞬時に飛び  
上がった。

「ライダーキック!!死ねよオラア!!」

『RIDER KICK』

奴の体を紫電が伝い、それが奴の右足に流れ込んだ。俺はポイン  
ターを射出して奴に向けて狙いを定める。

「ゴルドスマッシュ!!死ぬのはテメエだあああああ!!!」

黄金の矢となって奴に向けて突き進む俺。思いつきり振られる奴  
の右脚。それが、ぶつかり合う。

「ぐ、おおおおお!!!」

——拮抗。2つの巨大なエネルギーがぶつかり合い、辺りにそ  
の余波が撒き散らされる。

「うわっ!危ねえ!」

「上鳴!?!」

「下がって!でないと言われますわよ!!」

誰かの声が聞こえた気がしたが構っている暇は無い。今は、目の前  
のコイツを倒す事だけを?!!

——ふと、気付いた。

(おかしい??なんでコイツには焦る様子が見受けられない?)

偽カブトは何事かをブツブツと呟き別の事に気を取られているか  
の様だ。にもかかわらず奴の蹴りは全く衰える様子が無い。いや、寧  
ろ——

(馬鹿な??強くなっている!?)

有り得ない。俺の蹴りはゆつくりと、しかし確実に押し返されてい

る。そんな事があるはずが無い。確かに俺のライダーズギアはオリジナルには及ばないがそれでも他のライダーに一方的に押し返されるほど弱くは無い。

「——もういいや」

そこで奴が口を開く。その声音は、まるで玩具に飽きた子供の様だった。

「何をっ?!?」

「死んでいいよ」

——瞬間、足に触れていた奴の右脚の感触が消失する。

「何——」

何が起こった。そう言う前に奴の蹴りが俺の腹に叩き込まれていた。

「がつつつ、ハアツツツ!」

「木場あ!!」

「木場さん!」

3人の悲鳴のような声が聞こえる。何だ、何が起こった?!!?

「あーあ、こんなカス野郎に特典使っちゃうなんてな。もったいねえ」

「とく、てん??だと?」

奴が放った単語に反応すると奴は聞いてもいないのにベラベラと喋り始めた。

「そうそう!俺が貰った特典はこのカブトゼクターと『常時発動型のクロックアップ』さ!すげえだろ?」

「ん、だよそのクソチートは?!!」

ファイズで言えば制限無しのアクセルフォーム。原作ですら精々数分が限界のクロックアップを無制限に、しかも常時発動型?それはつまり——

「手加減っ?!してやがったのかっ?!?」

「は?当たり前じゃん。カイザみみたいなクソザコナメクジ相手に本気とか恥ずいもん」

「ハッ??、それが、あのザマかよっ??ダッセえなあお前?!」

「ちっ！黙れよカスが!!」

「ごっ、ほおっ!!」

先程蹴られた部分にもう一度蹴りを叩き込まれて上鳴達の所まで吹っ飛ばされる。しかもその際にベルトが外れ、変身が解除されてしまった。

「木場さん!?大丈夫ですか!?!」

八百万が俺に駆け寄り、抱き起こしてくれる。俺はと言うと「クソツタレが?!」と悪態をつくぐらいしか出来ない。奴を見れば俺以外は楽勝という余裕の表れなのか、既に変身を解除している。

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべてこちらに近寄って来る奴の前に、上鳴と耳郎が立ち塞がる。

「んん〜?何だよお前ら。野郎には興味無いから退けよ」

「ウチは女だ!というかここでそう言われて素直にどくならヒーロー科になんか来てない?!」

「木場が頑張ってくれたんだ!だから次は俺達がやる番だぜ!!」

「??あー、そういうのいいからさ。退けよ」

「どかねえ(ない)!!」

「じゃあ死ね」

奴——翌々見れば中々天道総司に似ていた——偽天道は

一瞬で上鳴に近寄って、そのまま拳を叩き込んだ。

「おっ!!」

「おらよっ!!」

そのまま蹴りをくらい、声を上げる間もなく吹き飛ばされて大岩に叩きつけられる上鳴。耳郎はその隙にプラグを差し込もうとするが逆に掴まれて引っ張られる。

「うわっ!!」

「てめえも??だっ!!」

「っうあゝあ!!」

引っ張られた耳郎は膝を腹に叩き込まれてノックダウン。蚊の鳴くような声を絞り出しながら倒れ込んだ。

「に??げ?、て??」

「さーと、お楽しみタイムと行きますか♪」

奴は八百万に抱えられている俺の胸倉を掴んで投げ捨てる。俺は既に声を上げる気力も無く、されるがままだった。

—— 負けた。偽物に。

奴はチートを持っていた。だから何だ？それが何の理由になる？

俺はあの日、偽物の仮面ライダー達を倒して、彼らの名誉を挽回することを誓った。その結果がこのザマだ。

力を好き勝手振るうクズに叩き潰され、仲間を傷つけられ、気付けばボロ雑巾の様に打ち捨てられている。

チートなど言い訳にならない。俺は、あの日、彼らへの誓いを果たせずに、あつさり敗北した。

—— 情けない?!?!

「ぐ???ううっ?!?!」

あまりの情けなさに涙が溢れてくる。13歳でライダーズギアの制作に成功し、スマートブレインを15歳で立ち上げ、更には難関高校の雄英にすら合格した。世間的には鬼才、天才と呼ばれる様な事を成し遂げ、天狗になっていた。それが招いたのは無様な敗北。今も仲間が傷つけられようとしている。

俺は残り少ない力を振り絞って偽天道達の方へ声を発そうとする。せめて、八百万だけでも逃がそうと——

「き、きやあつ?!?な、何をっ?!?」

「荷って、負け組の女がされる事なんて1つしかないっしょ?」

「????????  
は?」

間抜けな声が盛れる。偽天道は八百万に覆いかぶさって、彼女を組み敷いていた。その目は、情欲に溢れている。

(おい、嘘だろ??いくらなんでもそんな事???)

この期に及んで俺はそんな考えを巡らす。そんな考えも布を引き裂く音で粉々にされた。

「嫌っ!?!やめて下さい!!」

「そう言われて誰がやめるかよ!」

「痛っ?!やめて!触らないで!!」

「おほほっ♪やわらけ〜!」

奴は八百万のコスチュームを引き裂き、頭になった彼女の柔肉に指を埋めている。八百万は必死に抵抗している。その反応を楽しんでいた偽天道。が、やがて鬱陶しくなったのか八百万の顔を平手で叩いて黙らせようとする。

パチン、と高い音が響き渡る。

「うるせえんだよ!!お前は黙って俺に犯されてれば良いんだよ!!」

「ひっ?!」

偽天道の大声に萎縮し、小さく悲鳴をあげる八百万。その反応を見て舌なめずりをする偽天道。

俺は——限界だった。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!!!!」

とつくに限界を迎えていた肉体にムチを打ち、無理矢理動かす。全身が痛むがそれを誤魔化すように雄叫びを上げた。偽天道がこちらを振り返る。俺は既に駆け出し、偽天道の顔面に拳を叩き込んでいた。

「ふげらっ!?!」

奇妙な声を上げて無様に吹き飛んでいく偽天道。いい気味だ。

「き、木場さん?!」

八百万の声に答えることは無く、俺はコートを脱いで八百万にかける。流星にこのまま放置して置く訳には行かない。

「あ、ありがとうございます?」

「て、んめえ!?!よくも俺の顔にい!?!」

偽天道が起き上がってくる。俺のパンチで顔はなかなか面白いこ



返す刀で切り上げ、ぶっ飛ばす。奴は空中で手足をジタバタさせながら崖下へと落ちていった。

俺は奴を追いかける為に崖から飛び降りる。確実に、奴の息の根を止める為に。

—— エントランス広場・水難ゾーン中間の水辺

僕、緑谷出久は慢心していた。蛙すつ??梅雨ちゃんと峰田くんと共に何人もの敵を纏めて行動不能にしたのが原因だろう。フルカウルを使ったことにより全身に痛みはあるが動けない程じゃない。僕ら全員が無傷であるのもそれに拍車をかけた。

思ってしまった、というより思い込んでしまったのだ。自分達のが敵に通用すると。

—— そんな僕達の思いは、あっさりと打ち砕かれた。

水辺から顔を出し、ゆつくりと広場の方向を伺う。目の前に飛び込んで来た光景を、信じたくなかった。

相澤先生が、倒れていた。黒い脳味噌丸出しの敵に踏みつけられ、右腕を握り潰されながら。

「なっ??」

「相澤先生が??」

「お、オィィ!!?どうすんだよ緑谷あ!!」

驚愕の声を上げる僕、呆然と声を漏らす梅雨ちゃん、慌てる峰田くん。三者三様の反応だが根底にある考えは同じだ。

『プロヒーローが敗北した相手に自分達が勝てる訳がない』

この時漸く理解した。僕達に当てられたのは所詮捨て駒に過ぎないチンピラ敵の集まりだったのだと。冷静に考えれば分かる事だ。オールマイトを殺す為の戦力を僕達生徒風情に当てる訳が無い。適当な捨て駒を集めて始末すればいいだけだ。突破されたとしても僕らは少なからず消耗するだろう。彼らはそれを始末してしまえばいい。





場所がバレていた——!?

「殺れ、2号」

——一瞬後に、赤銅色の敵が、目の前に迫っていた。奴の目が捉えているのは——梅雨ちゃん。

「よせえええええええええ!!」

全身にフルカウルを展開する暇も惜しい。僕は右腕だけにワンフォーオールを発動して思いっきり赤銅色敵の腹に叩き込んだ。

拳を奮った際の風圧で水面がさざ波を立てる。敵は——無傷。僕は右腕から伝う激痛も忘れて、ただポカンとしていた。

(オールマイトの力の、100%を、耐えた?)

信じられなかった。あの、NO.1ヒーローオールマイトの一撃を耐える事が出来る存在がいるなんて。そうして惚けている僕は、敵達からすれば格好の的だっただろう。

「あゝ?」

音も無く振り下ろされた拳に叩き潰され、僕は地面へとめり込んだ。

「!?!」

声が出ない。代わりに溢れてくる血に、呼吸すら困難な状態だった。

——あれ、ぼく??しぬ?

きゆうげきにちをうしなったせいかあたまがまわらない。だんだんしかいもくらくらくなってきた。うでもうごかない。

「う???あゝあ?!」

「お???じにだくつ?!」

つゆちゃんのみねたくんがうゝいらんにくびをしめらている。ふたりともくるしそうだ。たすけなくちや。でもからだもうごかない。まえもみえない。ああ——

——しんじやった。

——これは、何時の記憶だろう。

周りは炎に囲まれている。瓦礫が崩れ、誰のものともされない血が点々と、時にはベツタリとそこら中に付着している。

そんな中を歩く1人の子供。多分、僕。10歳くらいだろうか。母さんとはぐれて、涙目になりながら必死に出口を探している。

キヨロキヨロと辺りを見回す僕。過去の自分そんな彼の頭上で、天井が崩れた。僕が上を見上げた時にはもう遅い。無数の瓦礫が、僕に降り注いだ。

——結論から言えば僕は助かった。

全身を粉碎骨折、更には大火傷。あらゆる治癒個性での治療を施して尚、死は覚悟しておいた方がいいと言われた程の重症だった僕は、割とあっさり回復した。

まさに奇跡、九死に一生を得たとはこの事を言うのだろうか。

——死ぬ間際に死にかけて記憶を見るなんて、変わった走馬燈だ。

そんな事を、どこか達観して考えていると、声が聞こえた。

『——立て』

「——え?」

『立つのだ。王たる資格を持つ者よ』

「王?何を言ってる?」

『良いのか』

「え??」

『貴様が立たねば、カエルの娘も阿呆な小僧も死ぬぞ?』

「っ!」

しぬ???死ぬ?梅雨ちゃんと峰田くんが?

「と、止めなきや???でも、どうやって?」

『王としての力を振るうが良い。未だ完全なる覚醒とは行かぬが木っ端程度なら葬れよう』

「王としての??力??」

『然り。人間がオルフェノク???貴様らで言えば灰色の怪物と呼ぶ者達、その王が有する力だ。』

さあ、立つがいい。貴様に死なれる訳には行かんのだ』

「っ?!?待って!貴方は?!それに灰色の怪物って?!?」

僕の疑問に答える声は無かった。

——そして僕の意識は闇に飲まれた。

——変化は突然だった。

「あ、っ???」

「う、あっ?」

蛙吹梅雨と峰田実両名は突然自身の喉を圧迫していた万力の様な力が消失した事を認識した。何故、という思いがよぎるが身体は生命維持の為の酸素を欲している。考えを巡らす前に貪る様な呼吸を余儀なくされた。

しばらく、と言っても数十秒程だろう。彼らが目にしたのは——

——赤銅色の敵の両腕が、消失している光景。そして、その赤銅色の前に立つ灰色のナニカ。



## V S 偽カブト2

## 赤き閃光再び

——USJ 火災エリア

サイラン 敵達の襲撃から数十分後、此処、火災エリアに奴はいた。

「ひぎやああああああああああああああ!!!?」

奴が腕を振るう度に悲鳴が上がる。

「ぐぎやつへ!?!た、たすけ??ぶえ!?!」

奴が持つ岩のような大剣が振り下ろされる度に血飛沫が上がる。

「お、お前ヒーロー科の生徒だろお!?!なんでこんな事??お、っ!?!」

「うーん、なんでって言われてもねえ???!」

たった今大剣によつて肉塊に変えられた敵の言葉に少し考え込む様子を見せた金髪の少女——サイラン「ARIAは事も無さげに言い放った。

「私ってさ、ゴミとか見ると捨て置けないタイプの人間でね? 貴方らみたいなのを見ると片付けたくなくなるんだよねえ」

まるで道端の石ころを見るような目で自分達を見るARIAに愕然とする敵達。サイラン

そんな彼らを見て、ARIAはフツと笑い、

「——てゆーのは建前でね?」

ぐしやり、とまた1人潰された。自らに死の危険が迫る中、サイラン敵達は逃げ惑う事もなくARIAを見ていた。

「木場くん——ああ、私のクラスメイトの事ね、なかなかカツコイインだよ?」

彼、誰かを助けるためなら敵も手に掛ける様な人でね? でも私としてイイ人な彼にはあんまり手を汚して欲しくないなあ、って」

また、1人。

「転生して、ず——つと心細かった時に出会って、私みたいなオタクにも優しくしてくれて、

まあ色々お世話になったからさ、多少は負担背負ってあげたいんだよ」

また、1人。



俺の持つ剣が振るわれる度に偽カブトは吹き飛び、その赤い装甲から火花が散る。奴は無様に吹っ飛び、起き上がろうとする度にまた吹き飛ばされる。奴は必死に身体を捻って躲そうとするが遅い。その場でクルリと半回転し後脚で思いつき蹴り飛ばした。

「ぐおっほおっ!?!」

「??弱えな」

最初こそ天道総司の肉体スペックと戦闘センスによって苦戦を強いられたがこうして見ると隙だらけな上、動きに無駄が多い。戦いの才能こそある様だがそれこそ才能とライダーとしての性能に頼ってきたのだろう。

突然だが俺は努力無しのチートの類いが嫌いだ。ああいう主人公は大体が無双してハーレム築くワンパターンの展開だが、まあ戦いを経験したことも無いのに強い事強い事。そんなチート系のキャラクターを努力系のキャラがぶちのめしたりすると最高にスカツとしたのは今でも覚えてる。

ん?何が言いたいのかって?早い話、なんの努力もしていない才能やチート頼みの糞野郎に負ける程落ちぶれちゃいねえってこった。

「こ、殺してやる!!」

おっと、少しボーツとしていた様だ。気付けば偽カブトは起き上がっており、三下のセリフと共にこちらへ襲い掛かってくる。奴は俺が剣を振り上げた所で、

「クロックアップ!」

驚異的なスピードで一気に俺の視界から消える。やはり速い。仮面ライダー達の中でもトップクラスのスピードは伊達ではない、が。相手が悪かったな」

俺の後方、死角から放たれた拳を上半身だけ振り返って受け止める。奴にとつては完璧な一撃だったのだろう、止められた事がとてもショックだったのか驚愕している様だった。

「っ!?!な、何で防いで?っ!?!」

「さあな、お前が遅せえんじゃねエか?」

「ふ、ふぎげんなよっ!?!そんな事があつてたまるかあ!!」



さて、さつきも言ったがクロックアップは全ライダー達からしてもトップクラスのスピードを誇る。そんなスピードで放たれた攻撃を何故見切り、止められたのか？

——ぶっちゃけ俺にもよく分からん。

555本編の1話を見りやわかると思うが、あの時木場さんはなんというか、時間停止というか時間停滞というか、ともかくそれに近い能力を發揮していた。以前俺も出来るのかな？と試して見た結果難無く成功。原理とかは一切不明だがともかくこのクロックアップに近い現象を使い奴の攻撃を止めたのだ。停滞能力が無けりやクロックアップはただ速いだけ、素でアクセルフォーム並、と迄は行かないがそれでもかなりのスピードを有するホースオルフェノクの敵ではない。

???といっても負担が無い訳でもない。いい加減終わりにしようか。

俺は拳を掴まれたまま喚き散らす奴をそのまま地面に叩きつける。

「ウツ、ラア!!」

「ごほっ!」

肺の中を空気が押し出されて苦悶の声を上げる奴の胸の中心目掛けて、俺は剣を深々と突き立てた。

「あがつ!」

バキバキと音を立てて装甲を砕き、剣先が奴の心臓へと到達する。間髪入れずに俺は剣を介してオルフェノクエネルギーを流し込んだ。

「あ、っ、あ、あ、っ!」

暴れて剣を引き抜こうと躍起になる偽カブト。俺は両の前足で奴の方を抑え、一気に踏み砕く。

それがトドメになったのだろう、奴の全身を覆っていた装甲は光と共に消え去り、後には灰色の肌を晒す偽天道だけが残った。俺は剣を引き抜く。奴は既に灰化寸前、放っておいても直ぐに息絶えるだろう。が、灰化なんかで死なせるつもりは毛頭ない。万が一、こいつがオルフェノクとして復活しても困るのできっちりトドメを刺しておく。

俺は人型形態に戻り、剣を消して奴の首を掴みあげる。偽天道は

既に声も出せないほどに灰化が進行している。それでも目を見れば何が言いたいのかは何となくわかった。

——助けてくれ。

奴の目は確かにそう俺に訴え掛けていた。もつとも、

「死ね」

そんなつもりは微塵も無いが。

ゴキリ、と鈍い音を立てて奴の首が折れる。当然だが俺がへし折った。そのまま奴を投げ捨てると、数十秒もしない内に奴の身体は完全に灰と化して消え失せた。

「??終わった、か」

そう一人心地る。厄介な相手だった。この調子だと他の糞転生者共も何かしらのチートを持っていると見るべきか??。

「??ん?」

虫の羽音がする。もしやと思って偽天道の成れの果てを見ればカブトゼクターが羽根を広げて飛び去るところだった。

「本物の天道総司の元に帰ったって事かね」

だとしたら行幸だ。ゼクターの始末に困っていた所だったんだ。俺は灰の中のゼクターの飛び去ったベルトを思いつきり踏み潰し、破壊する。これで仮にゼクターが発見されても何者かに利用される事は無いだろう。

「さてと、さっさと他の奴らを助けに——」

ガクリ、と膝が折れる。

「——ありっ?」

そのまま前のめりに倒れ込んでしまった。段々と意識が消えて行くのを感じる。戦闘で無茶をしたつもりは無いが、俺の肉体は既に限界だったらしい。

「クソっ??ま?だ??残っ??て??」

俺の脳裏に浮かんでいたのは出久達とイレギュラーの赤銅色の脳無。せめてもと、アイツらの無事を祈りながら俺の意識は途絶えた。

——セントラル広場

山岳エリアで決着が着いた頃、ここでも戦いは終局を迎えようとしていた。広場に立つのは敵サイラン連合の死柄木と黒霧、傷一つない黒色1号と赤銅色2号。死柄木達は肩で息をしておりかなりの消耗が伺われる。脳無達は1号は感情のない目で目の前を見ており、2号は先程の怯えはどこ吹く風、ニヤニヤと嫌らしい笑みを顔に貼り付けている。

「ハアーツ???ハアーツ???手こずらせやがってこのバツタ野郎が???!」

「ええ、本当に??!生徒の中に灰色の怪物が混じっているなんて完全2号に予想外でした???!」

そして満身創痍のアークオルフェノクこと緑谷出久。緑谷の後方にはボロ雑巾と化した相澤消太ことイレイザーヘッド、そして蛙吹・峰田両名。

「クソっ?!先生の情報網ガバすぎだろうがっ!」

「落ち着いてください死柄木弔。ともかく今はこの怪物とあの生徒達、そしてイレイザーヘッドを始末する事が先決です。オールマイト抹殺は叶いませんでしたがそれでも十分な戦果でしょう」

「??チツ。そうだな、今回はしょうがない。だからそいつをさっさと始末しろ。1号、2号、やれ」

「!」

「??GIGAAAA!!」

死柄木の言葉に反応して脳無達は緑谷に迫る。緑谷は獣のような雄叫びをあげてそれを迎撃した。

「緑谷ちゃん???」

「緑谷???どうしちゃったんだよっ!」

訳が分からなかった。突如目の前で自分達を庇って緑谷が2号に叩き潰され瀕死の重症を負った、と思ったら突如巷で噂の灰色の怪物になって自分達を助け出し、今脳無達と拳を交えている。

その戦い方もどこか気弱な雰囲気だった緑谷とは思えない程の苛烈な戦い方。相手の肉を抉り、骨を砕き、臓器を潰す。もつとも、やった傍から脳無達の肉体は再生しているので大したダメージにはなっていない様だが。

最初こそその様な戦い方で脳無たちを追い詰めていった。が、あの死柄木・黒霧の2人が戦いに加わると一気に動きが鈍った。決定的なタイミングでトドメを刺さず、少しでも敵が離れる素振りを見せたらその敵に攻撃を集中させる。まるで押し留めるような戦い方に、蛙吹はようやく合点がいった。

「私たちが??守っているの??緑谷ちゃん?」

「ど、どう言う事だよ!」

「緑谷ちゃんは??多分あんな姿になって半ば無意識になっても私たちを守ろうとしているのよ。さつきから敵<sup>ヴァイラン</sup>達を押し留めようとしているのはそれが理由なのよ」

「??ッ!あんな姿になってまで俺達を守ろうって言うのかよ??緑谷??!!」

なあ蛙吹!俺達が邪魔になってるんだったら早く逃げようぜ!ちやうど相澤先生もいるしよ!」

「ダメよ峰田ちゃん、素人の私達が動かしたら相澤先生が危険だわ。それに下手に動いたらそれこそ緑谷ちゃんの邪魔になっちゃう」

「くう??!!俺達は見てることしか出来ないってのかよ??!」

「悔しいけど??そう言う事ね」

何も出来ない悔しさから思わず歯噛みする2人。その間も緑谷は脳無達の攻撃を受けて消耗していく。そしてとうとう2号の拳が緑谷の腹に突き刺さった。

「UUUUUUUUaaaaあああああああああああああああ  
あっ!!」

「っ、緑谷ちゃんっ、!」

「お、おい緑谷!大丈夫か!」

「あ??、あすつ、つ雨ちゃんと、峰田くん??」

「良かった?何時もの緑谷ちゃんだわ」

「お、おお!戻ったんだな!」

吹き飛ばされた衝撃でオルフェノク体が解けてしまった緑谷。傷一つないその姿に安堵する蛙吹達。が、脅威が去った訳では無い。

「??仲間の無事を確認して安堵する、か。いいね、とてもヒーローらし











はタイガーオルフェノク、そして満身創痍の緑谷達とマリィ。タイガーオルフェノクは緑谷達に狙いを定めたのかゆつくりと迫ってくる。

「一難去つてまた一難所かしら」

「で、でも俺達にやこのデカいのがいるんだ！何とかなるって！」

『デカいのって???あの、期待されてるとこ悪いんですけど』

「へ？」

『さっきの戦闘で無茶しすぎたみたいで???もう1mmもボディが動きません☆』

「はああああああああ!!」

『いやー調子乗りすぎちゃいましたねー』

「ましたねー、じゃねーよ!!どうすんだよ俺あんなバケモンと戦えるような力ねえぞ!!」

こんな時までふざけるマリィに怒鳴る峰田。そんな2人(?)を見て立ち上がるうとするものが居た。緑谷だ。

「僕が時間を稼ぐ?!2人は相澤先生を?!」

「ダメよ！」

自分が囿になると言う緑谷に蛙吹が継り付く。その目には涙が浮かんでいる。

「緑谷ちゃん、さっき私を庇って死にかけたわ。こんな所に置いていたら今度こそ死んじゃうわ！」

「っ、でも誰かが残らなきゃみんな死ぬ!だった1番“個性”が戦闘向きな僕が適任だ。だから僕が」

「だったら私が残るわ」

「?えっ?」

「へっ?蛙吹何言ってる?」

「緑谷ちゃんは怪我人、峰田ちゃんは戦闘じゃない。だったら異形型の“個性”で身体能力も高い私が適任だわ」

「そんな事したら梅雨ちゃんが!」

「緑谷ちゃんを見捨てて助かるよりはマシよ。分かったら早く逃げて」

それだけ言つてタイガーオルフェノクに向かつて行く蛙吹。それを追いかけてようと駆け出す緑谷。が、途中で峰田に阻まれる。

「っ!? 峰田くん離して?! 早くしないと梅雨ちゃんが?!」

「ダメだっ! お前を行かせたら今度こそ死んじゃう!!」

「でも梅雨ちゃんが!!」

「蛙吹ならきつとプロヒーロー達が到着するまで持ち堪えられる! だから俺達に出来るのはアイツの邪魔をしない様にする事だけだ!」

『あのー、ちよつと良いですか?』

押し問答をする2人にマリーが声をかける。

『あれ、どう考えても持ちませんよね?』

そう言いながらマリーが見る方向に緑谷達も目を向ける。

—— 蛙吹が、血を流しながら倒れていた。

「つゆちゃん!!!」

「嘘だろおい!!!」

『あー?? やっぱ無理ですよねえ。普通の人間がオルフェノクに立ち向かおうだなんて無謀もいい所ですもん』

既にタイガーオルフェノクは蛙吹に目も向けずに此方に歩いてきている。どうやって蛙吹を助けるか、峰田や相澤をどうするか、そもそも相手になるのか、様々な考えが緑谷の頭を駆け抜ける。峰田は震えており、マリーは『んー』とか『あー』とか何事かをブツブツと呟いている。やがて緑谷が死ぬ気でタイガーオルフェノクを止めようと立ち向かおうとした時だった。

『—— 緑谷さん、でしたっけ?』

「え? うん。そうだけど?」

突如マリーが声を掛けてきた。その声音(?)は不自然なほど落ちて着いている。

『私の腰辺りにアタッシュケースが取り付けられてるはずですよ。それ取ってください』

「わ、分かったよ?」

不可解に思いながらも緑谷はマリーの腰辺りをまさぐる。やがてそれらしき物を発見し、そのアタッシュケースに示されているロゴに

驚愕した。

「SMART BRAIN??スマートブレイン!?あの謎の開発企業の!?」

『それについての説明は後にします。中に入っているベルトを腰につけてください』

「ベルト??これの事?」

ケースを開けるとなにやら様々な機械が詰まっております、中心に変わった形状のベルトが収まっている。言われた通りにそれを身につける。

『中にガラケー型のケータイがある筈です。それを』

マリーが言うガラケー。既に何百年も前の骨董品だ。物珍しさを感じながらそれを手に取る。

『変身コードは555。入力してEnterを押してください』

「こ、こう?」

『Code 555 Enter』

『Standingby』

「うわっ!」

フォンフォンフォン、とケータイから電子音が鳴り響く。驚く緑谷に対し、マリーはヤケに冷静だ。訳の分からない緑谷は軽くパニックだった。

『それを上に掲げて「変身っ!」って言うってからベルトに勢いよく挿入してください』

「そ、それいるの!?!ていっかなんなのこれ!?!」

『様式美です!やれば分かるんでとりあえずやってください!』

「ああもう!へ、変身っ!」

『Complete』

「う、うわああああ!」

瞬間、赤い閃光が周囲に放たれる。峰田は思わず悲鳴を上げ、何処と無くマリーは満足そうな雰囲気だ。タイガーオルフェノクは警戒しているのか歩みを止める。

やがて、光が晴れる。

そこには、黒いボディに銀色の胸部装甲、全身に走る赤のライン。  
そう、紛うことなきファイズだった。

「え、えええ!ここ、これって?ええええ!どうなってるの!」

『その鎧の名は“ファイズ”。オルフェノク??貴方達が“灰色の怪物”と呼んでいる者を倒す事が出来る鎧です』

「た、倒す??それにオルフェノク?って」

先程の夢を思い出して軽く動揺する緑谷。気付かずにマリーは続ける。

『私もファイズが作られた詳しい経緯とかは知りませんので。とりあえずそれならあのオルフェノクを倒す事が出来ます』

「っ!」

倒せる、そう聞いて体が引き締まったような錯覚に陥る。この場に置いての最適解、あのオルフェノクの撃破、それが出来る力が手に入った。ならば、

「僕が、やる?!」

タイガーオルフェノクを真正面に捉える。

「僕が??助ける!!」

一直線に、緑谷は駆け出した。

————— 数分後 セントラル広場

「————— A委員長飯田天哉!ただ今戻りました!!」

「————— もう大丈夫、私達が来た!!」

USJの扉をぶち破って飯田とオールマイト他英雄の教師を務めるプロヒーロー達が到着した。

「せ、せんせええええええええええええええええ!!」

彼らを迎えたのは峰田の雄叫び。オールマイトは峰田の元へ降り立つ。涙と鼻水でグシャグシャになった顔を、そつと抱き締めた。

「すまない、峰田少年。我々が遅れたせいで??」

オールマイトが顔を向けた方向には重症の相澤、13号、蛙吹、木場の手当をする1-Aの生徒達。その中に、自身が後継者と見定めた少年はいなかった。

「?緑谷少年は?」

最悪の場合が頭に浮かび上がり、それを必死に打ち消しながら峰田に聞く。

「ひっ、ひっぐ、みどりやがあ?!お、おれのせいでえ!!」

「峰田少年落ち着いて!緑谷少年に何があつたんだい?」

「ひぎっ、み、みどりやがあ——」

「——サイラン敵を殺しちゃまったんだ!!」

それは、最悪の報せだった。

## ヒーローとしての覚悟とは

——東京都内某所

「クソつ、話が違うぞ先生エ!!」

時は敵<sup>サイラン</sup>連合によるUSJ襲撃後、黒霧の“個性”で本拠地のバーへと帰還した死柄木はイラついた様子で声を上げる。

彼の気持ちは分からないでもない。オールマイトを殺害する為に万全の体制で望んだ今回の作戦、それを数人の生徒にぶち壊されたのだ。

ワープゲートから出て早々に馬鹿みたいな量の弾幕に晒され、レーザーヘッドを倒したと思ったら灰色の怪物に変貌した生徒の1人に苦戦させられ、拳句の果てに訳の分からないロボットに脳無1号が倒されてしまった。

しかも脳無2号まで灰色の怪物へと変貌してしまった。こんな滅茶苦茶な状況にも関わらずオールマイトは現れなかった。一体どうなってるんだ、訳が分からない。

『違う、かい?確かにオールマイトが弱体化しているとは言ったが仮にも平和の象徴、そう簡単に倒せる程甘くはないと言っていたはずだよ、弔』

“先生”と呼ばれた人物の声がモニターの液晶越しに聞こえる。状況を知っている者からすれば何を言ってるんだと言いたいくらいに的外れな返答だった。

「違う?違うぞ先生?!オールマイトにやられたんじゃない?!」

『まさか生徒に?それ程までに優秀という事なのかい?』

「優秀とかそんなんじゃない?っ!」

『??』

ヒステリックに叫ぶ死柄木の返答は要領を得ない。代わりに状況を話し始めたのは黒霧だ。

「USJ内の通信設備を無力化、内部に侵入した所までは問題ありませんでした。」

?しかしワープゲートから出たと同時に生徒の1人に攻撃を受け

まして??、これで多数のチンピラサイラン 敵がやられてしまいました。その後はいレイザーヘッドを撃破、生徒達を始末しようとしたのですが?、生徒の1人が灰色の怪物に変貌し、漸く倒したと思ったら今度はよく分からない人型のロボットのようなものに襲撃され脳無2号が吹き飛ばされ脳無1号がやられました。そうしたら今度は2号が灰色の怪物になってしまいました??。オマケに生徒の1人は仮面ライダーに変身して2号と戦い始める始末、とあまりに訳の分からない状況だったのでこうして撤退して来ました」

『??それは、どういう事だい?』

訳の分からない、といった声音の“先生”。荒唐無稽、とまでは行かないがそれでも真実とは思えない話。

いくら超人社会とはいえそんな事が現実起こりうるのか?と黎明期から長らく超人社会に巣食っていた“先生”は思う。初期のヒーロー達が誕生した頃からこの世界に生きてきた彼ですらそんな事は経験した事が無かった。

『——少し、いいだろうか』

と、モニターから“先生”とは違う別の男の声音が聞こえてきた。声からして20〜30程の成人男性だろう。

『なんだい、ドクター?随分と急じゃないか』

“ドクター”と呼ばれた男は特に感情を見せない声で続ける。

『衛星を使って撮影したUSJ内の映像だ。死柄木達の戦いぶりを見たいだろうと思って撮っておいた。ついでに目を付けて置いた方がいいと思つた生徒のピックアップもな』

『おお、それは有難いね。助かるよ、ドクター』

『構わん、それよりも内容が問題だ。私も先程確認したが流石に予想外だった』

画面の向こうでガサガサと何かを弄る様な音がする。やがて息を呑む様な音が聞こえ、それから暫くして“先生”は口を開いた。

『弔、黒霧。君達は集めたチンピラ達の中に“仮面ライダー”がいた事を把握していたかい?』

「は?」

「まさか??」

「おいおい、てことは “2人” も仮面ライダーがいたのか?あの場に?」

「いや、 “3人” だ。チンピラの方に居たライダーは雄英側のもう1人のライダーに殺られた」

死柄木の間違いを淡々と修正する。絶句する死柄木達。一体自分らは何と戦っていて何が敵だったんだろうか。自分達の状況があまりに意味不明カオスすぎて混乱してきた。

そんな中で口を開いたのはやはり “先生” だった。

『ドクター、彼らの素性は分かっているのかい?』

『勿論だとも、』

まず縮れ毛の少年が緑谷出久。特に秘密も何も無い平凡な家庭の生まれの無個性。そして恐らく現代のワン・フォー・オール』

『この少年がオールマイトの後継?確かなのかい?』

『先程も言ったがこの少年は “無個性” だ。表向きは遅咲きの “個性” となつているが虚偽だろう。そして彼の戦闘スタイルはオールマイトに酷似している。状況から見ても間違いあるまい』

『そうか???他の2人は?』

『少年の方は木場勇治。此方も一般家庭生まれの無個性。が、両親は事実上の育児放棄、ネグレクトというヤツだ。この両親は昨今の個性至上主義者と言われる者達だった様だ。その後、信じられん事に14歳で会社を設立している』

『へえ、この歳でか。それは凄いな』

『しかもその会社はあのS M A R T B R A I N社だ』

『何??あのS M A R T B R A I Nの?という事は彼が例の村上峽児か?』

『どうもそうらしい。未だに信じ難い事だが』

『??少女の方は?』

『名はアリア・ペンドラゴン。イギリスからの留学生らしいが地元の両親や親戚、その他交友関係は一切不明。私としては此方を警戒しておきたい所だ』



『殺しに一切躊躇が無く、経歴は不明??』

裏の人間か?』

『さあな。分かっている事は一つ、下手に彼女を嗅ぎ回れば命は無い。という事だ』

『これが今年の雄英??と言うワケか』

なんなんだこの異色の経歴は、見通しが甘かったと言わざるを得ない。確かに警戒はしていた。あのエンデヴァーやインゲニウムの身内が居ると聞いてかなりの人数を集めて事に当たらせた。にもかかわらず結果は惨敗だった。村上峽兎こと木場勇治は言わずもがな、緑谷出久とアリア・ペンドラゴン両名のようなダークホースが居る事に気付けなかったのは自分の落ち度だった。

これだけならまだ良い。いや、良くはないが許せない事は無かった。問題は脳無だ。

『ドクター、脳無達の調整は君に任せていたはずだが?』

『ああ、確かに。態々貴方の『個性』を使って完璧な無菌室を作り出し、細心の注意を払って作り上げた代物だ』

『それがどうして灰色の怪物などになるんだい?』

『さあな』

『先生』からの問いをバツサリ切り捨てるドクター。

『そもそも奴らが何故発生するのか、何が目的なのかもサツパリ分かっていない。私の上も分かっているのかいないのかは知らんが何も言わん。よって私から言える事は無い』

ドクターの言葉に考え込む『先生』。今後の事を考えているのか、そのまま数十分は言葉を発さなかった。ちなみに死柄木達は既にバーの席で酒を飲んでい。当然だがヤケ酒である。

『弔』

『??なんだよ』

『先生』からの呼びかけに不貞腐れた様に答える死柄木。酒が入っているせいもあって顔が少し赤かった。この子供っぽい性格を何とかしなければな、と思いつながら『先生』は言う。

『今回はハッキリ言って運が悪かっただけだ。何処かの破戒僧も言っ

ていたがこういう悪い出来事は所詮「間が悪かった」だけだ。

いいかい死柄木弔。君には力がある、今回の一件を糧にして君は更に成長出来るハズだ。

我々「悪」の存在を知らしめるためのシンボルとして、死柄木弔君という恐怖を世に知らしめろ!!』

「?? そうだ、 そうだよな。今回はあくまで偶然上手く行かなかっただけ、うん、なら問題ないよな? 次頑張ればいいんだから?」

「先生」の言葉を聞き、酒の力もあつて気分が上昇方向に乗ってきた死柄木。黒霧は無言、内心ではこの死柄木リィダーで大丈夫なのだろうかと不安を抱いているが。

『?? 相変わらず扇動が上手いな』

ポツリとドクターが呟くと同時に扉が開く様な音が聞こえる。画面の向こうでドクターが退出する所の様だ。

『おや、もう帰るのかい?』

『やられた分の脳無の補充と彼らの身辺調査を進めたい。死柄木への教育は私の管轄外なのでね』

『それもそうか。じゃあまたその内に。次はもっと良い報告を待っているよ』

『——ドクターフレンズ』

「??う、?あ??」

ここは、何処だろう?目が覚めると、目の前には真っ白な清潔感のある天井。

「知らない天井だ??」

「何を言ってるんだい緑谷少年??」

何となく言わなければならぬ様な気がした。てかオールマイト!?

僕が横になっっているベッドの隣にはオールマイトがトウルフフォームで椅子に腰掛けていた。何でここに?というか本当に僕はどこにいるんだ?

「ここは雄英の保健室さ。見覚えがあるだろう?」

「そう言えば戦闘訓練で怪我した時に来たような??」

確かによく見れば見覚えのある診察台、リカバリーガール仕様の小さな椅子などよくよく見ればここは雄英の保健室だ。

「でも何でこんな所に?」

「?その事だが少年、USJでの出来事を覚えているかい?」

「USJ?」

そうだ、僕達は救助訓練を行う為にUSJに行つて、そこで敵達の襲撃を受けたんだ。それで僕と峰田くんとあすつ、ゆちやんとで敵達を倒して、セントラル広場に戻ったら相澤先生がああ脳ミソ丸出しの敵にやられて??。

えつと??、そうだ、確か2号とか呼ばれてたもう一体の脳ミソ丸出し敵にやられたと思つたら変な声が聞こえてきて??確かオルフェノクの王だとか何とか言つてた気がする。

「思い出して来たかい?」

「はい?、そして僕がまたやられちゃって??それであのマリーとかいう人が敵の一体を倒して??」

それで、どうなった?おかしい、確かにその後何かが起こった記憶はある。なのに思い出せない。

「??ショックのあまり記憶を閉ざしてしまつたのか」





「目エ覚めたらお前が敵サイラン殺したとか聞いて飛んできたんだよ!! 一体何があつた!？」

驚いたなんてもんじゃない。目覚めたら警察関係者に事情聴取されて、皆の安否を聞いたら急に歯切れがわるくなつたもんで仕方なく白刃強要お願いしたら緑谷という生徒が敵を殺してしまつたらしい、とか言いやがるもんだから居場所を聞き出してすつ飛んできた。

出久が敵を殺す? 悪い冗談だ。虫すら殺せないような性格してんだぞ? 第一今の出久じゃあそこに居た敵サイラン達は殺せない。実力差があまりすぎる。

「???」  
「???」  
「???」  
「???」

「出久?」  
俺の問いかけに無言で俯く出久。いや、そんな、有り得ねえだろ? 「おいふざけんなよ!?! お前が殺しなんぞ出来るハズがねえ!?!? そうか! 誰か庇つてんだろ!?! それこそ爆豪辺りを「木場少年! そこまでだ!!」 つ? オールマイト! お前もお前だ! 何処で油売つてやがった!?!」  
「つ?! い、いや?!? 私はオールマイトでは?」

「どつくにネタは上がつてんだよ “八木俊典” !! テメエが出久にワンフォーオールを渡した事もなア!!」

あえて本名で呼ぶ事で逃げ場を無くす。出久も驚き顔だ。観念したのか静かに口を開く。

「?? 何処で知つた?」  
「今はそんな事どうでもいい。言ってみろやオールマイト。何で、テメエは、あの時USJに現れなかつた?」

活動限界のことは知っている。だがそれでもおかしい。少なくとも俺が偽天道を始末した時にはたどり着いていてもおかしくなかった。いくらなんでも遅すぎるのだ。

「テメエがオールフオーワンとの戦いで活動時間が限られてるのは知ってる。だとしても遅すぎるんだよ」

「??? これを見たまえ」

そう言つてシャツをめくるオールマイト。確かに傷はある。ただし原作よりも大きいサイズの代物が。

「オールフオーワンと、誰にやられた？」

動揺を隠し、務めて冷静に聞く。何故誰と聞いたのか？それは明らかに傷口が不自然だからだ。まるで1度治った傷をもう一度抉ったかの様な、と言えはわかるだろうか。

「??オールフオーワンを倒してから数年後の事だ」

やがてポツリとオールマイトは話し始める。それは、俺がこの世界において感じ続けていたオールマイトに対しての違和感の正体だった。

「あの日、私はいつもの様に通報を受け敵<sup>サイラン</sup>退治に向かった。その件自体はいつもの様に敵<sup>サイラン</sup>達を捕まえることで終わった。

——その時だ、襲撃を受けたのは」

「襲撃???アンタ程の実力者がアツサリ奇襲を受けたのか？」

「流石に私も信じられなかったよ。まるで瞬間移動??と言うよりまるで初めからそこに居たかの様な状態??、私は古傷を抉られ重傷を負った。

——朦朧とする意識の中、奴が名乗った名前だけは鮮明に覚えているよ」

オールマイト程の実力者を、簡単に倒す?そんな實力を持った人間そうそう居るはずが無い。それこそオールフオーワン、もしくは“他の世界の存在”でも無い限り。その結論が、答えだった。

「その人物の名は“クロノス”。世間を度々騒がせている仮面ライダーの1人だ」

——轟音。

??反射的に壁を殴ってしまった。俺の拳がある所から蜘蛛の巣状にヒビが広がる。パラパラと細かい破片が零れる中、俺は怒りがマグマの如く煮えたぎっているのを感じていた。

「何処まで俺をイラつかせりや気が済むんだ糞野郎共がア??ツ!!!」

なんてことは無い、鼻から全て奴らが原因だったのだ。クソ転生者が余計な事をしたせいで原作が崩壊した。いや、そんな事はどうでもいい。俺の、俺の最高の親友<sup>ダチ</sup>が傷付いた。憎しみで人が殺せるなら俺はそいつを軽く千回は殺してる。

そんな時でも、オールマイトは冷静だった。その姿を見て頭が冷える。

「?悪い、取り乱した。それで、それがあんたが遅れた理由か?」

「ああ、既に私の活動時間は1時間も無い??。緑谷少年に力を渡した事でそれも急速に縮まってしまっている」

「??そう、か。とりあえずは理解した。納得はしてねえがな」

「すまない??」

「俺に謝られても困るんだよ。」

??それで?出久が敵<sup>ヴィラン</sup>殺したつてのはどういうこつた?何があつた?」

「いや、緑谷少年も居るしここでは不味い。場所を変え」待ってください、オールマイト」??少年?」

「僕の夢を笑わないで、ずっと応援してくれた木場つちやんだからこそ、僕自身が言います。話させてください」

そうして出久はポツポツと語り出した。チンピラ達を倒した事、相澤先生と蛙吹を助けようとして重傷を負ったこと、その後オルフェノクの王がどうか聞いてオルフェノクになって戦って、マリーに助けられたと思つたら赤銅色の脳無がオルフェノクになって、ファイズを使つてそのオルフェノクを——殺した。

「木場つちちゃん、僕は——」

言い終わらないうちに、俺はオールマイトの胸倉を掴みあげていた。

「え、き、木場つちちゃん!」

「??オールマイト。今の人類の平均寿命はいくつか知ってるか?」

「??『個性』の影響もあつて、確か男女共に90代だったと記憶しているが?」

「60年だ」

「60??一体なんの「テメエらプロが遅れたせいで出久から奪った時間の数だ!!」

頭では理解している、この事態は俺が予め雄英側に伝えておけば起こらなかつたかもしれない事態だ。都合のいい怒りだつてのは分



かかってる。俺の油断が招いた事、それでも全てが終わってから現場に辿り着いたコイツらに怒りを覚えた。

「??オルフェノク、テメエらで言う灰色の怪物のつてのは極端な言い方をすれば “新人類” だ」

「新人類???彼らが?」

「そうだ。特定のトリガーを切っ掛けに全身の細胞が急速に進化、例外を除き自身の心の奥底にある “戦う姿” に自身を変化させ、個性持ちを圧倒する程のパワーをもつ、人間だ」

「特定のトリガー??」

「“死” だ」

「“っ!?”」

「何らかの要因で死んだ人間が、たまたまオルフェノクとして生き返る事がある。もしくはオルフェノクに殺された人間が生き返ってオルフェノクになる事がある。前者はオリジナルと呼ばれてその多くが高い戦闘能力を保持している。ちなみに俺は前者、高い身体能力はその恩恵だ」

ここで2人が驚いた顔をする。まさかのカミングアウトに衝撃を隠せないようだ。

「それで急激な “進化” ということが問題だ」

「??それだけ聞けばただのパワーアップに聞こえるが」

「1度死んだ人間を生き返らせるほどの再生力を持つ細胞への進化だぞ?それが数分の内に行われるんだ。結果、細胞は急速な劣化を始め、長くても20年ほどで完全に機能を停止する」

「停止とは??まさか!？」

「そう完全な “死” だ」

既に頭はパンク寸前だろう。が、まだまだ話さなければならぬ事は多い。

「そして俺が持っているライダーズギア、あれのオリジナルは元々オルフェノクの王を守る為に開発された鎧だ。それ故に基本はオルフェノクにしか使えねえ」

「王??それってもしかして??」

「信じ難いが??? そうだ、お前だよ出久。お前がこの世界における今代の王、アークオルフェノクって事だ」

「アークオルフェノク??」

——九死に一生を得た子供。それがアークオルフェノクの適性者。恐らく過去に何らかの要因で死にかけた事がある出久は、今回の件で瀕死の重傷を負った。焦ったのはアークオルフェノクの意識、原作で鈴木照夫の意識を乗っ取った存在だ。本来アークオルフェノクは他のオルフェノクを喰らって覚醒する。が、宿主が瀕死、さらに覚醒しようにもエネルギーが足りない。そこで出久の中にあつた代替エネルギー、ほぼ間違いなくワンフォーオールをオルフェノクの代わりとして吸収、覚醒したのだろう。

「出久。個性は使えるか?」

「え? うん、多分??? あれ?」

軽く握り拳をつくって、「個性」を発動しようとした出久。しかし何も起こらない。

「あ、あれ?? なんで?」

「??? とりあえず仮説だが」

俺は先程の仮説を話す。するとどうだ、みるみるうちに顔が青くなつていく2人。

「そ、そそそそれじゃあワンフォーオールは失われたと!」

「ほぼ間違いなくな」

「???」

「いかん緑谷少年大丈夫か!? 魂が抜けているぞ!」

??? そう言えば胸倉掴みあげたままだったな。こんなコントみたいなもん見せられれば気も抜ける。俺はオールマイトの胸倉を離し、近くの椅子に腰掛けた。

「出久、お前は どうしたい?」

「どうしたいって?」

「お前は敵を殺した。だからなんだ? その程度で諦めきれるほどお前のそれは安っぽい夢だったのか?」

「?? 程度ってなんだよ!!」

出久がベッドから飛び出して俺の胸倉を掴む。その顔は怒りか、悲しみか、色々なものが縋い交ぜになった顔だった。

「人を??人を殺したんだよ!?!犯罪者とはいえ人を!!」

「俺も殺したよ。オルフェノクの力を使ってな」

「え??」

「木場少年!?!どういうことだ!?!」

「例の偽ライダーがチンピラ共に紛れてやがってな。八百万辺りから聞いてねえのか?よりにもよって八百万を犯そうとしやがった。だから殺した」

「そんな???何でそんな簡単に人を殺せるんだよ!?!」

「奴が、許せなかったから。それだけだ」

「木場少年??キミは犯罪を犯しているという自覚があるのか?!?」

「殺し如きであーだこーだ言ってるからテメエらは進歩しねえんだよカスが!!」

反射的叫んでしまう。この世界の人間は「ヒーロー」<sup>ヴィラン</sup>という存在を意識しすぎているせいで殺しへの躊躇いが大きい(敵<sup>ヴィラン</sup>達は例外だが)。それが悲劇を増やすとも知らずに。

「ヒーローによる敵<sup>ヴィラン</sup>の殺害が認められない?頭沸いてんのかテメエらは。向こうはこつちを殺しに来てんだぞ?2年前のウォーターホースが良い例だ。殺しを禁ずるからああいふ犠牲者が増える。知ってるか?ウォーターホースには当時2、3歳の子供が居たんだ。殺しを解禁していれば出なかったかもしれない犠牲だ。わかるか?今のクソツタレな法律が1人の子供から両親を奪ったんだよ」

「??だが!そうだとしても!敵<sup>ヴィラン</sup>だつて人間だぞ!?!それを無闇に殺している理由なんてない!!」

「他人の痛みを知ろうともしないクズ共だ。殺して何が悪い?『生活のため』だとか『仕方なかった』なんてほざく奴もいる。けどどな、どんな形であれ人を傷付ける事に「仕方ない」なんてねえんだよ?!!」

そこまで言い切って一息つく。俺の言葉に絶句しているオールマイトを無視して出久に問いかけた。

「出久。お前には選択肢がある」

「??? 選択肢?」

「1つは『今回の事を一切忘却忘れて普通に過ごす』。もう1つは『殺しの咎を背負って生きていく』。俺としては1つ目がオススメだ」

「忘れるって??? そんな事出来るはずがないじゃないか!」

「なら、咎を背負うか? 殺しの咎を」

「っ!」

出久??? ここがお前の分岐点だ。

僕は??? どうすればいい? 敵を殺して、オルフェノクの王になって、寿命が長くても20年って言われて、親友の知らなかった一面を知って、そしてその親友から選択を迫られている。

即ち忘れるか、背負うか。忘れるなんて出来るはずがない。殺し——人の命を終わらせてしまった。そんな重い罪を忘れるなんて出来ない。背負う——僕なんかには、背負えるのか? あの敵にも意思があった。僕の知らないところでは家族が居たかもしれない。あの敵の恨みを、遺族の悲しみを、誰かの憎しみを、僕なんかは背負えるはずないじゃないか。

情けない事に僕は、そんな内心を、親友にぶつけてしまった。

「そんなっ??? 簡単に言うなよ!!」

「???」

「緑谷少年???」

木場つちちゃんは無言。オールナイトが静かに僕の名を呟いたのが聞こえた。

「あの敵にも家族が居たかもしれない!! 友達が居たかもしれない!! もしかしたら改心して、輝かしい未来が待っていたかもしれない!!!」

——その全てを僕は奪ったんだ!!」

「お前がアイツを殺していなければ蛙吹や峰田、相澤先生も死んでい

たぞ？第一アイツは改造人間だ。もう二度と元の姿には戻れない」

「だからなんだよっ!?それでもっ!もしかしたら元に戻れたかもしれないだろっ!?相澤先生達が助かったのだって結果論だ!あの時僕一人が残って足止めしておけばあの敵も死サイランなずにすんだかも知れない!梅雨ちゃんも傷付かなかったかも知れない!!全部僕が原因で皆を傷付けたんだ!!」

「??テメエそれこそオールマイトにでもなったつもりか?お前如きがんなこと出来るわけねえだろうが!!」

「わかんないじゃないか!!もしかしたら本当にそうなったかもしれないだろ!!」

「たればの話なんぞ聞いてんじゃねえんだよ!!」

「このわからず屋!!」

「どつちが!!」

いつの間にか互いに胸倉を掴みあつて叫んでいた。僕が言えば木場っちゃんと言い返す。木場っちゃんが言えば僕が言い返す。その繰り返し。

いつしか話しは敵サイランの事ではなく、互いの悪い所の言い合い合戦になつていた。

「だいたい木場っちゃんはいつもそうだ!!天才肌でなんでも出来るからってそれを他人にも押し付けて!!」

「ああ!?なーにが天才肌だボケが!俺の身体能力はオルフェノク化の影響だし頭に関しては純粋な努力の結晶だバーカ!!出久だっってヒーローのことに関しては人の事言えねえだろ!!語り始めたと思ったら丸一日中話し続けやがって!!」

「聞いてもいないアイテムのシステムの話を延々と続ける木場っちゃんよりはマシだ!!それに成績は僕の方が上だ!!バカはそつちだろバーカ!!」

「んだとこのっ?!バーカ!!バーカ!!」

「なにをっ?!バーカ!!バーカ!!」

「バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!バーカ!!」

カ!!バーク!!バーク!!バーク!!」

この時は、忘れるだとか背負うだとかどうでも良くて、純粹に木場つちゃんにムカついていた。僕は、いろんな意味で僕に近しくて、それでいてあらゆる面で僕の先を行っていた木場つちゃんに嫉妬していたんだと思う。そして多分、ヒーローへの思いを素直に晒しきれなかった木場つちゃんも、そう言う意味では僕に嫉妬していたんだろう。まるで子供の様にバカバカ言い合った僕らは、しばらくして漸く止まった。お互いに息を切らせながら。ぜえぜえ、と息を漏らしながらも罵倒を止めなかった結果だ。

「ふ、2人とも??とりあえず落ち着こうか??ね?ね?」

オールマイトはなんとというか、反応に困ったように話しかけて来た。

僕達はゆつくりと息を落ち着かせ、そして呼吸が整ってから顔を合わせる。

「出久、もう一度聞く。お前は、どうしたい?」

「?木場つちゃんは、どうすればいいと思うの?」

「?あ?」

「僕は罪を背負える程強くない。だけど忘れられるほど凶たくもない。

——ねえ、木場つちゃん。僕は、どうするのが正解なんだと思う?」

卑怯な質問だと思う。こんな問いを問いかけられても困るだけだとわかつている。でもそんな事を問われた木場つちゃんは——  
笑った。

「??こいつは俺の好きな漫画のキャラが言ってたことなんだがな」

「え、ま、漫画?」

思わず面食らう。何でここで漫画の話?

「とりあえず聞け。曰く、〃大切なのはどうすればいいかじゃない、どうしたいかだ〃ってな。こんな状況で漫画の台詞に頼るのもどうかと思うんだが??まあ気にすんな」

「大切なのは??どうしたいか」

「そうだ、出久。お前はもうどうしたい？」

僕は、僕は——

「さつきも言ったけど、僕は背負えるほど強くも無いし、忘れられるほど凶太くもない」

「??ああ」

「でも??、いずれ背負える程強くなれる日まで——この罪は、引きずってでも持つていく」

「それが、答えか」

「うん」

情けないけど、これが僕の精一杯の選択。弱い僕なりの、僕が出来ることだ。

「??なら俺が言うことは何も無いよ」

そう言つて椅子から立つ木場つちゃん。そのまま背を向けて保健室から出ようと——

「??ハッ!?ちよ!?待つんだ木場少年!!」

——瞬時にマッスルフォームになったオールマイトに捕ま

た。

「??チツ、なんだよ良い感じで終わろうとしてたのに」

「だからといって君が敵のライダーを殺した件についてはチャラになつた訳ではないからな!」

「バカ、第一俺と出久は罪に問われねえよ」

「??へっ?」

間拔けな声が2つ。僕とオールマイトだ。木場つちゃんはマジで気付いてなかったのかと声を漏らし、呆れ顔で説明してくれた。

「俺達は未成年かつヒーロー資格を持っていない。で、敵を殺した件は個性を使っていたら別だが出久も俺も個性を使った訳じゃない。

つまり——」

「つまり?」

「——今回の件はただの正当防衛の結果、ということ処理される可能性が高い。」

——な?警察さんよ」

「??気付かれてたか」

木場つちやんが扉の方へ声を掛けると、特徴の薄い顔のコートを羽織った男性が入って来た。

「つ、塚内くん!」

「え、知り合い何ですかオールマイト?」

「昔から仲のいい刑事だよ。色々世話になったんだ」

「やあ、久しぶりオールマイト。そして2人は初めましてだな。警視庁の塚内直正だ」

「ど、どうも?」

「ウツス。で?どこから聞いてたんすか?」

「うーん、ぶつちやけ最初から最後まで?」

「??俺と出久の言い合いも見てたんすか?趣味悪いですよ」

「ハツハツハ、いやー若いつて良いねえ」

「誤魔化すんじゃないよ」

あ、結構早く敬語が崩れた。基本大体の人にはタメ口だからこれでも持った方だろうけど。

「てことはオルフェノクの下りも聞いてたのか?」

「うん、まあね」

「じゃあ話は早い。警察経由でオルフェノクの情報をマスコミにリークしてくれ。台本は俺が書く」

「おや、それはまたどうして?」

「あのなあ??今後やむをえずオルフェノクを使う度に灰色の怪物だのなんだの言われるのが面倒なんだよ。加えて出久は今個性が使えない。使える様にして置くのは当然だろ?」

「ふむ??僕としては賛成だけど、上がなんというかねえ」

「??チツ、面倒だがウチの会社から圧力を掛けておく。それで素通りすんだろ」

「会社??キミはどこかの企業に所属しているのかい?」

「企業??あー、そーいやUSJにアタッシユケースが転がってなかったか?ロゴ入りの」

「アタッシユケース??あああれか。確かアタッシユケースとメカメカ



しいベルトが現場に落ちていて、サディーと名乗るバイクが例のマ  
リー諸共回収して行つたつて聞いてるけど?」

「んー??、じやいや。そのうち分かるから今は知らんでもいいだ  
ろ」

「えー、そう言わずに教えてくれよ」

「えーじやねーんだよえーじや??。それで結局どうなんだよ。俺達の  
件は?」

「んー?、多分無かつたことにされるんじゃない? 今回の件は英雄側  
としても警察側としても隠したい大失態だろうしね」

「流石大人汚い」

「君が言えたことじやない気がするけどね、ハツハツハ!」

「??笑う様なことか?」

「なんとというか、その、

「先程の騒ぎが嘘みたいだねえ?」

「ですな?」

オールマイトの呟きに苦笑しながら返す。ある意味木場つちゃん  
らしく、ある意味僕らしいのかも知れない。

——僕は、罪を背負う程の強さを持っていない。だから、

(強く、なろう)

それが、僕をしたい事なのだから。

ドキツ☆拳だらけの猛特訓！〜（命が）ポロリもあるよ！〜

さて、そんなこんなでUSJ襲撃から2日後、てか今。今日も俺と出久、そしてアリアのいつもの3人での登校だ。で、今扉の前にいるんだが、

「ほ、本当に大丈夫かなあ???」

うん、まああんな事があり顔を合わせづらい訳ですよ。主に出久。俺と違ってバツチリサイン敵殺つたの見られてる訳だし。つつても、

「ういーす、おはよーさん」ガラッ

「ちよっ!」

「相変わらずのマイペースだねえ?」

このままじゃ埒が明かないので迷わず行くんだが。出久の困惑したような声とアリアのブーメランを背に受けながら教室に入る。皆は俺達を見てポカンとしていた。

「おう、皆元気そうじゃ」木場あああああああ!!!」うおっ!」

普通に声掛けたら上鳴が飛びついてきたアっ!」

「フンっ!」

「ふぼっ!」

「「「あっ?」」」

「あ」

??やべえ。いきなりすっ飛んで来るもんだから反射的に殴っちまった。上鳴は俺のアップパーカートを顎に受け綺麗に吹っ飛んでいった。そのままピクリとも動かない。え、うそ、死んだ?

「いきなり何しやがんだよオイイイ!」

あ、生きてた。

「いやいきなり野郎が飛びついてきたらそりや殴るだろ?」

「なんだよそれっ!」こっちは心配してやってんのに!」

「心配?俺なんかやったか?」



マトみたいだな。

「あ、あああああああすつ、ゆちちゃん!」

「??良かったわ、本当に生きててくれて??」

そう言う蛙吹の目からはポロポロと涙が零れていた。

「私達を守るために大怪我して?つ、私達を守るために矢面に立って戦って?つ、起きてから意識不明って聞いた時は、死んじやうかもつて?っ!不安で、不安で?!」

「梅雨ちゃん??でも、僕は」

「??知ってるわ、アナタがあサイランの敵を殺した事」

「なら、何で??」

??そりや当然の疑問だろうさ。大して付き合いも長くねえ相手にここまで心配されるんだから。ましてや自分はどんな事情があれど人殺し。ここまで親身になる必要が無い。

「——アナタに、救われたんだもの」

蛙吹の答えは、それだけだった。たった一言のシンプルな回答。しかし、それが全てだった。

「僕に?救われた?」

「どんな形であれアナタは私達を救ったわ。誰がなんと言おうとその事実は変わらないもの。アナタの味方をする理由はそれだけで充分よ」

「梅雨ちゃん??」

??あー、うん。良い雰囲気作つてるとこ悪いんだけどな?

「二人共、周り」

「え」

「??あ」

「」「」「(無言のニマニマ)」「」「」

「ほああああああああああああああああああああ!!」

「ッ、ツツ~~~~~~~~／／!!」

皆の微笑ましいものを見るかのような視線に耐えきれず飛び退く2人。今更ながらに自分が何をしてたのかを理解した蛙吹は真っ赤になって俯いている。かわいい。

「出久、式には呼べよ?」

「式つ!? きききききききき気が早いよ木場っちゃんっ!?」

「ほう? 『早い』って事はそのうち呼んでくれるのか?」

「ツツツ~~~~~~~~!!」

やばい楽しい。てかシリアスな空気どこ行っただけ? もつとこう、重苦しくて心が痛くなる展開を想像してただけ。

「??何やってるお前ら」

ってそうこうしてる内に相澤先生ミイラVer. キターーっ!?

「あ、相澤先生!? もう大丈夫なんですか!?」

「その事についてはいい。てかはよ席につけ」

「は、はい!」

??なんかあなあで終わっちゃったな。後で話とかねえと。

「さて、とりあえずは敵<sup>サイラン</sup>達の襲撃をよく生き残った、と言っておくが、緑谷、そして木場」

あー、やっぱ呼ばれるよな。間違いなくあの件だろう。

「??はい」

「ウイツス」

「お前らは自分がやった事の重大さを理解しているか?」

「??はい」

「生憎と反省も後悔もしてません」

「??ほう?」

「き、木場っちゃん?」

「俺があの場合で行動を起こさなけりゃ八百万達がどんな目に遭ったかなんざ想像つく。ついでに言えば下手に野放しにしてりや余計に死人が増えていた可能性が高い。だから殺したただけだ」

——ざわり、と教室にどよめきが広がる。相澤先生はそれを一睨みで沈めると俺に向き直った。

「お前は、それが人としての論理に外れた行為だということは理解しているのか?」

「論理? そんな大衆が決めただけのくだらねえ縛りを気にして人が救えるかよ」

「だが事実、世間的にはその様な事をしなくてもヒーロー達は人を救っているが？」

「アングラヒーロー・イレイザーヘッドともあろう者が何を言っている？ 敵による凶悪事件の裏を渡ってきたあんたの事だ。テレビで放映されてるようなガワの内側なんぞ百も承知だろうが。『殺し』を専門にする始末屋がヒーロー内に紛れてる事を知らねえとは言わせねえぞ」

光ある所に闇がある。これはある意味どんな世界、どんな次元であれ共通の事情だ。表向き、人々から喝采を浴びるヒーローがいれば、裏で救いようがない敵を始末する正義の味方がいる。助けられた人々の裏には、殉職したヒーローや救えなかった人達がいる。

どんな綺麗な世界も、必ず汚い部分が存在する。目の前にいるのはそんな場所に居た人間だ。俺の言う事もわかっているのだろう。

「？お前何者だ？その年で何故裏の事情にそれ程詳しい？」

「さあな。一週間後にもわかるさ」

それだけ言っただけで席に着く。出久はどうすればいいか解らさずかなりオロオロしていたが相澤先生に言われて席に着いた。

「さて、話がズレたが？『雄英体育祭』が迫っている」

「「「「っ！」」」」

あり？何で皆静か？ってあんな話すりゃこんなテンションになるわな。

「せ、先生？」

そして原作に無かつはずの出来事。上鳴が手を挙げていた。

「なんだ」

「その、仮にも俺達敵の襲撃にあつてる訳ですよ？重傷者も出てるし、このタイミングでまた襲撃されでもしたら？。それなら寧ろ中止にした方がいいんじゃないすか？」

上鳴の言葉に頷く者が数名。予想していた事態だったのだろう相澤先生は淀みなく答えた。

「その点は抜かりない。例年の5倍以上の警備体制を敷いている。あの襲撃があつたからこそ雄英は健在、という事を示すのが目的だ。そ

れにプロにスカウトされる為の絶好の好機だぞ？言い方は悪いがこの程度で中止に出来るほど小さい行事じゃない」

「そう??すか。分かりました?」

「それで、だ。今も言ったが雄英体育祭はお前達がプロに気に入られる為の3回しかない絶好の機会だ。ヒーローを志すなら乗り越えていけ。以上だ」

「そう言つてHRを締めくくる相澤先生。さて、俺はどう説明するかね?」

「その、木場。さっきの話だけだよ?」

「ん、まあ何となく察しはついてると思うが殺つたのはあのクソ野郎だよ」

HRが終わり、いの一番組に話しかけてきたのは上鳴。俺はそれに、あくまでもなんて事は無いように答える。

「俺らの、せいかな?俺らがあっさりやられてお前の足引つ張つちまつたから??」

「ああ、違う違う。元々殺すつもりだったしな」

遠巻きにこちらを見ている面子が目を見張ったのが見えた。上鳴は信じられないと言いたげな面持ちだ。

「上鳴。お前の??そうだな、命よりも大切な、とは言わんが最も大切にしている信念や誇り??そういういったものが目の前で穢されてたらどうする?」

「大切な???って言われても??、殴つちまうとかか?」

「そういう事だ。あのクソは俺の目の前で俺の憧れを穢し、誇りを踏みにじった。それこそ殺したいほどの憎悪を抱いてすらいたよ。事実殺したんだが」

「そう言つて俺は他のクラスメイトに目を向ける。」

「お前らも覚えとけよ。何かを守りたいなら自分の何かを捨てなきや

ならねえ。俺はそれが殺しへの躊躇いだったってだけだ」

——放課後

「??うるせえ」

「教室の外が騒がしいねえ」

クソみたいに辛気臭い空気の中（全部俺のせいなんだが）で今日の授業を消化した放課後。教室の外がザワザワとすんげえ騒がしい。そういや雄英体育祭前にこんなシーンあったなあ。『実戦知らねえガキが何ほざいてんだカスwww』とか思いながら見てたのが懐かしいわ。

「あれあれえ？<sup>ヴァイラン</sup> 敵襲撃を切り抜けたとか言われてるのに随分と辛気臭いねえ？」

「おい何か来たぞ」

「確か？物間寧人だっけ？」

「ああ、あのウザイヤつね」

物間寧人——ヒーロー科B組についてのリーダー的存在だったやつ。何かとA組こと原作メイン勢を目の敵にしており、ハッキリ言って好きになれないタイプのキャラだった。こいつの煽りがまあウザイ事ウザイ事。実際受けてたら殴ってたと思う。

「ホントさあ？良いよねえA組は。他クラスよりも多めに授業受けられて。入学式も担任公認でサボりとは恐れ入ったよ！どれだけ神経図太いんだろうね？」

それ俺らじゃなくて相澤先生<sup>たんにん</sup>に言えよ。公認っーか今後の学校生活かかかってる体力テスト受けさせられたんだよ。寧ろ迷惑してんだよ。

「拳句の果てに敵襲撃<sup>ヴァイラン</sup>を切り抜けて一躍英雄扱いだ！全く、流石A組だ。調子に乗って足を掬われなきやいいけどねえ？」



「アリア、そろそろキレてもいいか？」

「うーん、もうちよい待って。ボロ出してからコテンパンに論破したいから」

えーマジかよ。今でも拳が出ないように必死に抑えてんのに。

物間寧人がペチャクチャと煽りを入れる間、皆は静かだった。あの爆豪ですら聞き流し、と言うより何かを考えているようで耳に入っていないらしい。そんな皆の様子が気に入らないのか物間の煽りはさらにヒートアップする。

「さつきからさあ??何で誰も何も言わないんだ?そんな陰気な雰囲気漂わせてさあ??。はあ??何?誰か死にでもしたの?あ、じゃあ御葬式?ゴメンね察せなくて——」

——次の瞬間にはA組クラス内は文字通り爆ぜていた。

「??え」

発生源その1は当然ながら俺。この糞があまりにも舐め腐った事を抜かしやがるもんだから思わず机を殴ってぶっ壊しちまった。

「??黙れよ」

そして発生源その2は出久。あいつの足から蜘蛛の巣状に床にヒビが広がっていた。出久は普段決して発することの無い、低い声を発しながら物間の胸倉を掴み、持ち上げる。

「う、わあ、ああ?っ!」

「何も知らない癖に??簡単に死んだとか言うな?っ!!」

「??出久、そこまでにしとけ」

先に出久がブチ切れたお陰で頭が冷えた。俺は呆然とする皆をそのままに出久を止める。出久は何か言いたげだったが、俺が「下ろしてやれ」と言うのと素直に物間を下ろした。俺は青い顔をしている物間に顔を近づける。

「良かったな、お前の近くに居たのが出久で」

「?は、な、な、にを」

「俺ならテメエの頭を砕いてた自信がある」

「サアーツと物間の顔から血の気が引いていく。自分がやってた事の危うさを理解したようだ。」

「生憎とな、俺達が切り抜けたのは襲撃じゃなくて殺し合いだ。命の危機を自分の意思で乗り越える勇氣もねえなら引っ込んでる糞ガキ」  
「それだけ言っただけで物間をクラス外の連中に押し付ける。ああ全く、今日は本当にクソみたいな日だ。」

「???'」

ふと視線を感じ外の連中を見やる。目の下のクマが酷い、ボサボサの紫髪の男と目が合った。

「???'」

何故かは分からない。でも、そいつからは——同類の気配がした。

——木場宅 私有地

「——つー訳で特訓だ!」

「いやどうゆう訳!」

ん?今どこに居るかって?上見ろ上、俺の家の私有地の森だよ。なんでそんなもん持つてるのか?特に使い道も無いバカでかい土地を研究用に買い取ったんだよ。お陰でライダーズギア製作は誰にも見られること無く極秘に行えたぜ。

「いやな?雄英体育祭があるわけだろ?ならそれに向けて特訓しようかなって」

「だからって学校帰りに攫うように連れて来なくても??」

「自分で作つといてなんだけどクラス内の空気に耐えきれませんでした、ハイ」

「完全に自業自得じゃないかっ!？」

いや、ね?メンタルとか色々もう、ね?戸惑いと恐怖となんか色々混ぜた複雑な感情向けられ続けてヤバかった訳ですよ。主に俺が。そこで特訓をダシにして出久を連れ出した、てのもあるが1番の目的は別にある。

「お前の特訓だよ出久」

「僕の?」

「ああ、お前はオルフェノクに覚醒した。が、その影響でワンフオーオールが使えなくなつた、ここまではいいな?」

「うん?、あ、そう言えば木場つちゃんつてどこでオールマイトの秘密の事知つたの?ヒーロー業界でも一部の人しか知らないらしいんだけど?」

「ん、それを説明する為にも先ずはこれを見てくれ」

そう言つて俺は持つてきた2つのアタッシュケースに刻まれているロゴを出久に見せる。

「!それ??S M A R T B R A I N社の?」

「詳しくは言えないが俺はその関係者でな。諸事情あつてこいつのスーツアクターをやつてる」

「スーツ??てことはまさか?」

「そうだ、お前がオルフェノクを倒した時に使つたアレも同じ代物だ」  
それを聞いて苦い顔をする出久。思い出したくは無いだろうが説明する為にも避けては通れないので我慢してもらおう。

「で、だ。そんなツテもあつてヒーロー業界の裏には詳しくてな。オールマイトの事や昼間の始末屋の件もここで知つた」

オールマイトの事は初めから知つていだが始末屋関連の事は本当に会社関連の付き合いいで初めて知つた。予想はしていなかった訳じゃないが流石に驚いたもんである。リアルでダークヒーローが居るとかマジかよ、つて感じだった。

「話を戻すぞ——俺が使つてるのもそうだがお前が使つたスーツ

とオルフェノクには密接な関係があるんだ。なんだと思う?」

「??対オルフェノク、もしくはそれに準ずる量産出来るパワードスーツ?」

へえ、鼻からその考えが出るなんてやるじゃないか。それもある意味正しい使い方だ。

「使い方としては決して間違いでは無いが??不正解だ。」

正確にはオルフェノクの王——つまりアークオルフェノクを守る為の鎧、それがオリジナルのライダーズギアの使用目的だ」

「王を??守る?アークオルフェノクって戦闘能力はさほど高くはないの?」

「いや、寧ろ全オルフェノク中最強と言っても過言じゃない程のオルフェノクだ。??ここからは俺の仮説なんだが、恐らくアークオルフェノクの特異性故に覚醒前の王を守る必要があるんだろうさ」

「他のオルフェノクに何か影響を及ぼす力ってこと?」

「流石、頭の回転が早いな。」

?アークオルフェノクは他のオルフェノクを “不死” にする力を持っているんだ」

「ふ??し??不死!」

「どういう原理でどうなるのかは俺も知らん。分かっているのは人間としての姿を捨てて不死になるってだけだ」

原作でも描写されてる様子は無いしパラロスではそもそもアークオルフェノクが影も形も無い。

「と言ってもお前がアークオルフェノク本来の力を有しているのかは分からん。そもそも本来アークオルフェノクは他のオルフェノクを喰らい吸収して覚醒するんだ。お前のソレはワンフォーオールを代替エネルギーとして強制的に覚醒しただけだからな。そもそもアークオルフェノクと言えるのかすら怪しい」

「??つまりは僕がアークオルフェノクとして覚醒したのはイレギュラーが重なった結果って事?」

「ん、そう言う事だ。だけどイレギュラーだからって使いこなせないのはいただけない」

「だからこその特訓??て事なの?」

「そう言う事???ま、とりあえずこれはお前に預けとくよ」

そう言うって俺はアタツシユケースを出久に差し出す。中身はファイズギアである。最初出久は?を顔に浮かべていたが中を見ると険しい顔つきになる。

「これ??あの時の」

「お前が使ったっていうファイズギアだ。全ライダーズギア中でも出力は最も低いがその分アタツチメントなどの武装が豊富なテクニク型のスーツ。コイツをお前に任せたい」

「何で?僕に?」

「言ったら、〃王を守る鎧〃だってな。それに狭い屋内や人の多い広場じゃオルフェノクとしての力は振るいにくい???だからそいつはリミッター兼護身用の武器つとこだ」

後ぶっちゃけオルフェノクにしか使えないので使わずに腐らせて置くくらいなら信用出来るやつに扱ってもらおう方が良いしな。

「???さて、そろそろかな?」

「出久、それ付ける」

「へ?何でまた?」

「良いから早くしとけ」

言いながらカイザギアを装着する。それを見て出久も疑問を顔に貼り付けながらファイズギアを装着する。

『Code 913 Enter』

『Code 555 Enter』

『Standingby』

「変身」

「へ、変身!」

『Complete』

俺達をそれぞれ二色の閃光が包み、カイザとファイズへと変える。何でこんなことを?と皆思ってることだろう。その理由なんだ

が――

——ヒュン！ヒュンヒュン！

「——つと来なすつたか!!」

「へ？つとほああああああ!!?」

風きり音が聞こえ、それを脳が認識する前にその場から飛び退く。出久は動かなかつたがその場でヘンテコポーズを取りながら何とか飛んできた剣を躲していた。スゲーなおい。なんかエジプトの象形文字みたいになってんぞ。

「なっ、ななな何がっ!？」

「あー???オカンの仕業か。こりやヤベエな」

「お、オカンって!?!てか何この剣!?!」

「——そりやお前、木場の坊主に頼まれた修行の一環さ」

突如聞こえてきた声と共に、森の奥から浅黒い肌の上裸マツチヨが現れた。

「げっ!?!ベオのおっさん!!」

「よう坊主！聞いたぜ、なんでもダチを鍛えるついでに自分も思いつきり厳しく鍛えて欲しいんだってな?」

「アリアアアああああああああああああああああああああ!!?!」

あんの野郎!?!確かに出久の修行がてら俺も鍛えたいから誰か呼んでくれとは言ったがなんでステゴロ凄女マルタの姉さんと並ぶグラップレー呼んでくれちゃってんの!?!この人手加減とか出来ないから避けてたのに!?!

「ちよ、ま、木、場、つ、ちやああああああああああん!!?」

助けてええええええええええ!!?」

つて、出久の周りが剣山みたいになってる!?!オカンまで張り切り過ぎだろ!!!

「出久!!」

「木場っちゃん!!」

「死ぬなよ!!」

「木場っちゃん!!?」

「さて、木場の坊主は純粹に戦闘能力の向上、向こうの坊主はおるか？おるふえのく？とやらの体とフェイスに慣れるのを最優先??だったか？」

ベオのおっさんことベオウルフはバキバキと拳を鳴らしながらすんげえイイ笑顔で近づいてくる。まって、待って待って待って。何でオーラ纏ってんの？それ明らかに源流闘争グレンデルバスターの時のやつだよ？え、死ぬの？てか俺死ぬよ？

「要するに俺がお前を殴って蹴って、それにお前が反撃すりゃいいだけの話さ。簡単だろ？」

んじやまあ???行くぜオラアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「あんぎやああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

この時!!!俺の頭の中はひとつの事でいっぱいだった。

ろす  
———あとでありあぶっこ

結局この後夜中までしごかれたそうな——

# 動き出すSMARTBRAIN 体育祭への仕込み

——東京都内 MAXICIMAM・SUPPORT・COMPANY本社ビル 会見会場

「——この度、我がMSCはSMARTBRAIN社に吸収合併される事が決定致しました」

マスコミ関係者を集め発表されたその情報は、日本どころか世界中に衝撃を与えるものだった。

MSC——正式名称をMAXICIMAM・SUPPORT・COMPANY。この会社はの始まりは丁度100年前、『ヒーロー』という概念が黎明期をえて漸く大衆へと定着してきた時期に創業された、未だ個性持ちへの差別が残る当時としては珍しい『ヒーローのサポート』を経営理念とした会社だった。

創業者は当時ヒーローに助けられた経験を持つ獅子金源治氏。彼は幼い頃ヒーローに救われた経験があり、後年、彼はヒーローの助けになりたい一心で会社を設立したのだと語った。

そして現在、社長は3代目の獅子金源氏。身長2mを越す巨漢である。彼は元プロヒーローであり、その豊富な経験を生かし先代と先々代が築いた会社を更に盛り立て、海外進出を果たし、ついにはMSCを『日本一のサポートアイテム会社』と呼ばれる迄に成長させた男である。

そんな男の口から放たれた言葉なのだ、人々を震撼させたのも無理は無いだろう。

「そつ、それは御社がSMARTBRAIN社の傘下に入るといふことですか!？」

「いえ、先程も言いました通り“吸収合併”です。MSCは本日より消滅し、従業員達はSMARTBRAIN社預かりとなります。その後どうするかは彼ら次第ですが」

記者の言葉を淡々と訂正する獅子金氏。そう、あくまでも吸収合



併、下に着く訳では無いのだ。

では彼らが言うSMARTBRAIN社とは何か？

——SMARTBRAIN。それはほんの数年前までは、MSCに自社のアイテムを売り込んで来ただけ零細企業だった。持ち込まれたアイテムの名は『トリモチランチャー』。極限まで圧縮されたトリモチを敵に放ち拘束する、要するに拘束用の射撃型武装だった。似たようなアイテムにMSC製の『セメントガン』があるがハッキリ言ってトリモチランチャーとの差は歴然だった。

その性質上、弾丸の小さいセメントガンは対象を拘束するのにある程度弾丸を撃ち込まなければならぬ。対してトリモチランチャーは1発で大型の敵<sup>サイラン</sup>だろうと対象のほぼ全身を覆うことが出来た。しかもコストはセメントガン以下である。

これを採用しないほど、獅子金氏は馬鹿ではない。即座に採用通知をSB社に送り、今後もアイテムを自社で開発して欲しいとまでわざわざ自ら電話で言った程だ。電話に対応したのはSB社の社長にして唯一の従業員の村上峽児という男だった。彼は今後もアイテムをMSCで開発する事を約束、今までにない数多くのアイテムを開発し、僅か半年でMSCの開発部長にまで上り詰めた。それと同時に瞬く間にMSCの重役へと上り詰めたSB社は業界内外を問わず一躍有名になったのだ。

——そこからだ、おかしくなったのは。先ず時間が経つにつれMSCの商品が売れなくなった。正確にはSB社が開発したもので外が売れなくなったのだ。原因は純粋な性能差、そしてアイテムの多様性。MSCは村上峽児という男一人に、技術も独創性も劣っていた。村上本人に悪気は無いだろう（断言してもいいが無い）。ただ彼はMSCを利用して高みへと登ろうとしただけだ。その結果がこれだった。

会社自体に傷はない。ただ社の技術者達はそうでは無かった。打倒村上峽児を掲げ、敗れ、村上峽児と自分達の差に絶望して社を去るものが後を絶たなかった。気付けば社の株も7割以上を村上個人が所有しており、村上本人の発言力は社長である獅子金すら上回ってい

たのだ。

最早、MSCはこの時点で事実上の壊滅だったと言っても過言ではない。外側は今まで以上に立派に、内側は村上という腫瘍によって食い荒らされていたのだ。

——と、まあ村上峽児について散々に言った訳だが、獅子金本人は村上の事を嫌っている訳では無い。より優れたものが大衆に好まれるのは当然の事、自社を去った技術者達については“その程度”あったことに寧ろ失望している程だ。

技術者達の多くは、『自分たちも誰かを救いたい』と語ってこの社に入った者達だ。誰かの助けるために、自分の技術を使いたい、と。それがあっさりと辞めて行って閉まったことに酷く失望し、落胆した。

——お前達の思いはその程度だったのか。

これが獅子金の偽らざる本心である。彼はこの先、SB社の更なる発展を祈り、自社のコネクションと勢力を全てSB社に受け継がせんとこの場を設けたのだ。

「何故唐突に合併などを!？」

「御社を去った技術者達からは『社長は騙されている!』とのコメントがあります。その所は!？」

「社長自身は今後どうするのでしようか!!？」

「最早この国にMSCは必要無いと判断した迄、SB社は今後のサポート業界を背負ってゆけると判断し、この結論に達しました。技術者達に関しては所詮負け犬の遠吠えですので無視して構いません。私自身ですか?そうですね、どこかのんびり出来る場所で余生を——」

『——悪いが待つてもらえるかね?』

そんな声が会見場に響き渡った。

「??む??」

ざわめく記者達を押し退けその男は姿を現した。

黒い仮面に黒スーツ。ボイスチェンジャーで声質を変えているようで、体格から男と分かる。男はやれやれと大袈裟な身振り手振りで周りの視線を集めていた。

『獅子金氏、いくらなんでも急過ぎだ。ウチに連絡が来たと思ったら数日後には記者会見だなんて無茶をしないでくれたまえよ』

「む??? 貴方は、村上氏か?」

『ああ、こうして会うのは初めてだね、初めましてだ獅子金氏。私がSMART BRAIN社社長の村上峽児だ。と言つてもビジネスネームだから本名じゃないんだが???まあそこはどうでもいいか』

ザワリ、再びマスコミがどよめく。村上峽児、その名を持つ人物は知名度と反して全く姿を知られていなかった。本人が秘密主義者なのか、誰も姿を見たことが無く、MSCの人間とのやり取りもボイスチェンジャー付きで電話での応対というのだから徹底している。そんな人物が表に現れた。一体どういうつもりなのか。

『さて、何でこんな暴挙に出たんだい?別に態々吸収合併なんてする必要無いじゃないか』

「貴方はそうかもしれないが此方は納得出来んのだ。ハッキリ言つてここ数年の我が社の利益は全てSB社???いや、村上氏、貴方がもたらしたものだ。我々は貴方のお零れを貰いながら生きながらえるなど御免だ。それぐらいならばさっさと受け渡してしまった方がいい」

『???間違いない混乱が起きるがどうするつもりだい?株主達への説明とか、主に僕だけ?』

「さあな、SB社に全て引き継いでしまったので私は知らん」  
『強かな???』

ニヤリと笑いながら言う獅子金に眉を顰める村上。彼の言い口は責任放棄と取れる、が、実際の所村上への意趣返しのようなものだということは分かる。散々意図せずともしてやられたのだ、これぐらいは許せ、とでも言うかのように村上を見下ろす。が、当然ながら村上がただ言われたい放題の男だと思ふことなかれ、豪速球を放たればピッチャー返して跳ね返す。そういう男なのだ、村上は。

『ふむ、獅子金氏。先程従業員は『SB社預かり』と言ったな?』

「それが何か?言っておくが全員クビに出来ると思うなよ?そんな事をすればバッシングは避けられん」

『獅子金氏。SB社は僕一人の会社だ。当然会計部長や開発部長も僕一人しかいないから僕が兼任するしかない』

「それが?」

『つまり僕は『人事部長』でもあるのだよ』

「なっ?!?!そ??れは?!?!」

しまった、と獅子金は悟った。村上が言う従業員は平社員から重役、更には旧社長も含まれている――!

『という訳で命令だ。獅子金字源。君をSB社副社長兼人事部長(仮)に任命する。会社の経営と人事は君に一任するのでヨロシク』

「は???」

さて、それは詰まり?!

「??トップがすげ代わっただけなのでは?」

『そうとも言うね。ハッハッハッ!』

記者の一人の呟きに、何がおかしいのか笑い声をあげる村上。獅子金含めこの場にいる人間は全員ポカンである。

『ぶっちゃけると僕経営とか出来ないから獅子金氏に居なくなられると困るんだよね。てなワケでこれからヨロシクね。副社長?』

「??全く、私の負けだ。社長」。これからは部下としてだが宜しく頼む」

苦笑しながら村上と握手を交わす獅子金。経営に関しては村上の上に行く獅子金だが悪だくみという点では村上が1枚も2枚も上手であった。

『さて、んじゃこの場を借りてウチの会社からも発表だ。塚内くんカモン!』

「――ハイハイ、それじゃ失礼するよ」

村上の声に続いて現れたのはトレンチコート姿の男、警察官の塚内直正警部である。

「塚内くん?」

「ご無沙汰してます獅子金さん。それとも『キングレオ』とお呼びしましょうか?」

「??止めてくれ、小っ恥ずかしくてかなわん」

現役時代の名で呼ばれるのは勘弁して欲しいとばかりに顔を顰める獅子金。今年五十路真つ只中の男にとつては少年時代の若気の至りで付けたヒーロー名はキツイ様だ。

「旧交を温めるのもいいけど俺時間推してるからはよしてくんない塚内くん?」

「(??俺?)」

「そう焦りなさんなって??じゃ、変身つ、と」

おもむろにトレンチコートを脱ぎ捨てる塚内。彼の腰に巻かれた機械的なベルトが露わになる。そのまま塚内がベルトのレバーを倒し、彼は光に包まれた。

「むっ?!?」

「なっ、なんだなんだ!」

「何が起こってんだ!」

「これが我が社の新商品、『ライオトルーパー』だよ」

やがて光が収まる。そこに居たのは赤青白カラートリコロールの戦士。左腰部には剣が、右腰部にはホルスターが装備されている。

「ライオトルーパーは端的に言えばただのパワードスーツです。しかしその恩恵は並の増強系個性を上回り、なおかつ繊細な作業も可能とする緻密性。そして圧倒的な量産性をウリにした我が社の新商品。お値段税込50万4980円ですのでぜひお買い求めを!」

「ライオトルーパー??しかしこれは??」

「ふふ、まるで『仮面ライダー』ですか?」

「??そうだ」

自身の言葉を引き継いで言った村上の言葉を獅子金は肯定する。目の前の鎧の戦士の姿は一般的に言われる仮面ライダー達に酷似していたのだ。

『気になる事はありません。今世間を騒がせているのは所詮偽物ですの』

「偽物??だと?それは——」

「それはどういう事でしょうか!?!」

一人の記者が獅子金の言葉を遮り食い気味に村上に迫る。それをキツカケに他の記者も次々と村上の元へと集った。

『おつとつと、まあ落ち着いて』

「仮面ライダー達が偽物とはどういう事でしょうか!!?彼らが偽物ならば本物は何処に!?!」

「偽物だとして彼らはどこから現れたのでしょうか!?!」

「彼らと同時期に出現が確認された『灰色の怪物』については何かご存知で!?!」

「ハイ、ストップ。灰色云々に関しても今から説明するからちよーつと落ち着こうか」

村上に迫る記者達を塚内が押し留める。流石の記者達も警官に言われてしまえば引き下がざるを得なかった。渋々村上から離れる記者達を確認し、一つ咳払いをしてから村上は語り始めた。

『コホン?、では、先ず『仮面ライダー』という存在の、始まりから話しましょうか——』

——村上の語る言葉は、仮面ライダーの歴史そのもの出会った。

かつて、超常黎明期以前の事、具体的にいえば昭和、平成の時代、仮面ライダー達が主に確認されたのはその時期の事です。そもそもその始まりは世界征服を企む悪の組織『ショッカー』達がある男を捕らえ、自分達の戦力にする為に改造手術を施したのが全ての始まりでした。

言っておきますが悪の組織と言っても子供が言うような生易しいもんじゃあない。邪魔する者は全て始末し、現代から見てもオーバートクノロジーな技術を保有する正真正銘の悪の組織、それがショッカーです。

??話がそれましたね、それでそのシヨツカーに捕えられた男『本郷猛』が始まりにして最強の仮面ライダー、

『仮面ライダー1号』です。彼自身IQ600なんて言う馬鹿げた知能と様々な武術の段持ちなんて言うリアルチート男でしたしそれでシヨツカーに狙われたんでしようね。

おっと、また逸れてしまった。

仮面ライダー1号こと本郷はシヨツカーに立ち向かい、時に傷付き、また仲間を得ながら戦い続け、ついにはシヨツカーを壊滅まで追い込みました。

??これで終われば良かったんですがね、その後もシヨツカーの残党は度々名を変えて現れ、その度に仮面ライダー達に殲滅され続け、昭和の終焉とともに完全に壊滅させられました。言葉にしてみると単純ですがお忘れ無く、シヨツカーの企みにより何千何万という人々が犠牲になっています。

そして時は流れ平成、シヨツカーが滅び平和になったかと思いきや今度は別の連中が現れます。

ええ、言葉にするのとはばかられるクズ共ですよあの異形共は。目の前にいたらブチ殺してやりたいぐらいには嫌いです、ハイ。

??ん?何ですか?? 『未確認生命体事件』?過去起こった事件でそれらしきものをリストアップしたらその事件が出てきたと?へえ?????ホウ。?????

ん???ああ失礼、少し考え込んでしまいました。鋭いですね、その通り、未確認生命体事件がその一例、平成で最初に仮面ライダーによって解決された事件です。

この事件後も度々似たような連中が現れ、その度に仮面ライダーによつて殲滅されて来ました。その後、平成から年号が変わると同時に仮面ライダー達は姿を消します。元々表には出ない人間でしたからね、記録も残っておらず彼らの即先を辿るのは実質不可能でした。その後は皆さんご存知の超常黎明期です。

??うん?ああそうそう、『灰色の怪物』についてでしたね。まあ単純に言えば彼らは『新人類』です。ネアンデルタール人とクロマニヨン

人見たいなんですよ。スペック的にはあちらがクロマニヨンですがね。彼らは我々旧人類が死亡する事で生まれます。

ん？だから死亡ですよ死亡。deathですよ。いや別にギャグでもなんでもなくてですね、我々旧人類の死亡と同時に極一部の適正者だけが灰色の怪物として復活するんですよ。

私は彼らの事を『オルフェノク』と呼んでいます。名前の元ネタはオルフェウスとエノクです。まあどうでもいい事なんで割愛しますね。

彼らは通常の間態の他に動植物をモチーフにした戦闘形態へと変身することが出来ます。姿に関してはその者が根底で思い描いている「戦う姿」がオルフェノクとしての姿に重なります。別人でもオルフェノクとしては同個体なんて結構ザラにありますけどコレのせいですね。それに個性の有無は関係無しに発生する様ですしぶつちやけ台風とかと同じ自然現象なんでどうしようもないですし。

まあ結局の所世間で暴れてる連中はそこらのチンピラ共と変わりないんでボコつてOKですんでヨロシク。

発生の原因？さあ？ただ、件の偽ライダー共が現れたのと同時期に出現したのを考えるとまるで偽ライダーに対抗するために発生した様で………なんて考えすぎですかね。

——とまあこんな所ですかね？私からは以上です。あ、それと近々私の正体も色々公表する予定ですので、それじゃ副社長&塚内くん後はヨロシク！

——さて、さっさと抜けて来た訳だが……『未確認生命体事件』だど……

??という事は此処はクウガの世界なのか？だとすると警察関係者に情報が出回ってないのが気になるか??。



何れにしろ調べる必要があるそうだ???

## 開幕！雄英体育祭！！

雄英体育祭当日。遂に、この日がやってきた。

周りを見れば緊張している者、闘志を燃やす者、冷然と構える者と同様々である。

??俺は、やはり皆に距離を置かれている。あの様な事を言えば当然だろう。が、やはり寂しいものだと感じてしまう。

出久はと言えば此方も皆に距離を??と言うより1人で静かに精神統一している。麗日や蛙吹が話したそうにしているが出久の集中っぷりに話し掛け辛い様だ。

??ん、しゃーないか。なんとなく、お節介だと分かっているが後押ししてやりたくなつた。俺は出久に近付き、軽く話し掛けた。

「よオ出久。調子はどうだ？」

「??あ、木場っちゃん」

「集中してるとこ悪いな。で、どうだ？慣れたか？」

これはオルフェノクとしての身体に慣れたか、という意味だ。覚醒当初は俺も高スペックな身体に振り回されたのはいい思い出だ。

「うん。エミヤさんのお陰で慣れたというか??慣れざるを得なかつたというか??」

ともかくフルカウルを使った時の感覚と同じ感じだったから慣れるの自体は早かつたよ」

??そりゃ剣の雨に降られりゃ慣れざるを得んよな。遠い目をしている出久を憐れに思うがそれと同時に軽く驚く。エミヤの助けがあつたとは云え、二週間程度で慣れる程アークオルフェノクのスペックは低くはない。

??本来の覚醒と手順が違うせいでパワーダウンしてんのか？まあ、それもあるのだろうが特筆すべきは出久の順応性だろう。原作では出久は努力型、対比して爆豪は天才型として描かれていたが俺からしたら出久も充分才能の塊だと思う。

つと、話がズレてしまった。本来の目的に戻らにや。

「——緑谷、木場。少し良いか？」

「ん?」

「轟くん??どうしたの?」

話し掛けてきたのは轟だった。何気に初めて話したかもしれん。

「お前らが敵をどうこうしたとか??正直俺は興味は無い」

「おおう??、まさかいきなりぶつ込んでくるとは思わなかったぞ??。」

コイツの中に気まずいとかは無いんだろうか?。

「ただ敵をヴァイランどういう形であれ倒したのは事実。少なくともこのクラス

でお前らはトップクラスの実力を持つてると俺は思ってる」

「??それで何が言いたい?まさか俺と出久を褒めるために来た訳じゃねーんだろ?」

「勝つぞ、お前らには、必ず」

——ザワリ、とざわめきが広がる。事実、轟はこのクラスではトップクラスの強さを誇ると認知されている。

クラス内での暫定最強からの宣戦布告という訳だ??!

「??轟くんにそう言ってもらえるのは、正直光栄だと思う」

でも、と出久は続ける。

「僕だって、本気でトップを狙ってる。他の科の人達もトップを狙ってる人だって居るだろうと思う。誰にも譲るつもりなんて無い——」

だから——

「——僕も本気で獲りに行く!!」

これが出久也の、クラス全体への宣戦布告。今日ばかりは皆がライバル、俺も例外では無い。誰もが狙っているであろう頂点を——

——本気で獲りに行く<sub>と</sub>出久は行っているのだ。

「お、おいおい??何もそんな喧嘩腰にならなくても」

「いや、轟達の言う通りだと思う」

「う、上鳴?」

轟達を諫め用とする切島とは逆に、その意見は正しいと声を上げたのは以外にも上鳴だった。

「木場」

「??おう」

「俺は??いや、俺だけじゃなくて耳郎や八百万もそうだったけどさ??、  
USJの時、全く役に立たなくて敵にやられちまって??お前に迷惑  
かけちまった」

「んな事気にするような事じゃ」「そうじゃねえんだ!!」

気にするなと言おうとするとそれは上鳴の声に遮られる。見れば  
顔を俯かせ、握られた拳は小さく震えていた。

「考えちまうんだよ、もしあの時自分がもつと強かったらつて??!もつ  
と強けりやお前があんな事する必要無かったかもしれねえつて??!

———それだけじゃねえ?!

俺は??俺達を守ったお前を?!感謝する訳でもなく、恐れて避けち  
まった!!

悔しくて??情けなくて??!でもどうすりゃいいか分からなくて??!そ  
んな弱い自分が嫌で嫌で仕方なかった!!

だから??だからこそ俺は!木場、お前に宣戦布告する。弱い自分と  
決別するために??!何かあった時にダチを守れると証明する為に??!

それは、上鳴電気という男の決意表明。それまでの自分を捨て、新  
しい自分に変わる為の、意思の表れだった。

「??悪い、所詮自己満足に過ぎねえ事は分かっている。でも、でも言わず  
には居られなかった??」

「ん、俺はいいと思うぜ」

「木場?」

「誰がどう言おうがそれがお前なりの覚悟って事だろ?良いじゃねえ  
か自己満足で。大切なのはお前がそれを成し遂げられるか否だ」

それだけ言っつて俺は上鳴達に背を向け入場口へ向かう。そろそろ、  
始まりだ。

「俺も俺で、無個性の怪物なりの意地を見せつけてやるだけさ」

———雄英体育祭が今始まる。

『さあさあよくも集まったなア teme エらア!! エヴィバデイセイハイ  
!!?』

『『『『yokosoーーー!!』』』』』

『コイツアはイイ! お前らも準備は出来てる様だなあア!』

本日は teme エらが待ちに望んだ雄英体育祭!! 我こそはと有精卵共  
がシノギを削る年に一度の大! バトル!!』

『どうせアレだろ!?! teme エらの目当てはコイツらダルオ!?! 敵の襲撃  
サイランを乗り越えた超新星共!!』

『ヒーロー科ア!ー!ーAだろオオオオオ!!!?』

『??るつき!』

『マイクだし毎年こんなもんだろ』

『てか人すご?』

「大人数に見られている中でも自身の最大限のパフォーマンスを発揮  
出来るか??? これもまたヒーローとしての素養を身につける一環なの  
だろうな」

この状況で軽口を叩き合える我がクラスは或る意味大物らしい。  
俺、出久、アリア、爆豪、轟、上鳴、耳郎、八百万、麗日、蛙吹、峰  
田は軽口を叩く様子もなく唯、前だけを見すえている。コラそこ、峰  
田くん頭打った? とか言っちゃいけません。

『続いてヒーロー科B組イ!そして普通科C・D・E組、サポート科F・  
G・H、経営科I・J・Kの登場だア!!』

俺達に続き続々と他のクラスが入場してくる。

? おっと、先日のバカをB組にて発見、すげー顔でこっち睨んでら。  
ニツコリとした満面の笑みで返しておく。何が気に入らんのかさら  
にすげー顔になってるわ。

ふと、それとは別に視線を感じた。何かと思って視線を辿ればそ  
こは普通科。ボサボサ髪の毛の酷い生徒が此方を見ていた。???ア  
イツ、確か原作キャラだ。確か心操人使とか言ったか。個性は『洗脳』

と中々に注意が必要な奴だと記憶している。原作では宣戦布告を嘯ましてくれたが今回は俺と出久がぶち壊してしまったので特に会う機会もなかったな。

まあ特に関わる機会も無いだろうと視線を外した。

——これが大きな間違いだったと分かるのはずっと後の話。

「さあ、選手宣誓と行きましょうか!!」

そう言って台に立つのは18禁ヒーロー『ミッドナイト』。アレだ、元の世界で言うキューテオーハニー粋な人だ。

「?18禁なのに高校に居ていいものか」

常闇の静かなツツコミには誰も触れなかった。多分全員が思っている事だと思う。

「静かにしなさい!」

選手宣誓!1-Aヒーロー・サポート兼科、木場勇治!!」

「は?」

「へえ!」

「??ああ?」

周りの反応は驚いていたり、イラついていたり(当然ながらボンバ(以下省略))。

俺といえば前々から知らされていたので問題は無い。

??だって全科の入試で総合一位が俺だったんだよ。校長曰く前代未聞らしいがこちらとしちや好都合なので文句はなかった。

『おい、兼科ってどうゆう事だ??』

『そんな特例聞いたことないぞ??』

『木場って、もしかして昨年の優勝者の弟か??』

観客席からもざわめき上がる中、俺は静かに台上へと上がる。

——さあ、ここからは俺のターンだ。

『ご紹介に預かった、諸事情でヒーロー科とサポート科を兼科する事になった木場勇治だ。本来ならさつきと宣誓する所なんだが、まあ、少し俺の雑談に付き合ってもらいたい』

この行為自体は誰にも咎められもしないし以外にも思わない。この程度の事は毎年よくやる事だ。良くも悪くもヒーロー科の人間は我が強い。軽いトークなどは当たり前前の事だった。

『さて、大前提として言わせてもらおう——』

——俺は『無個性』だ。

何の気無しに、極々普通に放たれたその言葉は、会場をザワめかせるのに充分だった。

『以外か？ヒーロー科の人間が全て有個性だと思ったか？残念、普段有個性お前らの一部が陰で出来損ないと罵る無個性だろうとこの場に立てるんだよ。

何が言いたいのかわからない者も居ると思うので単刀直入に言うぞ？

——調子に乗ってるんじゃないやねえぞカス共が』

『テメエらはやれ『出来損ない』だの『生まれる価値のなかったゴミ』だのと俺を罵ってくれたな？

ああ、気にすんな。ただ無個性だからといって親にネグレクトくらって周りから精神的、肉体的に悪質な虐め受け続けた餓鬼の独り言だ。話は続けるがな。

で？テメエらは何やってる？地方の平凡な学校で満足して？平社員で満足して？テメエらがつまらない所で満足してるその間に俺はここまで登りつめたぞ糞共』

『第一戦闘にクソの役にも立たねえゴミみたいな個性持ちでもプロ

ヒーローやってる奴なんざごまんといってるんだよボケが。戦闘にクソの役にも立たない個性持ちがプロになれるんなら当然無個性の俺でもヒーローになれるよな？出来損ないでもこうして上に立てるよな？お陰でテメエらクソみてえな人生に比べりゃ随分とマトモな生活送らせてもらってるあ』

『第一有個性だからって何が偉いつてんだ？たか。何が偉いつて？俺から言わせりゃテメエらもプロの大半も現実見えてない阿呆にしか思えんわ』

「おい何だよアイツの言い草？」

「いくらなんでもプロを馬鹿にし過ぎだろうが?!」

「入試一位だからって調子乗り過ぎだろうが?!」

『あ？何だ？俺の言ったことに不満があんのか？』

そういう事はなあ——俺みたいな化け物を出さないようにしてから言えよ』

姿が、変わる。平凡な人としての姿は、2mを越える馬の姿をした怪物へと変貌を遂げていた。

オルフェノク——別名灰色の怪物と呼ばれていた姿であった。

途端悲鳴が観客席から飛び出す。1部のプロヒーローは戦闘態勢に移るものもいる程だった。

『おいおい何だ？俺がオルフェノクだから排除しようってか？あーやだやだ、無知な奴らの相手は辛いねエ』

「うわー?!。木場くん相当イラついてるなあ？」

「煽るのを辞めない所を見ると寧ろ手を出させようとしてるみたいだね?」

「ふ、二人とも冷静過ぎひん!?このままじゃ木場くん大変な事になるで!」

「だいじょーぶだいじょーぶ、木場くんならそこらの木っ端ヒーロー程度片手で潰せるから」

「そういう問題じゃないんだけどなあ?」

なんて事ないように言うアリアとに苦笑する出久。麗日含め、周り



は2人が妙に冷静な事を不可解に思うも、特に追求することなく木場へと視線を向けた。

『言つとくが俺がこうなったのは全部テメエらヒーロー(笑)のせいだからな?三年前の『鉄人事件』。知らねえ奴もすくねえだろうよ』

『鉄人事件』??。確か金属を身に纏う個性の敵サイランとその仲間の手によって13人が殺害された事件。敵サイラン達は突如現れた仮面ライダーに倒されて捕まったつていう??。』

『殺害された13人の中にカウントされちゃいねえが俺も被害者の内の一人だ。例の鉄人に腹カツ捌かれてオルフェノクとして生き返つたのさ』

『羨ましいと思うか?一部の連中はそう思うんだろうよ。有個性連中を上回る圧倒的なパワーとスピード。世間で暴れ回ってる連中も大半がこの力を振るいたいって思ったんだろうよ。』

だがな、代償が無いとでも思ったか?今分かってるだけでも俺達オルフエノクの寿命は最大でも20年に満たねえ。俺も下手すりゃ後10年程度でお陀仏さ』

『そんな事をなんで知ってるか?おいおい、ここまでくりやわかりそうなもんだがね。ああそうさ——俺が村上峽児だ』

少年は厳かに告げる。それと同時に、彼の頭上にソレは現れた。

「あ、アレってまさか!」

「冗談だろおい!」

「ゆ、ゆゆゆ、ゆ」

『紹介しよう、我社の新作』未確認飛行物体『UFO型超長距離輸送船・マハトマ1号』  
だ』

「「UFOだぁー……」」  
「!!!??」

UFO。未確認飛行物体とも呼ばれるそれは何百年も前から人類を虜にしてきた謎の存在。それを模した輸送船だと彼は言った。よく見ればSMARTBRAINのロゴがデカデカと貼られている。

『改めまして自己紹介と行こう。俺の名は木場勇治。世間じや村上峽児としての名の方が有名か？今後とも我社の製品をご贖いにな』

「ウソだろおい!？」

「木場が??村上峽児?」

「お、おい緑谷!知ってたのか!？」

「本人はSB社の関係者だとは言ってたけど??まさか社長本人だなんて?。」

『さて、俺がこんな場所で名を明かしたのには理由がある。つつてもシンプルなもんさ——権力が欲しい。』

『俗だと思ったか?俺もそう思うさ。』

「だがな、権力があれば今現在のクソみたいなこの国を変えられる、少なくとも俺はそう思ってる。』

『今のヒーローには正当防衛によるものだろうと敵<sup>サイラン</sup>殺害は許可されていいのは知ってるな?おかしいと思わないか?超常黎明期以前の警察はナイフ持った犯人にチャカブツパしてたんだぜ?殺す権利を国から与えられてた訳だ。で、何故か現代で治安維持を担当しているヒーローにはそう言った権利は与えられてない。おかしいよな?こんなクソみたいな法律がなけりやウオーターホース見たいな悲劇も起こらなかつたかもしれない。俺が寿命を大幅に失う事も無かつたかもしれない。まあ俺に関してはどうでもいいさ』

『早い話、権力がありや国の中枢に潜り込めるんだよ。後は金さ。今

も昔も政治家連中が腐ってんのは変わりない。現に汚職の証拠いくつか持つてるしな。あ、コレ後でマスコミに流しとくな。

で、だ。俺は金は手に入れた。名声も手に入れた。人脈も充分ある。後は国に潜り込めるだけの権力だ。

いつまで経つても中途半端で止まってるこの国を変える。夢物語だと笑いたきや笑え。笑ってんのは現状を変えるだけの勇氣も意思もねえカスだ。本気で目指してるからこそ、俺はここに居る』

『そして全国の無個性共。出来損ない先達としてこれだけは言っておく!!

下向くな!上を向いて胸を張れ!!そして笑ってくる連中に中指立ててこう言つてやれ!!

『俺はお前らと違って特別な力なんぞ無くても歩いて行ける』と!!!弱者に甘んじるな!牙をむいて爪を遂げ!!愚者を超える意志を持って!!!』

『覚悟のある奴だけ上に来い!!!』

『選手宣誓は以上だ。長話に付き合ってくれて感謝する』

——雄英体育祭、開幕

## 障害物競走でIT, S SHOWTIME!!

「さ、さア！宣誓が終わった所で早速第1種目行くわよ!!毎年ここで多くの生徒がTear Drink!!涙を飲む運命の第1種目は???コレよ!!」

### ——— 障害物競走 ———

「まア予想通りってどこか」

「その他大勢を振るい落とすには丁度良いだろうしねえ。上位の大半はヒーロー科の人だろうし、注意すべきはB組の人って感じだね」

ミッドナイトの宣言に合わせてゲートが開く。俺はベルトの準備をしながら、アリアは特に気負う素振りも無く軽いストレッチを行っていた。俺達の会話が聞こえた周りの普通科やサポート科の面子が睨んで来るが、事実なので仕方が無いと思う。悔しいならば実力で示すしか無いのだ。ブツクサ言うぐらいなら下ジャイアントキリング克上を成してやるぐらいの覚悟を見せろ。覚悟も無いなら下を見て這いつくばってろ。俺はそこまで面倒を見切れる程お人好しではない。

「???始まるな」

「だね」

頭上のランプが1つ、点灯する。

「今日は誰で行くんだ?」

「メドゥーサ。この競技空から行った方が速そうだし」

2つ。

「そうか???負けねえぞ」

「もち。私だって負けるつもりはないよ」

3つ。スタートだ。

周りが一斉に走り出す中、俺達は俺達はただ———

『Code 315 Enter』

「来たれ蛇髪の禍津女。神の傲慢により呪い受けしその身、天を駆け  
る白き翼と共に舞い降りよ」

「HENSIN!」

「出番だよ、メドウーサ!!」

——<sup>トツプ</sup>頂点を、見据えていた。

『ハイハイハイ! 此処からは俺が実況だア!!』

解説ミイラマンア—ユーレディ!』

『お前が無理矢理呼んだんだろうが?』

『さア始まったぞ第1種目ウ! 3つのエリアからなるコースを個性を駆使して駆け抜ける!! 怪我は自己責任で頼むぜエ!』

『聞けよ』

『おおっとお!?! そういう言ってる内に一躍トツプに躍り出たのはア!?!』

「冷てえー!?!?! 何だこれ!?!」

「畜生凍った!?! 動けねえ!」

「あのやろおおおおお!!?!?!」

先頭集団、走り出そうとした面々の手足が凍りつき動きを妨げる。その集団から1人、飛び出す影があつた。

『1—A轟焦凍オ!! 先頭集団を凍りつかせ一躍トツプに躍り出たア!!』

「悪いな」

駄目押しで後方に5m程の氷壁を展開。後続の進行を妨害する。

『おいおいマジか! アレいいのか!』

『コースさえ守れば何をしても構わないそうだ。あの程度ならば問題無い』

『さすが自由の雄英! ルールも自由だなア!』

て、後続の連中に動きがあるみたいだぜ!』

「そう上手く行くと思うなよ半分野郎!!」

「君一人には行かせないよ轟くん!!」

爆炎が、鉄拳が氷壁をぶち破る。そこから飛び出してきたのは2人の男。

『出たアーーーーー!!!壁をぶつ飛ばして現れたのは1ーA爆豪!!そして同じく緑谷!!2人に続き飛び出してきたのは1ーAの面々!早くもクラス内でシノギを削るうううううううう!!!』

「そう上手くは行かねえか」

「轟イ!お前一人にいいカツコはさせねゾブラあ!!?」

頭のもぎもぎを筆とり轟に投げつけようとする峰田を機械の拳が吹っ飛ばす。

「入試に出たつっう仮想敵か」

その正体は無数の仮想敵<sup>ヴァイラン</sup>。単体ならば大したことの無い、しかし数の暴力を持って迫る仮想敵達。当然ながらそれだけではなかった。

地面を揺らしながら現れるOPt仮想敵エグゼキューター。10や20で効かない数を持って生徒達に迫る。

『早速第一関門だ!!手始めに無数のロボ祭り!!』

その名もロボ・インフェルノ!!ヒーロー科の面々はお久しぶり!その他の奴らは初めまして!どっちにしろ邪魔な事には変わりねえ!ぶつ飛ばして駆け抜けなあ!!』

『???おい』

「一般入試の仮想敵???どうせならもっと凄えもん用意してもらいたいえもんだ」

——クソ親父が見てんだからよ。

腕の一振。たったそれだけでエグゼキューターが複数体、纏めて凍りつく。

圧倒的。その言葉が相応しい光景だ。

「今だ!あいつが止めた隙に!」

「やめとけ。体制が不安定な時に凍らせたから——」

倒れるぞ。そう言おうとした轟の口が止まる。彼が見たのはエグゼキューターが倒れ込む光景では無い。

エグゼキューターが浮遊する姿だ。辺りに迸るは紫電。その中心

に立つのは稲妻の少年。

「悪いけど、こんな所で立ち止まってる訳には行かねえんだ!!」

上鳴電気。彼の腕の一振とともに浮遊する機械群は爆散、同胞は巻き込んで破碎される。ロボット

そのまま紫電を纏い、上鳴は人間の限界を遥かに超えた速度で轟に向かい駆け出した。

「つちー」

焦ったのか、轟は足元に氷を重ね加速する。ここで轟は、上鳴を確かな驚異として認識した。

『おいおいおいおい!!?ここでスパークンギボーイ上鳴!どうやったのかわらねえが仮想敵を一気に吹き飛ばしやがったア!!?更に轟に一気に迫る!焦る轟も一気に加速!レースは早くも白熱だア!』

『上鳴のは電磁浮遊の応用だろう。浮かせて、内部を強力な電磁石にして外部の反磁性を強めた結果だろう。あの異様な速度は筋繊維に電気信号を通して無理矢理リミットを外したからか???』

あいつはこう言った応用が苦手だったハズだが??磨けば変わるものだな。

てか???おい』

『解説サックスイレイザー!きてきて他の面々はア!?!』

所変わって緑谷出久。彼も既にロボ・インフェルノへと辿り着いていた。親友に火をつけられ、加えて開始前の上鳴の言葉。そこに、弱気だったかの日の少年の姿は無かった。

「負けてられないのは僕も同じだ!だから——」

バチバチと音を立てて彼の右手に白光が集う。それは直径50cmほどの光球となり、激しいエネルギーを放っている。

「邪魔を、するなアああああああああ!!!!」

右腕を大きく振りかぶりぶん投げられた光球。それはエグゼキューターの頭部に直撃、バキバキと音を立ててエグゼキューターの顔を粉碎した。

それにつき、続々とロボ群を抜けていくA組一同。実戦を経験していない者としている者の差が、ここで明確になった。







では——バルレフオーン 騎英の手綱!!」

『!!』

ペガサスが嘶き、ロボ群に突っ込んで行く。あわや激突するかと思いきや、急制動からの高速の上下左右移動。ロボ群は彼女らに触れる事も叶わず、あっさりと突破される。

「き、木場くー? うつぶ!? き、先に??? ヴおつ?? 行つて??? ヴオエつ!!」  
「マスター!?! ちよ、やめてください吐かないで!」

無茶な起動の結果か、自分の真後ろで『キラキラ』を噴出しようとしている主に焦るメドウーサ。気配を察して「やべえ!?!」と思い振り落とそうと暴れるペガサス。

「あ、待つてちよつと暴れないで出る出る出る出る出る出る??」

「マスター!?! ちよつとそこらの林に降りますからもう少しだけ耐えて下さい!?!」

『??? 何やってんだアイツら?』  
『知るか』

「何 やっ て だ ア イ ツ ら」  
「What are you doing?」

奇しくもマイクと同じ事を呟く木場。アイツらはこの光景が全国のお茶の間に放送されている事を理解しているのだろうか。理解していないのだろうなと思いつながら目の前のロボ群に向かっていく。

「時 間 は 有 限 速 攻 で カ タ を つ け」  
『Exceedcharge』  
『Cobalt smash!!』

エグゼキューターに足を向け、すぐさまEnter。脚部に光点が流れ込むと同時にブースターで威力が上がった飛び蹴りを喰らわす。砕ける装甲、飛び散るオイル。他のエグゼキューター達も巻き込まれ、ロボ群の壁に穴が空いた。

『HMMMMMMMMMMMMMMMM!!』  
雄叫びを上げ、高速で穴を抜ける木場。その光景に火をつけられ、

A組もまた加速する。

『おいおいすげえな突破に5秒も掛かってねえぞ!?そしてA組イ!?連中燃えてやがんのか更に早くなってるぞ!?お前どういいう教育してんだイレイザー!!』

『知るか。アイツらが勝手に火イつけあってるだけだろ』

『とか言いつつも内心じゃ教え子が活躍してるのが嬉しくてたまらないんでしょー?』

『??お前なんでまだ解説席にいるんだよ』

『べつつにいいじゃないですかー。ただ宣伝終わったら自由にしていって言われてるからここに居るだけですし?せつかくだからちよこつと解説手伝って上げようかなーって』

『H A H A H A! いいじゃねえかイレイザー! Heyメタリックガール!!解説の準備はAre you ready?』

『出来てるよ??. なんつってなんつってー!!』

もちろんOKモーマンタイ!!』

『という訳で飛び入り参加だリスナー共!こつからはもつと激しくイクゼオイ!!』

『??なんなんだコイツらは』

『??After that fool』

第二関門へと進む最中、思わずマリーに向かって毒を吐く木場。スクラップにするか記憶全消去にするか??と罰を考えていると、第二関門が見えて来た。

『さア現在の順位は轟、爆豪、緑谷の3人が先頭争い!それに1歩遅れて上鳴!後ろから飯田、常闇、瀬呂も続き、それを木場が猛追するウ!!』

そして見えてきたぜ第二関門!!その名も『ザ・フォール』!!落ちればアウト!!それが嫌なら這いずれや!!』

『一歩間違えば奈落の底!!それが嫌ならトカゲプレイ!!ビビり共は帰ってママのオツパイ吸ってな!!て事ですな!!』

『Yeah!!』

『コイツらは???』

「後ろに道作っちゃうが???仕方ねえか」

轟は氷で橋を作り、自身はその上を通過。

「ハッ、俺には関係ねエー!!!」

爆豪は爆破で空を飛ぶ。

「僕もツツ!」

ゴウツ、と空気を裂くような音が響く。音源は、木場。あの僅かな時間でここまで迫って来たのだ。

「

『木場つちゃん!』」

「Sorry I zuku, Go ahead!」

そう言い残して轟達に向かい飛び去る。思わず固まってしまった出久。それを抜き去る者が居た。

「に、がさねえぞ木場ああああああ!!!」

「なっ、上鳴くん!」

身体中に黒いナニカを纏い、木場を追って飛ぶ上鳴だ。

黒いソレが幾分か舞い、出久の頬に付着する。それを拭い取り確かめて見れば、それ自体は何処にでもあるものだった。

「砂鉄???」

っ、まさか電磁力で砂鉄を身にまとってそれを浮遊させて飛んでるのか!」

凄い、と素直に思う。USJ以前の彼は、少なくとも電気を纏う、電気を放つ以外の事は出来なかったハズだ。それがどうだ。以前とは見違い、繊細なコントロール力を手に入れている。

——— 否が応でも火がつくというものだ。

(オルフェノク化はまだ使わない。アレは隠し球、こんな序盤で使っていないものじゃない。でも今の状態だと追い付けるかどうかは微妙だ。体力の問題もあるし全身使う訳には行かない。だったら———

「一部分だけ使えばいい——!!」

出久の、太股の半ばから下部。それが灰色の異形のソレへと変化する。更に、脚部より僅かに漏れ出る緑の輝き。誰にも気づかれず、しかしそれによりただでさえ強大な脚力は爆発的に増大する。全身にOFFAを満たすフルカウル。それと真逆の発送によるそれを、出久は一気に解き放った。

「——う、お、お、お、おおおおお!!!」

爆発。思わず全員が振り返る程の轟音が轟いた。

「緑谷?!!」

「ちいつ、クソデクがあ!!」

驚愕する轟。苛立ちを募らせる爆豪。そのまま出久は木場と上鳴を一気に抜き去る。

「That stupid? Partly changed!」

信じられない現象に目を見開く木場。上鳴は言葉も出ない。それでもすぐ様目の前を見据え、速度を上げる。

『シヴィー!!上位五人のデットヒートオ!!抜かれた緑谷、ここで隠し球か、一気に抜き返すううううううう!!!』

『抜き返された御二方も再度加速!緑谷選手を追い掛けるうううううう!!!』

って、ここで第二関門が終了だあ!」

『順位は轟と爆豪が同率!!それを目指し緑谷が猛、突、進——!!!』

「うっ、らああああああああああ!!!」

「ツ!!」

「んのっ、ちつくしようがあああああああ!!!」

『並んだ——!!!』

『そしてそれを——』

「おおおおおおおおおおおおお!!」

「??なっ」

「クソデク???っ!」

『抜いた—————!!!』

『もう俺要らないだろ』

3歩だ。たった3歩で出久はトップに躍り出た。1歩目で『ザ・フォー』を越え、2歩目で轟と爆豪に並び、3歩目で抜き去る。圧倒的という他無かった。

(僕だって負けられない! 負ける訳には行かないんだ!!)

思い浮かぶのは体育祭前、師であるオールマイトに言われた言葉だ。

———OFAが消えたと言っても、君が私の後継者であることは変わらない。

———私は、君が次世代の象徴に成り得ると確信している。だから、

———『君が来た!!』ってことを、世の中にしら閉めてほしい!!  
現平和の象徴オールマイトその人に、自身が象徴足り得ると言われた。彼に憧れた身としてはこれ程ない賛辞。その期待を背負う自分分は———

「負けられないんだああああああああああああああああ!!!」

4歩目。それは第三関門の地雷原を飛び越えた。

5歩目。既に後続の姿は見えなくなっていた。

6歩目。その姿は既にコース上には無く。

———スタジアム内。その場に辿り着いていた。

『『『『『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおまおおお



1 0 : 瀬呂範太  
1 1 : 切島銳児郎  
1 2 : 鉄哲徹鐵  
1 3 : 尾白猿尾  
1 4 : 泡瀬洋雪  
1 5 : 蛙吹梅雨  
1 6 : 障子目蔵  
1 7 : 砂藤力道  
1 8 : 麗日お茶子  
1 9 : 八百万百  
2 0 : 耳郎響香  
2 1 : 心操人使  
2 2 : 芦戸三奈  
2 3 : 口田甲司  
2 4 : 回原旋  
2 5 : 円場硬成  
2 6 : 凡戸固次郎  
2 7 : 柳レイ子  
2 8 : 拳藤一佳  
2 9 : 穴田獸郎太  
3 0 : 黒色支配  
3 1 : 小大唯  
3 2 : 鱗飛竜  
3 3 : 庄田二連撃  
3 4 : 小森希乃子  
3 5 : 角取ポニ  
3 6 : 物間寧人  
3 7 : 葉隠透  
3 8 : 取蔭切菜  
3 9 : 峰田実  
4 0 : 兇目明



41：青山優雅

42：アリア・ペンドラゴン

——これにて第1種目、決着。

木場戦? いや、騎馬戦!

「以上、本選への通過は上位42名よ!落ちちやった人も安心なさい。まだまだ見せ場はあるわよ!

そして本番はここから!取材陣やスカウト目的の面々も白熱してくるわ!!気張りなさいよ!!

——という訳で次の競技はコレよ!!」

『騎馬戦』とモニターにデカデカと表示される。軽くざわめきが起ころ。急なチーム競技へのシフトチェンジへの戸惑いを隠せない。

「木場戦?」

「くふっ!」

「次言ったら叩き潰すからな腐れ葡萄。そして笑ってんじやねえよ麗日オイ」

「じ、冗談だつて!」

「ごめん? つい??ぷふっ!」

「それにしても騎馬戦??勝敗はどのように決まるのかしら」

「ルールはシンプルよ。参加者は2~4人からなるチームを組んで騎馬を作ってもらうわ!メンバーは自由、同じクラスでも他クラスでもOKよ!メンバー全員には下から5Ptづつ得点が与えられて全員の合計Ptが騎馬のポイントになるわ!」

「なるほど??高得点の者程狙われやすくなる訳か」

「下から5Ptづつ??てことは1位が210Pt??。」

「デカイ差がある訳でも無いな??」

「うえっ?、順位がしたなら高得点の人と組むかどうかしないと厳しいルールじゃん」

「ノンノン!!2位までは5Ptづつ。しかも!トップに与えられる点数は——いっせんまん!!」

「いっせんまん??1000万Pt?」

「え??。マジでか?」

「トップてことは??」

ぐるり、と音が聞こえそうな勢いで周りが一斉に緑谷の方を振り向

く。同情の視線もあれば殺気すら感じられる視線もある。緑谷にはそれらが獲物を狙う肉食動物の視線に感じられた。

(これが??トップの重さ!!!)

所詮は刹那的なトップ。これで結果が決まる訳でも無い。それにも関わらず、重い。自身の師が背負う重圧には遠く及ば無いだろうそれですらこれなのだ。改めて偉大なその背中を遠く感じた。

「制限時間は15分。チームを組んだら合計P tの書かれたハチマキを首から上に巻くこと。取るほど管理は面倒になるわよ！」

更には騎馬が崩れようとハチマキを全て失おうともアウトにはならないということよ！」

「つまりは10以上の騎馬が常にフィールドに存在し続けると??！」

「1000万といい弱者の為の救済措置ということか??！」

「個性アリの残虐ファイトとはいえあくまでも騎馬戦！悪質な崩し目的の攻撃は1発アウト！退場となるわ！上に行けるのは上位4組、しっかり考えなさいな!!」

それではこれよりチーム決めのスタートよ！」

「ちよつといいかな？」

「??なんだ？」

「一緒に組んでもらっていいかな心操人使くん」

「出久、組むぞ」

「うん、頑強な木場つちゃんなら前騎馬に最適だ。欲を言えば両サイドに砂藤さんと切島くんが欲しいけど?」

「直接的な防御力は高えが搦手には弱えな。それだったら対応力の高い八百万の方がいい?? つつても轟のところに取られてんな」

「あ?? 本当だ」

既に轟組は轟を筆頭に八百万、上鳴、飯田の面子で組んでしまっていた。その他の面々も次々と組み終わっている。てかアリアの奴なんで心操の所にいるんだ? まさか洗脳に?? かかってねえな。笑い返してきた。

? 自分から? 確かに確実に上がるならピッタリだと思うが。

「デクくん一緒に組も!」

「う、麗日さん? いいの? 絶対に狙われると思うけど?」

「木場くんもいるし下手な騎馬より勝率高いし! ガン逃げすれば確実やし!」

何より仲良い人とやった方がいいやん!

「?? ありがとう麗日さん」

アリアに気を取られてたらいつの間にか麗日がメンバー入りしていた。個人的にはパワー型の俺とは相性がいいので大歓迎なので問題は無いだろう。この3人で組もうかと思っっていると、いそいそと俺に近寄ってきた奴がいた。

「村上社長! 是非組みませんか!」

「あ? お前は??」

「私サポート科の発目明と申します! 有り体にいえば貴方に私のベイビー達を売り込みに来ました!!」

わーいド直球。

「あけすけだなオイ??。なんだ、将来的にウチで自分の作品を扱って欲しいってか?」

「ええそうです! 現在注目度 No. 1 の SB 社!! その社長の貴方にベイビー達を気に入ってもらえれば必然的に私のベイビーの注目度 No. 1! 更には予選 1 位の人もいるから尚更注目されるじゃない

ですか!!」

「隠さねえな??. 使えるんだろうな?」

「勿論! 性能は保証します!」

「よし?? 出久!!」

「聞こえてたよ! なら布陣は——」

「ならここで——」

「それならこのベイビーが——」

(あかん、ついていけへん——!?)

結局、麗日が置いてけぼりになっていたのに気づいたのは制限時間ギリギリだった。なんか申し訳ない。

『さあさあタイムアップだ!! チーム決めの時間を終え、今フィールドに12組の騎馬が出揃ったア!』

『見た所大体が同じクラスで組んでますねー』

『そりやある程度互いの個性の性質について理解し合ってるからな。同じクラスで組んだ方が勝率は高いだろ。』

で、いつまでいるんだお前』

『まーまーいいじゃないですか』

『イレイザーあまり細かいこと気にしてつとハゲるぞ?』

『なんでお前らそんなに息合ってるんだよ』

『そりや面白いから』

『??? もういいか』

( (辞めんなよイレイザー!!) )

実況席の面々の暴走が止まらぬ中、良識ある人々は殆ど同じ考えだった。

『よっしやオマエら鬨の声を上げな! 血で血を洗う鬨ケ原!!』

今、開!! 幕!!』

「麗日さん!」

「はいっ!」

「発目さん！」

「フッフツ！オツケーです！」

「木場っちゃん!!」

「おう、何時でも行けるぜ」

「よろしく!!」

—— 騎馬戦 開幕

『START!!』

『さア始まったぜ第2競技騎馬戦！開幕早々緑谷の騎馬に他の騎馬が向かって行くウ！』

『A組葉隠チーム、B組鉄哲チームが緑谷チームに迫る!!早くも本命<sup>1000万</sup>を取りに来たア!!』

「ん？お前??」

B組の騎手、確か入試で見たヤンキーっぽい奴だ。向こうも俺に気づいた様で、少し微妙な顔をしている。

「入試の時は世話になってこの前は物間が世話をかけた!!心苦しいがやらせてもらうぞ!!」

「気にすんなよ、全力で掛かってきなあ!!」

「骨抜!」

「ケツ!」

ズブリと全身が沈む感覚。下を見れば地面がぬかるんだ様になり、足が膝下まで沈んでいる。確かB組の推薦入学者の骨抜の個性『柔化』。触れたものを柔らかくする個性だ。

「出久、バックバック!」

「もうやってる!」

発目のアイテムの一つであるブースターバックパックを点火。麗日の個性で重さを消し、ゆっくりと騎馬が浮上を始める。

「やらせない!!」

「つぐあ!」

——ヴォーン！

「っ、何だ!？」

「オーノーベイビーが!？」

音が響いたと思ったらバックパックが木っ端微塵に吹っ飛ばされていた。衝撃は出久にも通っている様で顔を顰めている。

今の攻撃見えなかった？完全不可視の攻撃を、それも遠距離で行える奴なんて記憶にない。

バックパックを破壊され、浮力を失った俺達は再び沈んで行く。

「不可視??不可視??見えない衝撃??空気を伝っている??」

だとするならば——。

「木場っちゃん、耳郎さんだ!」

「———そういう事!!木場!ウチらもアンタに挑ませてもらう!!」

気づいた時には既に遅く、既に耳郎・砂糖・甲田・葉隠からなる騎馬が迫っている。どうやら砂糖の個性で無理矢理ぬかるみ擬きを突破して来たらしい。

「あかん、囲まれた!？」

麗日の悲鳴で今の状況を理解する。前門のB組、後門の葉隠チーム。なりふり構っている状況じゃない。明らかに原作よりもハードになっていた。

「麗日、重さ消せ!発目はランサー用意!」

「う、うん!」

「イエッサー!オートランサー展開用意!」

「出久!」

「了解、吹き飛ばす!!」

俺と同じ考えを出久も考えていたのか、既にその手にはアークオルフェノクが扱う能力の一つであるエネルギー弾が。出久のソレは本家には及ばないものの汎用性に優れていた。

「ダメージは限界まで減らしてエネルギーの波動だけで吹き飛ばす!!」

エネルギー弾は俺の足元、つまり俺達の騎馬の真下に叩き込まれた。それは狙い通り柔らかくなった土を吹き飛ばし、骨抜の個性の及

んでいない地面が露わになった。

「な、しまっ」

「確り捕まっつけよオラアアアアアアアアア!!」

麗日の個性で重さを消し、事実上麗日一人分の重さとなった騎馬は、俺の跳躍により宙を舞った。無茶苦茶な体制で飛んだので当然バランスは崩れるがそれは発目のバランスでカバーする。

「着地すんぞ、クツションー!」

「了解!」

着地も発目のクツションブーツで難なくこなす。これで少なくとも多少は距離を取れた。

『フウー!!--!!始まったばっかだつてのに早くも混戦!』

各所で争奪戦が勃発、まさに関ヶ原!!』

『緑谷チームだけでなく轟チームや爆豪チームなども狙われてますね。出る杭は打たれるってところですね』

((解説より解説っぽい!!))

『??帰っていいか?』

((アンタがいなくなったらツツコミがいなくなっちゃうから頑張ってる!!))

イレイザーヘッド、最早空気である。

「オラ、行くぜ緑谷、木場!」

「あ?峰田——って騎手どこだ!?!」

峰田の声が出た方を見ればいるのは障子ただ1人。その背中はまださらだ。

——ヒュッ!!

「——っ!」

空を切る音が出た。嫌な予感を察したのか、思いっきり身を攀じる出久。そのまま手を振り回し、透明なナニカを掴んだ。

「っける!」

「あすっ、ゆちちゃんか!」



「ひゃひゅがねみどりひゃちゃん」

障子の背中から現れたのは蛙吹だった。いや、正確には蛙吹の頭が出てきた。口から伸びた長い舌は出久に掴まれている。喋りにくいのだろう、微妙に聞き取りにくい。

「なんで透明になってやがる!？」

「『保護色』だ!捕食者から身を守る為の習性!」

「なんで服まで透明になってんだよ!？」

「だっへ私、ひまひやだきやだもの」

「二はっ?」

ひまひやだきや——今裸?その言葉に思わず間抜けな声を上げた俺達(発目は動揺していなかった。女としてどうなんだろうか)。出久は思わず舌を離してしまう。

「スキありよ」

「つうあっ!？」

——ヒュヒュン!

再び透明になり、こちらに遅い来る不可視の攻撃。障子自身更に接近してきているので攻撃の感覚はさらに短くなる。出久は何とかハチマキは死守しているものの、反撃できるような状態ではない。

さらに——

「つぐー」

「オウツ!?!なんですかコレは!？」

「これ??峰田くんの『もぎもぎ』!」

「大正解だぜオマエらア!!」

そう言っつて峰田が顔を出したのは障子の服の中から。首元からニユッと顔が生えてきた。

「服の中!?!アリなのかそれ!？」

『アリよ!』

ミッドナイト審議は瞬きの間に可決された。普通なら考えつかないような作戦だ。その特性上騎馬の顔が確実に塞がるが、障子の『複製腕』なら眼もコピーが可能。つまり本体の視界が塞がる程度なんて事ない。現にギョロギョロとした眼が複数こちらを向いている。

そうこうしている間にも周りにも周りにももぎもぎで覆われ、足の踏み場がみるみる無くなる。騎馬として複数人固まっている俺達には致命的だ。その点単独馬の障子はある程度自由に動けるのでこの程度では歯牙にもかけない。早くも絶体絶命である。

「ちっ、出久！眼だけ成れ！」

「——眼??、っそうか偏光視!!」

虫の瞳——複眼と呼ばれるそれには『光の波』を捉える機能があると言う。蛙吹の『保護色』はどちらかと言えば光の波を歪めて透明になっっている様に思える。ならば偏光視を持つ虫の複眼なら——あ。

「やっべ、出久スト「ふおおお!!」遅かったか！」

顔を赤くして思いっきり仰け反る出久。舌が来ていたのだろう、頭上で風切り音がした。仰け反ったお陰で回避出来たようだが。運がいいんだか悪いんだか??いや、いいのか?なにせ蛙吹の全裸を思いっきり見たんだから。

光の波を見れるんだからそりや当然歪められた光の波の所に何があるのかも見えるわな。

「蛙吹ー見えてんぞ?!ー」

「なアにイツツツツ!!」

「っ!!」

真っ先に反応したのは峰田。顔を出して障子の背中側を覗いている。続いて聞こえたのは羞恥の声。蛙吹の声だろう。

「って、動揺してる間に撤退だ!!二人ともブーツ脱げ！」

「くっ、背に腹は帰られませんか！」

「えっちょ、デクくんどしたん!？」

「出久、どうだった？」

「ぴ、ピンク色で生えてなかつ、て何言わせるのさ!!？」

「くくくくッツツ!!」

「ご、ごめん梅雨ちゃん!!わざとじゃなくて、その、全部木場っちゃん  
の差し金なんだ!!」

「いや仕方ねえだろ!? ああでもしなきや攻撃見きれなかったんだから

「てか役得だろ!!」

「論理的に問題ありまくりだよっ!?」

「み、見たのか緑谷!?ゆ、許ゆるっせんつ羨せんっ!!」

「うわあ??峰田くん血涙流しとる」

「ほら皆さん!モタモタしてるうちに敵が来てますよ!」

この時、この中で1番まともだったのが発目という驚愕の事実だった。

『おうおう、なかなかテクニカルなプレーが出てんなあ!』

にしても狙われやがるぜ緑谷チーム!』

『やはり1000万の存在が大きいですね。皆次への切符を手に入れようと必死です』

『それじゃあ、ここで現在の保持Ptを見てみようか!!現在——  
あら?』

|            |            |
|------------|------------|
| 1 : 緑谷チーム  | 1000万335Pt |
| 2 : 物間チーム  | 1345Pt     |
| 3 : 鉄哲チーム  | 1275Pt     |
| 4 : 轟チーム   | 690Pt      |
| 5 : 拳藤チーム  | 660Pt      |
| 6 : 鱗チーム   | 0Pt        |
| 7 : 爆豪チーム  | 0Pt        |
| 8 : 小大チーム  | 0Pt        |
| 9 : 角取チーム  | 0Pt        |
| 10 : 峰田チーム | 0Pt        |
| 11 : 心操チーム | 0Pt        |
| 12 : 葉隠チーム | 0Pt        |

『なんか緑谷チーム以外パツとしませんねえA組』

『てか爆豪オ!?どうしたお前!?!』

「単純だよ、A組」

「あ?」

目の前の騎馬に気を取られていた爆豪は、己のハチマキが失われた事を理解するのに数瞬要した。自他ともに認める実力者である彼が有するその高すぎるプライドが認識を拒否したのかもしれない。が、目の前の光景がハチマキを奪われたということを否が応でも理解させてくる。

「テ??メエコラ返しやがれ殺すぞ!!」

「ちよ、落ち着け爆豪!」

「あーヤダヤダこれだから野蛮人は。先日の件と言いホント、ヒーロー科を名乗らないで欲しいなア恥ずかしいから」

「ああ!」

「気に入らないことがあつたらそうやって凄んで暴力に訴えて???ガキじゃないんだからもう少し考えたら?あ、そう言えば君ってヘドロサイラン敵の時の人だよな?ねえねえ参考に聞かせてくれない?年一で敵にサイラン襲われる気分つてのを「うるせえ」フボオツ!」

物間がセリフを言い終わる前に彼の顔面に爆破を放つ爆豪。額には青筋が浮かび、その手からは感情に呼応するように絶え間なく爆破が漏れ出していた。

「何も知らねえ素人がデけえ口叩いてんじゃねえクソが!!鳥顔!」

「うむ、既に全て回収し終えた」

「こんなカス共ほつといてサツサと1000万行くぞクソ髪!!」

「マジか!?今のままでも次に行けんだぞ!」

「馬鹿かテメエらは!オレが取るのは完膚無きまでの1位なんだよ!!」

「こんな程度で満足してられつか!!」

「おおおお!!アツいな爆豪!!よっしゃ、行くぜ瀬呂、常闇!」

「影響受けやすすぎだろ!」

「致し方無し。情熱の漢は止められん」

哀れ物間。煽るだけ煽っておいて瞬殺である。

これが切っ掛けだったのか、状況は大きく動いた。

所変わって緑谷チーム事俺達のチーム。向こうでは物間とかい

うアホが爆豪に瞬殺されていた。俺達はと言うと、

「で、まあ来るよなあ?」

「??轟くん」

俺達に立ちはだかる最強の壁・轟チーム。この競技最大の敵。

「そろそろ、奪らせてもらう」

轟の瞳は本人の右半身と同じく、凍える様な冷気を発していた。

『状況が動いた!!物間、あっさり爆豪により瞬殺!!』

中央付近では緑谷チームと轟チームが対峙!それを囲む様に複数のチームが迫るー!!!』

『イヤホント、何がやりたかったんでしようね物間くん。噛ませ犬でもうちよつと粘りますよ』

物間フルボッコである。そんな中イレイザーと言え、

『?? (\*——) z z z』

??とつくに夢の中であつた。

「上鳴、放電準備。八百万は絶縁頼む」

「既に出てますわ!」

「ああ、行くぜ!!」

——バリバリバリバリ!!

上鳴を中心に電撃が放たれる。その中心たる轟チームの面々は上鳴以外全身を絶縁シートで覆っていた。故に無傷。しかし周りはそのうはいかない。近寄ってきた騎馬はほぼ全員がその餌食となる。俺達も例に漏れず食らってしまった。

「ぐ、おおお!」

「ま、ずい!氷が来る!」

「——!」

出久の声に反応した時には既に遅く、八百万が用意したのであろう棒を伝って氷が地面を走り、大半の騎馬の足を凍りつかせている。轟チームは俺達に向かって駆け出し、次いでとばかりに拳藤チームのハ

チマキをかつさらって行った。

「貰ってくぞ」

「あ、俺らのハチマキ！」

「ちくしょうやられた!」

これにより轟チームは2位に上昇する。が、奴らはそんなものには興味無いと言わんばかりに俺達の元へ一直線に迫って来た。

「??お前ら動けるか?」

「ごめん、足は凍つとるし身体も痺れてまともに動かへん?」

「お、同じくです社長?」

「出久は?」

「なん、とか。木場つちゃんは?」

「俺も正直やべえ。痺れきってまともに動けん。多分、4割出せば良い方かもしれねえ」

不味いなんてもんじゃない。競技中ピンチは何度もあったがこれ程じゃなかった。身体はマトモに動かせず、多少の距離逃げても氷結に追いつかれる。どうする?時間は残り1分程度。ハッキリ言つて絶望的な時間。今の俺達では1分すら厳しい。

——俺達が必死に考えを巡らす中、1人だけ迷わず動いた者がいた。そう、

「——ウチが、やる!!」

——この耳郎響香である。

「うっわー??完全に凍っちゃってる?」

「ヒマン葉隠??もう??眠い??」

「?!?」 ↑ 『ごめん、氷壊せない』的な事を言っている。

??!?!?こちらは葉隠チーム。漂うのは諦めの雰囲気だった。葉隠・甲田は破壊力のある攻撃を持たず砂糖・耳郎は既にかなり消耗している。純粹に、逆転が不可能だと悟ってしまった面々は既に諦めきっていた。

ただ1人——耳郎響香を覗いて。

「??皆、耳塞いで」

「え？響香ちゃん？」

「?!」↑『何をする気なの耳郎さん?』的な事を言っている。

「?!」か八か、最後の勝負に出る。上手く行けば、1000万取れるかもしれない」

「そんな奥の手があったの!?ならなんで?」

「ごめん。1発切りの隠し玉だったから。一発撃つたらもう撃てないと思う。それに?!正直成功確率は凄く低いと思う」

それでも――

「――ウチを信じてくれる?」

「――持つちろん!!友達を信じるのは当たり前じゃん!」

「?!」↑全力で首を縦に降っている。

「おう?!?とりあえず?!?眠い?!?」

「砂糖も限界、時間も無い。これが正真正銘の一発勝負?!!」

「おっけ!私達はどうすればいいの?」

「耳塞いで、何時でも行ける様に構えといて」

「了解!」

「頼むよ?!」

そう言って耳郎は自身の喉にイヤホン||ジャックを突き刺す。同時に、限界まで息を吸い込見始める。その行動は誰にも見られず、轟達に皆が注目しており、完全に意識外に置かれていた。

――それが、勝敗を分けた。

『ハートボイススプレッシャー』

「――ツ!!!!」

!!!!

耳郎の口から放たれた“声”。限界まで増幅した心音と共に指向

性を持って緑谷・轟両チームへと放たれた。その余波だけでも大地が割れ、遠く離れた観客すらも耳を塞ぎ、近くのチームの人間は崩れ落ちた。

それをモロに食らった両チームは全員がフラフラとマトモに立っていない状態であった。

「と??お?る!!」

「うん!奪るよ1000万!!」

多大な負荷をかけたからか、喉部分は内出血を起こし、喀血が口から溢れ出す。それでも尚、1000万<sup>トッ</sup>を<sup>ブ</sup>目指し少女はかけ続けた。

勝利への執念のみを瞳に宿して。

しかし、執念ならこの男——木場勇治も負けてはいなかった。音の衝撃で脳を揺さぶられ、平衡感覚を失って意識すら朦朧とする中、彼が立っていられたのは執念によるものだろう。彼は気づいていないが、麗日・兎目両名は気絶しており、緑谷は木場よりも重症。戦えるような状態ではない。

(負ける?こんな所で?)

冗談じゃないと心中で吐き捨てる。何もなせず、己の目的の一端すら見ずに敗北するなど許されぬ。

(世界を、変える)

怪物と呼びたければ呼べばいい、人でなしと罵りたければ罵ればいい、ただ己の<sup>仮面ライダー</sup>憧れを否定させない為に、悲しみを増やさない為に。どれだけ罵倒されても構わない。ただ、己の正義を成せればいい。だからこんな所で——

「——負け、れねえんだよオオオオオオ!!!」

それはほぼ無意識の行動であった。耳郎によつて砕かれた氷から足を引き抜き、思いきり高く振り上げ振り下ろす、地面への全力の<sup>踏みつけ</sup>スタンプである。全力で地面に叩きつけられたそれは、割れた地面を砕き、完全に崩壊させた。

「う、わわわわわわわわっ!!」





『4位!てつて——つてアラア!?心操チーム!?いつのまに!』

『いや気づいとけよ?』

『ぶっちゃけ緑谷チームと轟チームに夢中で全然見てませんでしたか  
らね』

「??なあ、大丈夫かコイツら?」

「平気でしょ???多分」

「——」 ↑魔術で心操の分まで振動を流され食らった庄田

「——」 ↑魔術でアリアの分まで振動を流されて食らった尾白

『なんか色々あったっばいなあ??. まあいいさ!!これにて騎馬戦は閉  
幕!・1時間程昼休憩挟んで午後の部だ!確りメシと回復済ませとけ  
よ!!』

—— 騎馬戦閉幕。